
ヘタレな勇者

藤森 応輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタレな勇者

【Nコード】

N1235S

【作者名】

藤森応輝

【あらすじ】

異世界に飛ばされた魔法学校の劣等生ファリスはヘタレだった。しかし飛ばされた世界は魔法の無い世界。

別段新しい力を授からなくてもその世界では無敵だった。

でも性格はやっぱヘタレのまま。

そこでティーナという女性と出会う。

彼女はある貴族の娘で、今その領地が他の貴族の軍勢に攻められていると言う。

物語は、ヒロイン、味方、敵、そして勿論主人公も含めた全員が「

主人公がヘタレである」という事を軸に話が進みます。

挿絵画家からの強い要望で「草食勇者」から改題しました。

※ちよくちよく改訂しますが、基本誤字・脱字・描写不足の修正なので、ストーリーに変わりはありません。

1..ヘタレの日常

ここはエティエにある魔法学校の寄宿舎。

ある朝その寄宿舎で、ファールリスがすやすやと気持ちよく寝ていると、いきなり吹き飛ばされた。

「いったー」

すやすやとから、安らかな眠りになりかけたファールリスが、吹き飛ばされた時に床に打ち付けたところさすりながら辺りを見渡すと、同室のルービンがにやにやと笑いながらファールリスを見下ろしていた。

「アリス、いつまで寝てるんだよ？」

ルービンは大きく逞しい体型で力強く、魔法の成績もファールリスよりも遥かに良かった。

それに比べてファールリスは体格も貧弱で、魔法の成績も悪い。だがこれは、ルービンが特別文武両道で、ファールリスが特別どちらもダメと言う訳ではない。

魔法の強さはその者の生命力で決まる為、力強く逞しい者ほど魔力も強くなる。逞しくて魔法の成績が良いのも、貧弱で魔法の成績が悪いのも当たり前だった。

そしてルービンは貧弱で魔力の弱いファールリスを馬鹿にして、女の子みたいに「アリス」と呼んでいるのである。

とはいっても、実際に女の子の様な容姿をしているわけではない。

確かに、肩まである金髪と、パツチリとした黒い瞳、そして小さな唇は一つずつを見れば、女の子っぽい物を感じさせたが、全体を見ればやっぱり男の子だった。

一言で言えば、多少は見られる容姿の弱々しい印象の男の子。といった感じだ。

「何時なの？」

ファリスはそう言いながら、打ち付けた所をさすった。

「もう6時だよ」

「6時？ まだまだ寝ていられるじゃないか」

だがファリスが不満を口にした瞬間、ルービンの手の平からファイヤーボールが連射され、ファリスは再度吹き飛ばされた。

しかも連射されている為壁に縫い付けられる様にしてファイヤーボールの食らい続ける。

「いっ痛い！ 熱い！ ルービン止めてよ！」

だが、苦痛に顔を歪ませながら訴えるがその願いは叶えられず、縫い付けられた壁からはギシギシという軋みがファリスの背中に感じられた。

ファイヤーボールは名前の通り、炎で作られたボールだ。というより、それ以外の物だったらむしろ不思議である。

生身の体に直撃すれば、当然大やけどを負いそうなものだが、ファリスの体には防御結界が張られている。

防御結界は一番基本的で簡単な魔法で、一旦発動すれば意図的に

解除しなければ死ぬまで解かれる事はない。

もちろん、寝ている間もだ。

それゆえ寝ている所を吹き飛ばされてもファリスは、大怪我もせずに打ち付けたところをさする程度ですんだのだ。

その結界のおかげで、今もファイヤーボールの連射を食らっても丸焼けにならずに済んでいるが、やはり痛いものは痛いし、熱いものは熱い。

「この程度の魔法を防ぎきれないなんて、相変わらずお粗末な結界だな」

ルービンは笑いながらやっとファイヤーボールの連射を止め、ファリスは縫い付けられていた壁から解放された。

ルービンが言ったとおり、魔力の強い者の結界ならば、この程度のファイヤーボールは、後ろから当てられたとしても、当たった事にすら気付かないだろう。

「うだうだ文句を言わずに、早く起きろよ」

ルービンが急かす様に言うと、ファリスはファイヤーボールの所為でひりひりする体をさすりながら、不思議そうに首を傾げた。

「でも、こんなに朝早くからどうしたって言うの？」

「今日は倶楽部で試合があるんだよ」

ルービンが相変わらずファリスを見下ろしながら言う。

だがルービンの言葉にファリスはさらに首を傾げた。

ルービンとファールリスは同じ倶楽部ではない。というよりファールリスはこの倶楽部にも入ってはいない。

「それと僕がどう関係があるの？」

「今日の試合は、卒業した先輩達が来るんだよ。お前も試合の準備を手伝うんだよ！」

ルービンは当たり前の事のように言い、ファールリスは内心「えー」と不満の声を上げたが、実際に声に出してはまたファイヤーボールの連射を食らうだろう。

やむなく服を着替えて、ルービンと共に寄宿舎を出て学校へと向かった。

とは言っても、歩いていくわけではない。この程度の距離なら瞬間移動の魔法でひとつ飛びだ。

もっとも移動距離も魔力に比例し、魔力の低いファールリスは1年前までは、ひとつ飛びではなく、ふたっ飛びだったが。

学校に着くと、すでにルービンの倶楽部仲間が待ち構えていた。その者達もルービンと同じく魔法の成績優秀者ばかりだった。つまり大きく逞しい体格をしているという事だ。

「よう！ ルービン遅いじゃないか」

「俺の所為じゃねえよ。こいつがとろいんだ」

（ええ？ 僕の所為なの？）

あまりに理不尽な言葉だが、ファールリスは口を噤んだ。

下手に言い返し、この人数からファイヤーボールの連射を食らってはたまったものでは無いのだ。

そしてみんなが集まると、試合の準備が始まった。

試合の準備には魔法は使えない。魔法で出来る事は、基本的にファイヤーボールを代表とする攻撃魔法。

そして防御結界を代表する防御魔法。それと瞬間移動と最後に治癒魔法だ。

魔法で物を自由に動かすという事は出来ず、料理などの物を出現させるという事も出来ない。日常生活の大半は自分達の手で行わなくてはならないのだ。

ファールリスは他の部員達と共に、体育倉庫に向かい、扉を開けると体育倉庫の中にはかび臭い匂いと、埃っぽい空気が充満していた。

みんなはそのかび臭く埃っぽい空気を吸うのが嫌なのか、必要な道具が置いてある所までの僅かな距離すら瞬間移動の魔法で移動し、その道具をすばやく掴んで息を止め足早に体育倉庫を出て行く。

ルービンは今日は先輩がくると言っていたが、ファールリスが準備をしながら試合に出る選手の話に聞き耳と立てたところによると、どうやら試合の相手というのが、その先輩らしかった。

卒業生が、後輩達を久しぶりにいっちょよう揉んでやろうという事らしい。

試合は、双方6人ずつで、一つのファイヤーボールを打ち合って行われる。

相手が打ち返してきたファイヤーボールを拾えなかった方が負けという、どこかで聞いたことがある様なルールだ。

だが、ファイヤーボールは打ち合うたびに、打った選手の魔力が加算され、その威力は増してゆく。

そしてどの程度威力を増させるかは、打つ者のさじ加減だ。

当然みな結界を張っているが、威力を増していくファイヤーボールはついにはその結界を打ち破る。

その為、打ち合いには駆け引きも必要だった。

ファイヤーボールの威力は加算されていく。全力で打ってそれで決まればよいが、もし打ち返された場合は、さらに威力が増したファイヤーボールが返って来る。

みな始めは魔力をセーブして打ち合って、相手の結界を破れそうな威力で自分のチームが打ち返せる様に、目まぐるしく頭を使いながら加算する魔力を計算し、打ち合う事が要求される。

だが試合の準備が終わってまもなく始まったルービン達在校生と卒業生達の試合は、その様な駆け引きもなく一方的な試合で終わった。

そもそもルービン達と卒業生達とは魔力が違いすぎた。

駆け引きも何もない、卒業生の一打目の全力のアタックが、ルービン達在校生の結界をいとも容易く破ってしまう。

これでは勝負になるはずがない。

勿論、ファイヤーボールに結界が破られるという事は、炎の塊が生身の体に触れるという事だ。大変な火傷をする事になる。

その為試合をする時には魔力の強い、治癒魔法の得意な者が控えている。

そしてその治癒魔法は、相手の体を抱きしめて自分の魔力を相手に注入する事によって、怪我や病気を治すという物だ。

今日は特別に、卒業生の人達が治療してくれる事になっていた。きっとはじめから在校生では自分達の相手にならず、結界が破られる者が続出すると分かっていたのだろう。

だがここで重要な問題がある。

それは「力強く逞しい者ほど魔力も強くなる」という事だ。

「先輩！ いいです。自分でなんとか治しますから！」

「何を言ってるんだ。遠慮するな。そんな大火傷を自然治癒なんかで直そうとしたら何ヶ月かかかると思ってるんだ！」

在校生達は大火傷を追いながらも後ずさり、卒業生達はわざわざ上半身裸になり筋肉を見せつけながら追い詰める。

傷付いた体に鞭打って、這う様に逃げまどう在校生。

それを自らの鍛え上げられた胸筋をバチバチ腕で打ち鳴らし、自らの筋肉を誇示して笑い声を上げながら追い詰める卒業生。

そこかしこで、在校生達の悲鳴がなっていた。

ファールリスが恐る恐る悲鳴のなる方向を見ると、筋肉隆々の卒業

生に怪我をした在校生が抱きしめられている。

卒業生達が一撃で在校生の結界を破るファイヤーボールを打てる
と言う事は、当然、在校生よりも遥かに魔力が強いと言う事であり。
イコール、在校生より遥かに力強く逞しい体格と言う事なのだ。

そしてその様な惨劇は一つではなく、あちこちで行われていた。

背後から抱きしめられている者。

正面から抱きしめられている者。

これが男女であれば絵になると思われる様な、傷ついた在校生を
その胸に抱く卒業生。といったものもある。

さらに恐ろしい事に、前後から2人の卒業生に抱きしめられてい
る者……。

まさに地獄絵図だ。

とはいえ、これは卒業生達がみな変な趣味を持っているという訳
ではない。

実はこれはこの倶楽部の伝統行事なのだ。

卒業生が在校生を痛めつけ、そして治癒魔法の為に抱きしめて、
嫌がる様子を面白がる。

ルービン達はこの後、その事を卒業生達から知らされるのだ。

在校生達は、今自分達が味わっている屈辱を次の在校生で晴らす
べく、今までにもまして練習に励むだろう。

そしてルービン達が卒業すれば、今度は今の卒業生の様に筋肉隆
々となったルービン達が、その時の在校生に同じ事をするのだろう。

だが、今はまだそれを知らされていないルービン達は、真剣に貞操の危機に怯えていた。

その様な目を覆いたくなる様な惨劇を人事として、彼なりに「可哀想に……」などと考えていたファリスだったが、彼の考えは甘かった。

一人ぼけつと立ち尽くすファリスを見つけた卒業生が、彼に声をかけてきたのだ。

「どうした？ お前は試合に出ないのか？」

「え？ 僕ですか？ 僕はこの倶楽部の部員では……」

慌てて否定するファリスだったが、ここでルービンが口を挟んだ。

自分達だけ貞操を散らされるのはごめんだと、ファリスを道連れにしようとしたのだ。

「なにしてるんだ、アリス。早く準備しないか！」

「ええ？ でも僕……」

「いいから、いいから。先輩！ 一つお願いします！」

ルービンが戸惑っているファリスを尻目に卒業生に頭を下げる。こうして、無理やりファリスは試合に出される事となった。

（どうして僕が……）

だが、人一倍ヘタレな彼は、今更「本当は違うんです！」とは言
い出せず、恐怖に身を竦ませながらも、流れに身を任せてしまう。

そして、コートの中でびくびくしながら構えるファリスに卒業
生の渾身のアタックが炸裂した。そして吹き飛ばされた。

> i 2 2 2 2 6 — 2 9 7 6 <

在校生達が、思わず「おー！」と歓声を上げるほど、吹き飛ぶ
ファリス。

卒業生達には歯が立たないとはいえ、倶楽部の在校生みな優等生
揃いだ。それゆえに、結界は破られてもその場で耐えれた。

しかし、劣等性であるファリスは、その場で耐える事すら出来
なかったのだ。

だが運の良い事に、なまじその場で耐える事が出来なかったファ
リスは、吹き飛ばされはしたが結界自体は破られることは無く、
熱いとは思いながらも大火傷はせずに済んでいた。

いや、やはり運は悪かったのかもしれない。

ファリスは吹き飛ばされた衝撃で、気を失っていた。

そして数十メートルも吹き飛ばされて、コートの柵すら超えて林
の向こうにある池に落ちた。

「アリス！」

さすがにこの状況にルービンもあせりを覚え、瞬間移動で池の淵
まで飛んできた。そしてそれに続いて在校生と卒業生も次々と瞬間
移動してくる。

そして池に沈んでいくファリスに向かってルービンが叫んだ。

「飛ぶんだ、アリス！」

瞬間移動で飛べるのは何も無いところだけだ。池の中には飛ぶ事は出来ない。

脱出するなら、池の中にいるファリスが自分で、池の外の何も無いところに飛ぶしかない。

だがそのファリスは気を失っている。

そして、ファリスが池から浮かび上がってくることは二度と無かったのだ。

その様な状況になる前に、誰かが瞬間移動ではなく泳いでファリスのところまで行って、ファリスを助ける事は出来なかったのか？

そう考えるのも当然だが、彼らにはそれが出来なかったのだ。

なぜなら、この池には落ちれば二度と這い出る事はできないという伝説があるのだから。

2..飛ばされたヘタレ

ファールリスが目を覚ますと、木陰に寝かされていた。

「……ここは？」

気が付いたファールリスの問いに、白髪交じりの男が答える。

「ここは、リリエルからヴィデンへと続く街道じゃよ。と言ってもこんな事くらい言わんでも分かるか。まあ起きたばかりで頭が混乱しとるのじゃろう。頭がはっきりしてきたら家に帰りなさい」

どうやらこの男が、気を失っていたファールリスを介抱してくれたらしい。

ファールリスがさらに辺りを見渡すと、森を切り開いて作られた道が左右に続いていて、その道の脇には、この男の物と思われる一台の馬車が止まっていた。

ファールリスにはまったく見覚えのない光景だった。

「すみません……まったく分からないです。リリエルやヴィデンってなんですか？」

「なに！ 分からんじゃと？」

「はい。まったく」

「それは困ったの。ではお前さんはどこから来たのかね？」

この言葉に、ファールリスは必死で記憶を手繰った。

「たしか先輩に吹き飛ばされて……」

「吹き飛ばされた？　どこからだい？　たいした怪我はしてない様じゃが」

ファールリスが改めて自分の体を見直すと、確かに怪我はしていないようだ。

（いくら結界を張っていても、あれだけ吹っ飛ばされたら少しくらい怪我をしてそうなんなんだけど……）

吹き飛ばされた瞬間に気絶したファールリスは、その後自分が池に落ちた事を知らなかったのだ。

そこに女性の声が、割って入った。

「ボルジ、何をしているの？　気が付いたのなら先を急ぎましょう」

ファールリスが声のする方向を見ると、一人の女性が馬車の窓から顔を覗かせていた。

その女性は茶色い髪と、それよりも濃い茶色の瞳をした、気の強そうななかなかの美人だ。年のころは、ファールリスより3つか4つほど上だろうか。

> i 2 2 2 2 7 — 2 9 7 6 <

「お嬢様、気が付いたのは良いのですが、どうやらこの近くに住んでいる者ではないらしいのです」

するとその女性も、少し意外そうな顔になったが、すぐに表情を改めた。

「そうなの？　でも、どちらにしろ気が付いたのなら、自分の足で

帰れば良いじゃない」

「それはそうなのですが、どうやら頭が混乱しているらしく……」

「混乱ってなによ？　ねえあなた、どこから来たの？」

「エティエにある学校で……」

「エティエ？　知らない地名ね」

女性は怪訝そうな顔をして、馬車の窓からファリスをじろじろと上から下まで見渡す。

「確かに……ここらへんではあまり見ない服装ね」

「え？　あ、そうかな？」

女性の言葉にファリスは改めて自分の服装を見渡した。

確かにファリスもこの2人の服装が随分古めかしいとは思ったが、まあそう言う好みなのかな？　程度に思っていたのだ。

しかしどうやらこの2人、と言うより、この女性にとってはファリスの服装は、好みという事では済まされない範疇の違いらしい。

「そんなに変な服装ですか？」

ファリスはそう言いながら首を傾げた。

「まあいいわ。来れたんだから帰れるわよね？」

だが、ファリスが不安げに聞くと、その女性はそう言って、すぐに話題を切り替えた。

もしかしたら、ファリスの不安げな表情が、服の好みにけちを付けられて悲しんでいる表情と受け止められたのかも知れない。

「それが、どうやってここに来たのかが分からなくて……」

「どうやって来たのかが分からない？」

「……はい」

ファリスは申し訳なさそうに言ったが、女性はさらに怪訝そうな顔をし、そしてボルジと呼ばれている男を手招きして呼び寄せた。

そして、ファリスに聞こえない様に小さい声でこそそ話を話し始め、2人は話しながらも時折ファリスの方をちらちらと覗き見している。

そして暫くすると、女性が馬車から降りて、ファリスに近寄ってきた。

「あなた、どうやって来たかが分からないんだから、自分の家への帰り方も分からないのよね？」

「はい。……そうです」

「そうよね……」

その女性は、そう言って少し俯きため息をついた。

「仕方が無いわね。良かったら私達についていらっしゃい。食べる物の予備くらいはあるから、近くの村までは連れてって上げるわ」

その言葉にファリスはペコリと頭を下げた。

「はい。よろしく願います」

ヘタレであるファリスに、今自分が置かれている状況を自力で解決するという発想はなく、その女性の言うとおりにするしかないか

ったのだ。

「じゃあ、早く馬車に乗ってちょうだい。これでも先を急いでるんだから」

女性はその言いながら、踵を返し足早に馬車に向かう。確かにかなり急いでいる様である。

そしてファリスも「あ、すみません」と言うと、足早に馬車へと向かい、こうしてファリスは、彼ら2人の馬車に乗せて貰う事になったのだった。

もっとも、ファリスは馬車の中ではなく、馬車を操るボルジという男の横に座らされた。

とてもファリスがこの女性を襲う様には見えないが、見ず知らずの男を乗せるのだから当然の配慮といえる。

ボルジの横に座り、ゴトゴトと進む馬車に揺られながらファリスは、ボルジから色々な話を聞いた。

女性の名前は、ティーナというらしく、なんとリリエルという領地の貴族のお嬢様という事だった。

そしてヴィデンという領地に住む貴族の元へ嫁ぎに行く途中だと言うのだ。

とはいえ、ファリスには全てまったく聞いた事の無い地名だ。

「さっきティーナさんと言ってましたけど、エティエという地名は知らないんですね？」

「エティエ？ ああ、知らんな」

（もしかして、吹き飛ばされた時にものすごく遠くにまで飛ばさ

れちゃったのかな……)

フアーリスは自分の不幸を呪った。

まさかルービンに無理やり倶楽部に付き合わされた挙句、この様な目に合うとは。

「でも、その割にはわびしい旅ですね」

嫁ぎに行くという事に対してフアーリスが、そう正直な感想を述べると、ボルジの表情は曇った。

「うむ。実はなお嬢様の御家の領地であるリリエルが、ムダルを領する貴族からの侵略を受けての……、ヴィデンの貴族へと援軍を要請したのじゃが、その見返りにお嬢様を嫁に欲しいと言うて来てな。やむを得ずお嬢様をヴィデンへと御送りしておるのじゃ」

フアーリスはボルジの言葉に驚いた。

(貴族同士の戦い？ 今時そんな事が起こっている地域があるんだ？ 僕はいたいどれくらい飛ばされちゃったんだろう……)

フアーリスは自分の不幸をさらに呪ったが、同時に素朴な疑問も沸いて来た。

「貴族が居るなら、王様とかも居るんでしょ？ 王様は止めないんですか？」

「勿論、王は居るには居るが、王の力が弱くての。貴族同士の戦いに口を挟めんのじゃ」

ボルジはそう言いながらため息を付いた。

「そんな事があるんですか」

「うむ。そして戦いの最中にお嬢様の護衛に大部隊をつける余裕は

無くての。とはいえ少数の部隊では敵襲があれば歯が立たん。ならばいつその事、見つからない様に地味に行こうという事になったのじゃ」

「なるほど」

でもファリスは、さらに素朴な疑問が湧き上がっていた。
行きたい所があるならば、瞬間移動の魔法で行けばいいじゃないか。どうして馬車なんかに乗っていくのだろうか？

「もしかしてお2人は、瞬間移動が苦手なんですか？」

「え？　なんだって？　瞬間？」

ボルジがファリスの方に耳を突き出す様にして、聞き返した。

「瞬間移動です！」

ファリスは、そう言って大声で叫んだ。

この男の人はもしかして耳が遠いのかと思ったのだ。

「え？　瞬間に移動？　だからこうやって急いでおるんじゃないが」

「いえ。ですからね。瞬間移動の魔……うわっ！」

突然馬車を引く馬が嘶き、立ち上がったかと思うと横倒しに倒れた。

ファリスが見ると、馬には棒が刺さっている。

「ムダルの奴らか！」

どうやら、目立たない様に地味に行こうという策は、残念ながらもうまく行かなかった様である。

ファリスが前を見ると、前方から木の棒を曲げて紐を括りつけた物や、長い棒の先に刃物を付けた物を持った男が、数十人馬に乗りこちらに向かってきていた。

馬が倒れた為、馬車も大きく揺れ、馬車の窓からティーナという女性が「なにかあったの？」と顔を出した。

「お嬢様！ ムダルの奴らです。見つかりました！」

「なんですって！」

その言葉にティーナも驚きのあまりそう叫んだ。

そして、男達が来れば意味が無いだろうに、避難のつもりなのかボルジが馬車の中に逃げ込む。

そしてファリスは、わが身の運命を呪っていた。

見れば男達はみな筋肉隆々で魔力も強そうだ。彼らが放つであろうファイヤーボールの前に、自分の防御結界など、紙切れほどの役にも立たないだろう。

勿論、ファリスは瞬間移動で逃げる事は出きるのだが、ティーナという女性も、ボルジという男もなぜか瞬間移動で逃げようとはしない。

ヘタレ過ぎるファリスは、他の人が逃げないのに自分だけは逃げると判断すら出来なかったのだった。

だが不思議な事に彼らは近寄ってきててもファイヤーボールを放たず、サンダーボルトも放たない。

そしてなぜか木の棒を曲げて紐を括りつけた奇妙な物に、細い木の棒を引っ掛けてファリスに向かってその木の棒を飛ばしてきたのである。

いくらファリスの防御結界が弱くても、飛んでくる木の棒などを防ぐのは訳がない。

木の棒は皆ファリスの体に当たったかと思うと、カンカンカンと音を立てて弾き飛ばされ地に落ちた。

ファリスがなぜ男達はこんな事をするのだろうかと思いに思い首を傾げたが、男達は木の棒がファリスの体に弾き返されたのに驚いている様だった。

そして男達はみな気味悪がっている様子で、ファリスを遠巻きにして近寄ってこない。

だがファリスには、男達の意図がまったく分からない。

（どうしたんだろう？　もしかしてこちらが手も足も出ないと思つて、ふざけてるのかな？）

だが、暫くすると男達の中で一際体が大きく、逞しい男が、長い木の棒の先に刃物を付けた物を振り回して、ファリスに近寄ってきた。

「我が名はムダルにこの人ありといわれたディエク！　どの様な手妻を使ったかは知らぬが、この槍の錆にしてくれるわ！」

ファリスは（槍ってなんだろう？）と思いながら、馬に乗り近寄ってくる男を注意深く見つめた。

男が魔法を撃ってくれば何とか避けなくてはならない。なにせファリスの防御結界は魔法に対して、紙切れほどの防御力も無いのである。

だが不思議な事にその、ムダルにこの人ありのディエクは、魔法を放たず刃物の付いた木の棒でファリスを叩いて来たのだ。

そして勿論、ファリスの防御結界でも、その程度ならば防ぐの

は訳がない。

ファールリスを力いっぱい棒で叩いたディエクは、鉄の塊を叩いたかのような衝撃を棒を持つ手に受け、棒を取り落としてしまった。

しかも、それがよほどの衝撃だったのか「ツウガー！」と叫ぶと馬からも落ち、右腕を左腕で抱え痛みにもた打ち回っている。もしかしたら、腕の骨が折れたのかもしれない。

（冗談とかでやってるわけじゃなさそうだ……。もしかして！）

ファールリスはディエクの事はほって置いて、彼らを遠巻きにしている男達にファイヤーボールを放った。

ルービン達、倶楽部の優等生達に放てば、彼らの居眠りさえ妨げる事すら出来ぬ威力のファイヤーボールをだ。

「ドッウワ！」

だが、ファールリスの手から放たれた、その最弱ファイヤーボールを受けた男達は、吹っ飛び地に伏した。

さすがに死んだりはしていない様だが、大火傷をおったらしくのた打ち回っている。

ファイヤーボールの的にならなかった男達も慌てふためき、その挙句落馬する者まで居た。

「なんだあの者は！」

「魔物か！」

だが、その言葉はファールリスの脳裏には届かず、ファールリスは呆

然としながらもこの状況について考えた。
そしてやっと理解した。

遠くに飛ばされたんじゃない。

魔法の無い、別の世界に飛ばされたのだと言う事を。

3..ヘタレ発覚

「あのー。敵は逃げた見たいですけど……」

ファールリスは、馬車の中で最早これまでと、身を縮ませていたティーナとボルジに声をかけた。

「敵が逃げたですって！」

ティーナが驚いて馬車から出ると、たしかに敵は跡形も無く消えている。

ディエクをはじめ負傷した者達を、負傷していない者達が支えながら逃げ去ったのである。

「どういう事なの？」

「僕がやつつけました！」

そう言ってファールリスは胸を張った。

ファールリスは有頂天になっていた。

今まで劣等性として過ごし、活躍するということなどなかったファールリスだ。

それが貴族のお嬢様を助けたのだ。御伽噺の王子様みたいじゃないか！

「どうやら……本当に追い払ってくれたみたいね。でもどうやって追い払ったの？」

ティーナはそう言って、怪訝そうにファールリスを見つめた。

途中で拾ったこの男の子は、とてもではないが、数十人の騎士達を追い払えるほどの歴戦の勇者には見えない。

若い天才剣士というわけでもないだろう。

そもそも武器らしい物をまったく手にしていないのだ。

「魔法で追い払いました！」

ファールリスはさらに胸を張って答えたが、ティーナにとっては「何言ってるの？ まだ頭が混乱してるの？」だ。

ティーナはさらに怪訝そうな表情になり、数度瞬きをすると改めてファールリスを見つめて問いかけた。

「魔法ってなんなのよ？」

ティーナにとっては当然の質問だが、ファールリスにとっては当たり前すぎて説明するのが難しい。

まるで「空気ってなんなのよ？」と聞かれている様だ。

「えーと。生命力を魔力に変換してね。それを放出して魔法にするんですよ」

「魔力ってなんなのよ？」

ティーナの質問にファールリスは頭を抱えたが、はたと気付いた。そしておもむろに、少し離れたところにある岩に手をかざした。

ティーナが「なに？」と思っていると、突然ファールリスの手から火の玉が打ち出され、岩に当たってはじけ飛んだ。

だがその岩の表面は焼け爛れていた。

ファールリスは、説明するよりも実際に見せた方が早いと思ったのだ。

（あれ。かっこよくファイヤーボールで、岩を砕いて見せたかったのに、僕の魔力じゃ弱すぎて、岩が砕けないや）

だが魔法を知らない者にとっては、岩の表面を焼け爛らせるだけでも十分恐るべき威力だ。

ティーナもボルジも目を見開いて驚き、そしてまさに恐る恐るという感じでファリスに視線を移した。

（あれ？ 怖がらせちゃったのかな？）

2人の反応に焦った、ファリスが「いえ。大丈夫ですよ」と近づこうとすると、2人は脅えた様に後ずさった。

「いやいや、大丈夫です！ 僕御2人になにかしようなんて考えてないです！」

「本当なの？」

だが、そう言いながらも、その表情は相変わらず脅えたままだ。

ファリスは、うんうんと頷きながら「本当です。本当です」と一生懸命に同意する。

「本当だなんて言っても、信用できないわ！」

ファリスは「本当なの？」と聞いたのはそっちじゃないかと思ったが、口には出さずどうにか信用して貰おうと、必死で何度も説明を繰り返した。

なにせ、魔法では食べる物を用意できない。

是が非でも、彼らと一緒に連れて行ってもらって、食べ物を貰わなくてはならないのだ。

ファリスが、自分は別の世界からなぜかこの世界に飛ばされたらしいことや、魔法にはどの様な物があるかを洗いざらい喋った。

焦った様に喋るファリスを見て、逆に2人は落ち着いてきた様だが、やはりまだファリスを信用はしきれないのか、中々ファリスに近寄ろうとまではしない。

だがファリスがさらに喋っていると、今までファリスの話を聞きながら考え込んでいた様だったボルジがファリスの話を遮った。

「ちょっとここで待っていなさい。お嬢様と2人きりで話がある」

そしてファリスから離れたところで2人で話しはじめたのだ。

（ちゃんと連れて行って貰えるかな……）

ファリスは不安げに、相談しているらしき2人を眺めた。

ファリスが2人を見ていると、ボルジの話している事に、ときおりティーナが驚いている様だった。

そしてしばらくすると2人は戻ってきて、そしてティーナは口を開いた。

「まあ、仕方が無いわね。一緒に来なさい」

「本当！　ありがとう！」

「でも、馬車がダメになってしまったのでディエクには向かわず、リリエルに戻るわよ。良いわね？」

「そういわれてもファリスにとっては、どちらでも一緒の事だ。うんうん。と頷いた。」

そして馬車に積んでいた食料などの荷物を、ボルジとファリスで背負って、リリエルへと戻る事になった。

とは言っても、貧弱なファリスには沢山の荷物を持つ事が出来ず、ほとんどをボルジが持つ事になったが。

ちなみにボルジはティーナと2人きりで話した時に、ボルジはティーナにこう言ったのだ。

「あれほどの力があるならば、その力でわれわれを脅す事が出来るはずです。きっとあの男の子は底抜けのヘタレなのでしょう。ですがここで断っては、さすがにヘタレでも逆上しかねません。何かの役に立つかも知れませんか、とりあえずここは連れて行きましょう」

4…ヘタレの活躍

3人は、リリエルへと向かっていたが、リリエルはそれほど遠くはないらしい。

というよりも、リリエルからそれほど離れていなかったからこそ、リリエルを攻めるムダルの兵士に見つかったのだ。

「ティーナ。あとどれくらいなの？」

「リリエルを馬車で出発して、丸1日ぐらいの所で襲撃されたから、歩いて戻るなら5日くらいかしら？」

「えー5日も歩くの？」

「がまんしなさい！」

ファールリスはティーナにタメ口で喋っていた。

ティーナの事を「ティーナさん」と呼ぶファールリスに、ティーナが「ティーナで良いわよ」と言ったからだ。

普通だったらそれでも、遠慮して断るところだが素直なファールリスは、素直にティーナの言う事に従った。

そして名前を呼び捨てに呼ぶのに敬語はおかしいと、タメ口になったのだ。

そして「えー。でもー」と再度不満の声を上げたファールリスにボルジが「ファールリス、文句ばかり言うんじゃない！」と怒鳴り声を上げた。

「……すみません」

しかられたファリスはそう言う、しよぼくれた様にうな垂れた。

さきほどからファリスに対して、ティーナとボルジが少し偉そう気味に喋っているのには訳があった。

ボルジがティーナにこう提案したのだ。

「彼の力は強大です。逆らわれては大変です。ですが幸いな事に彼はヘタレです。ヘタレにいう事を利かせるには、高圧的な態度に出るのが一番なのです」

この人生経験豊富なボルジの提案により、ティーナとボルジはファリスに対して偉そうにする事にしたのだ。

こうしてティーナとボルジにやいのやいの言われながらもファリスはがんばって歩き続けた。

そして日も暮れたころ、ボルジが口を開いた。

「では、日も暮れてきたところですし、今日はここいらで泊まる事に致しましょう」

そう言って、道を少しそれた草むらに荷を降ろし、ファリスもそれに倣って荷物を置く。

（疲れた……。まさかこんなに歩かされるなんて……。明日も同じくらい歩かされるのかな……）

だが、ファリスが荷物を降ろしその場に座ってやれやれと思っていると、またもやボルジが怒鳴った。

「ファリス！ 何をやっ取る。かまどを作るのを手伝わんか！」

「あ。はい！」

ファリスが慌ててボルジの傍によると、ボルジは手の平ぐらいの大きさの石を積んで、かまどを作っていた。

「これと同じぐらいの大きさの石をもっと拾ってくるんじゃ」

その言葉にファリスは「はい」と返事をして、言うとおりに石を拾う。

そしてあらかた石を拾い終わると、今度は木の枝を拾ってくるように言われたので、また素直に「はい」と返事をして木の枝を拾ってきた。

「では、ファリス火を点けなさい」

出来上がったかまどを指差しボルジがファリスにそう命じた。

「え？ これに火を点けるんですか？」

「そうじゃ。出きるのじゃろう？」

「でもー」

ファリスは言いよんだが、ティーナが手を叩いて「まあそれは便利ね！」と言うので、ファリスはしぶしぶ極力威力を抑えてかまどに向かってファイヤーボールを放った。

そしてかまどを吹っ飛ばした。

例えば、ボールを20メートル「ぐらい」で止まる様に蹴る事は出きるだろう、10メートル「ぐらい」で止まる様に蹴る事も簡単だ。

しかしボールを1センチ「ぴったり」で止まる様に蹴るのは至難の業だ。

そして当然ファリスに、その様な至難の業ができる筈も無かったのだ。

「……」

「……」

「ファリス!!」

呆然としていたティーナとボルジが、我に返ると同時にファリスをそう怒鳴りつけた。

2人の怒鳴り声にファリスは「え。だってやれって……」と、不満の声を上げたが、ボルジの怒声が再度響いた。

「誰がかまどをふっ飛ばせと言ったか!」

だが、その怒鳴り声は、そもそも自分がファリスに火を点けると言ったのを、誤魔化す為かのように、不自然に大きかった。

「すみません……」

そこへ、ティーナがため息をつきながら、口を挟んだ。

「ボルジ、もういいわ。怒鳴っていても仕方がないわ。もう一度かまどを作りましょう」

さすがにお嬢様に言われてはと、ボルジも「うーん……。まあ仕

方が無い。早く石を集めるんじゃない」と矛を収める。

そしてファールリスはボルジに言われたとおり、自分が吹き飛ばした石を再度拾い集めだした。

そして視線を感じてティーナの方を見ると、果たしてティーナもファールリスの方を見ていて、一瞬目が合った。

だが、ティーナは目が合ったのに気付くと、プイッと目を逸らした。

ファールリスは（嫌われちゃったかな……）とため息をついて、石を拾い続けた。

そしてファールリスが石をあらかた拾い終わり、ボルジがかまどを組みなおしているところに置いた。

（次は、木の枝を集めないかね）

そう思って木の枝を拾おうかと、辺りを見渡すとティーナが近寄ってきた。

そして「はい。これ」とティーナがファールリスに差し出したのは、両腕一杯の木の枝だった。

「あ。ありがとう」

ファールリスが喜んでティーナにそう言うと、ティーナはまた目を逸らした。

「もうお腹すいちゃったのよ。早くしてね」

だがそう言うティーナの頬は少し赤かった。もう日が暮れてしまっていて、ファールリスがその事に気づく事はなかったのだが。

その後、かまどとは全然別の所に数本の木の枝を置いて、ファリスがそこにファイヤーボールを放ち、それで燃えた木の枝をかまどにくべて火を熾した。

こうしてやっと食事であり付いた3人は、この日は色々であった事もあり疲れ果て、食事の後はすぐに休んだ。

翌日、ファリスは疲れない移動方法を思いついた。

（瞬間移動の魔法なら歩くよりは疲れないからね！）

だが、瞬間移動でティーナとボルジを連れて飛ぶ事は、ファリスの魔力では出来ない。

だからボルジとティーナに先行してもらいある程度離れたら、瞬間移動で2人に追いつく。という方法を思いついたのだ。

勿論ファリスは道を知らないの、先頭をいくボルジの前に出現する事は出来ない為、ファリスはボルジとティーナの間に瞬間移動する事にしたのだった。

ティーナが、道端にちよこんと座るファリスを歩いて追い抜いた。

しばらくすると、またティーナが、道端にちよこんと座るファリスを歩いて追い抜いた。

また、しばらくすると、またティーナが、道端にちよこんと座る

ファリスを歩いて追い抜いた。

そして、またまた……。

「ファリス！」

突然、ティーナが怒鳴った。

「え？ なに？」

突然のティーナの剣幕に、ティーナの前の道端に座りながら出現したファリスが飛び上がった。

「あんた、ちゃんと歩きなさいよ！」

「え？ どうして？」

「なんかむかつくのよ！」

ティーナが腰に手をあて、ファリスを睨みつける。

「えー。でもー荷物も重たいし……」

ファリスの言葉にティーナはしばらくファリスを睨んでいたが、不意に「貸しなさい！」と言うと、ファリスが持っていた荷物の半分を奪い取ってしまった。

そしてファリスをその場に残して、すたすたと歩き出し、しばらく歩いた後ファリスに振り返った。

「あなたも歩きなさいよ！」

そう言うと、荷物を抱えたまま、また前を向いてある出だす。

「あ。うん」

だが、こうしてリリエルを目指していた3人に、前回追いついた騎士達からの報告を受けたらしい、100騎以上の騎士達が彼らの前方からやって来た。

前回数十人の騎士が追いつかれたという事で、兵を増強している様である。

ちなみに前回追いつかれた兵士達は、敵に魔物が居ると口を揃えて訴えたが、それは負けた言い訳なのだろうと無視された。

だが、前回で敵の攻撃が自分には効かない事を知っているファリスにとっては、数が増え様が同じ事だ。

敵から受けるダメージが0人以上、0にいくら掛けても0なのだ。

ファリスは、普段は自分の体びつたり張っている結界を広げた。

伝説の大魔法使いは防御結界で町一つを囲い、大天災から町を守ったというが、ファリスには、精々いつもの倍程度が限界なのだった。

だがそれでもティーナとボルジの2人を背に隠すには十分だ。

「僕の後ろに隠れて！」

ファリスが荷物を降ろしてそう叫んだ。

「貴方の後ろなんか隠れても無駄に決まってるじゃない！」

「魔法で守るから大丈夫だよ！」

魔法といわれ、2人は荷物をほおりだし、慌ててファリスの後ろに隠れた。

魔法という物がどういう物かはまだよく分からないが、今はその言葉を信じるしかない。

こうしてる間にも、騎士達はどんどん彼らに近づき、お互いの顔がはっきりと分かる距離で止まった。

そしてさらにその騎士の一団から一人の騎士がゆっくりと馬を進ませ、前に出た。

この部隊の隊長らしく、一際装飾も見事な鎧を身に着けている。

「リリエルのティーナ殿とお見受けいたす。出来れば手荒な事はしたくはありません。素直に投降して頂けますかな？」

「投降なんてするわけ無いでしょ！ 馬鹿にしないで」

ティーナがファリスの背に隠れながらその騎士にそう怒鳴って言い返した。

「しかし、どうやらそちらの頼みの綱は、その男の子1人の様ではないですか。その様なひ弱な男の子の命を奪うなど、不憫でなりません。早く投降なさいなさい」

先頭の騎士が肩をすくませながらそう言うと、後ろに控えている他の騎士達から笑い声が上がった。

その様子を見ていたティーナは小さい声でファリスに話しかけた。

「何やってるのよ？」

「え？ なに？」

「あなた馬鹿にされてるのよ？ 悔しくないの？」

「え？ そうなの？」

元の世界で散々、ひ弱と言われてきたファリスは、ひ弱と言われる事に慣れていて、馬鹿にされているという事に気付いていなかったのだ。

「いいから、やっちゃんさい！」

「あ。うん」

ファリスがそういった次の瞬間、ファリスの手からファイヤーボールが乱れ飛んだ。

とはいっても、騎士達の足元の地面に向かってだ。

魔法の授業で生徒同士魔法を撃ち合う事が多く、ヘタレのファリスと言えど人に向かって魔法を撃つのは慣れているのだが、さすがに相手には防御結界がなく撃てば大怪我をさせると分かっている躊躇する。

「なんだこれは！」

「火の玉だ！」

「もしや敵に魔物が居ると言う報告は本当だったか！」

地面に撃たれたファイヤーボールは轟音と共に土煙を撒き散らし、馬達は皆棹立ちとなって数人の騎士が落馬した。

大混乱となった騎士達だったが、さすがにはじめの騎士達と違い

精鋭ぞろいなのか、ファリスの攻撃を受けてもなお反撃してくる。とはいえ、さすがにファリスに近寄ろうとはせず、遠巻きに矢を放ってきたのだ。

だが、その矢は全てファリスの結界にカンカンと弾き飛ばされ地に落ちた。

騎士達が攻撃を仕掛けて来た事により、さすがにこうなっては自分の攻撃も相手に当てなければ成らないかと、ファリスは身構えた。

（もしかしたら、ティーナやボルジさんにも当たってたのかも知れないしね）

だが、ファリスが新たな攻撃を仕掛けるまでも無く騎士達は、

「なに！ こちらの矢が効かんぞ！」

「ダメだ、やはり魔物なのだ！」

と口々に怯えの言葉を吐き、こうして騎士達はファリスに手も足も出ず慌てて引き上げていたのである。

「どう？　すごいでしょ？」

前回に続いて、またもや逞しい騎士達を追い払いファリスは前回にもまして有頂天になった。

「次にきても、守ってあげるからね！」

ファリスはそう言って胸を張った。

だが、敵を追い払って得意げにしているファリスの態度に、ティーナはむかつきを覚えて怒鳴った。

「調子に乗るんじゃないわよ！」

そしてティーナは、ファリスの頭を脇に抱えてその首を絞めた。

「くっくるしいよ。ティーナ！」

だがティーナはファリスを放さない。

そしてファリスの首を絞めながら思った。

自分にもファリスの言う魔法という物が使えれば良いのに！

そうすれば、自分で敵を追い払う事が出来るのに！

5..ヘタレの危機

ムダル軍の襲撃から、さらに2日が過ぎていた。

リリエルへの道のりも半分を過ぎてあと一息というところだ。

そして3人は、左右に木々が立ち並ぶ山道をさらに歩き続けて、ある川に差し掛かった。

「おかしいのー。ここには橋が架かっておったはずなんじゃが……」

「もしかしてムダルの軍勢が、リリエルを孤立させる為に、橋を落したのかしら？」

ファールリスには分からないことだが、2人の記憶ではここに橋が架かっていたらしい。

「そうかも知れませんが。仕方ありません。もっと上流にのぼり、渡りやすい所を探して渡りましょう」

そしてまったく道の分からないファールリスには何の意見もない。

こうして3人は川の上流に向かって歩き出した。

だが、彼らの推測は半分間違っていた。

たしかに橋を落したのはムダルの軍勢だったが、それはリリエルを孤立させる為ではなく、ティーナ達を上流に向かわせる為だったのだ……。

フアーリス達は、ボルジを先頭に上流に向かってどんどん歩き続けた。

だがなかなか渡りやすい浅瀬を発見する事が出来ない。

フアーリスはつい（瞬間移動の魔法なら川の対岸なんてすぐに行けるのに……）と心の中で愚痴をこぼした。

とはいえ、相変わらずティーナも荷物を持って歩いている、フアーリスだけ根をあげる訳には行かない。

勿論、その後フアーリスが持つ分の荷物をティーナが持って歩いていた事を知ったボルジが「お嬢様に荷物を持たせるとは何事だ！」と怒鳴った。

その怒号に首をすくめるフアーリスだったが、思いもかけずティーナが口を挟んだ。

「フアーリスが瞬間移動とかの魔法で、何度も目の前に現れるのを私が嫌なの。だからフアーリスにそれを止めさせる為に私が自分でやってるんだから、ボルジは気にしないで」

このティーナの言葉にボルジはしぶしぶながら、ティーナが荷物を運ぶのを黙認したのだった。

そしてさらに3人は上流を目指して歩き続け、かなり山を上った頃、やっと谷間に掛かる細いつり橋を見つけた。

「こんな所につり橋なんぞ合ったかの？」

ボルジは記憶を手繰ったが、この様なところにつり橋があった覚えが無いのだ。

「ここの近くに住んでいる山の民が私達の知らない間に作ったのではないかしら？」

確かによくよく見ると、つり橋は最近作られたのか、橋をつる綱は真新しさを感じさせ、渡った先に道らしき物もなく、茂みが生い茂っている。

道がないという事は、まだあまり人通りがなく草木を踏締めて行き来されていないという事だ。

「そうかもそれませんのー」

ボルジはそう言って一応は納得した言葉を口にはしたが、やはり気になる様だった。

そしてしばらく考えた後、ポンっと手を打つと、ファリスに顔を向けた。

「ファリスもしもの為だ、先に渡りなさい」

「え？ 僕？」

「そうじゃ、お前なら、もしつり橋が落ちても、魔法で落ちずにすむじやろうが」

「あ。そうだね」

こうしてファリスがまず先につり橋を渡った。

つり橋はぎしぎしと軋んだが、特に壊れるという事も無く、無事ファリスは渡りきった。

「大丈夫そうじゃの。では、お嬢様次に私が渡りましょう」

女性であるティーナを最後に残すのもどうかという考えもあるが、危険のないファリスをはじめに渡らし、次に3人の中で一番体重

が重い自分が渡って、お嬢様の安全を確認したいと考えたらしい。

そしてボルジも無事に渡りきった。

「お嬢様！ 大丈夫です。お渡りください」

ボルジにそう言われてティーナはつり橋の前まで進み、そして下を見てみた。

（結構高いわね……）

とはいえ渡らないわけには行かない。

意を決してつり橋を渡りだした。

だがティーナが橋を渡す綱に掴まりながらつり橋を渡りだすと、つり橋はぐらぐらとゆれた。

（こっ怖いじゃない。あの2人よくこんなもの渡ったわね）

ティーナはそう考えたが、ボルジはともかく、ヘタレのフアーリスが全然怖がらなかったのは、勿論、いざとなれば瞬間移動で飛べるという裏づけがあるからだ。

それでも何とかティーナがつり橋の半分くらいまで渡った時、ヒュンという音が耳の傍を通り抜けるのをティーナは聞いた。

ティーナがなに？ と思っていると、その音は、ヒュンヒュン、ヒュンヒュンヒュン、と段々と数を増やしていく。

そして、つり橋の足場の所で、カツ！ という音が聞こえたと思いい、そこを見てみると、そこに果たして矢が突き刺さっていたのだ。

なんと、ムダルの軍勢がティーナがつり橋を渡るのを待ち構えていたのである。

「いやー！」

ティーナは恐怖のあまりその場にうずくまる。

「ティーナ！」

「お嬢様！」

ファールリスが橋に刺さった矢の向きから、矢が飛んでくる方角を推測して目を凝らすと、果たしてムダル軍が弓を構えていた。

ムダルの軍勢はファールリスの事を警戒して、かなり離れたところから矢を射掛けている。

そして、遠くから射掛けている為、なんとかティーナに当たらずに済んでいるが、ティーナには当たらずとも、何本かの矢がつり橋を吊る綱を掠めた様で、つり橋が斜めに傾く。

ファールリスは「助けないと！」と思ったが、ティーナの所に瞬間移動で飛んで、結界でティーナを守る事は出来ない。

つり橋は2人分の体重を支えられそうには無かったのだ。

ファールリスはムダルの軍勢を追い払うしか方法がないと考えて、彼らの所に瞬間移動する。

そして「射るのを止めて！」と叫び、矢を射掛けている兵士にファイヤーボールを撃ちまくる。

だが、彼らの作戦は巧妙だった。

ファールリスがつり橋から遠く離れた射手の所に行ったのを見計らって、つり橋の渡ったところにある茂みに隠れていた数人の騎士が、

ボルジにも目もくれずつり橋へと駆け寄り、つり橋の綱を抜き放った剣で切り落としてしまったのだ。

「きゃーー!!」

ティーナが叫び声をあげて、ティーナがつり橋から落ちる。

しかもさらに悪い事に、ティーナはつり橋の綱を落ちる瞬間まで握っていた為に、ティーナの体はその綱に引っ張られ、谷の側面にぶつかってしまったのだ。

谷の側面にぶつかったティーナの体は弾き飛ばされ、そして水面へと消えて行く。

ファリスにはなぜかそれがスローモーションの様にゆっくりに見えた。

「ティーナ!!」

そして騎士達は、それを見届けると、もはやこの場に用はないと立ち去っていった。

もしこの男の子の姿をした魔物が、怒りのあまり自分達を皆殺しにしようとすれば、自分達の命は無いだろう。

あくまで自分達の目的は、ヴィデンからの援軍の為にヴィデンに嫁に行くというティーナを襲撃する事にあるのだ。

無駄に戦う必要はまったく無い。

ティーナが川に落ちるのを見たファリスの背筋が冷たくなった。

「うわーー!!」

ファリスはそう叫ぶと、ティーナが落ちたと思われる場所の上に瞬間移動で現れ、そして川に落ちた。

ファリスは、泳ぎながら必死にティーナの姿を水面に探した。

そして水面に水面に白い影を、ティーナの服の色を見つけたファリスは「居た!」と叫ぶと、さらに瞬間移動でその場所の上に飛んだ。

そして水面の上に現れた瞬間、また川に落ちてティーナの服を掴んで、ティーナを引き寄せる。

ファリスは泳ぎが得意ではなかったが、それでも必死にティーナを引っ張って泳ぎ、何とかティーナを川から引き上げた。

だが、川沿いの川原にティーナを寝かせたファリスは、ティーナの体が水以外の物で濡れているのに気付いた。

「ティーナ! 血が……」

川から引き上げたティーナの腹部の服が破れそこから血がどんどん流れ出ている。どうやら、谷の側面にぶつかった時に、岩肌に腹部を削られたらしい。

ファリスはティーナに覆いかぶさって抱きしめた。

抱きしめると、トクントクンと、ティーナの心臓の音が聞こえた。

(良かった。生きてる……)

ティーナが生きている事に安心したファリスは、強くティーナを抱きしめた。

治癒魔法を行う為にだ。

いくら治癒魔法でも死んだ人間は生き返らせられないが、生きてさえ居れば傷を塞げば命は助かるはずだ。

だが、そうは言ってもファリスの魔力は弱い。

遅い肉体の者ほど魔力が強いという事は、溢れる生命力を魔力に変換すると言う事だ。

しかし、ひ弱なファリスに溢れる生命力などない。その為に魔力が弱いのだ。

だから、なけなしの生命力を魔力に変換した。

ファリスの自分の体力を削っての治癒魔法に、ティーナの傷口が見る見る塞がっていく、だがまだまだだ。

傷口が完全に塞がりきらないといけないし、表面的な傷が消えても体の内部が傷付いているかもしれない。

ファリスは意識が遠くなりそうなのに耐え、ティーナを抱きしめ続けた。

防御結界の魔法と違い、意識が無くなれば治癒魔法が途切れてしまう。

ファリスの目がかすんで来た。だが、ティーナを抱きしめ続ける。

不意に、ファリスは何かが自分の頭を触るのに気付いた。

それはファリスの頭を撫でている様だった。

「ファリス。……あなたの体って温かいのね」

その優しい声を聞いた瞬間、ファリスの意識は途絶えた。

目を覚ましたティーナは、気を失ったファリスを右腕で抱きながら、今までファリスの頭を撫でていた左手で自分の腹部を触って傷の具合を確かめた。

だがそこには傷どころか、傷跡すらなく、滑らかな感触を彼女の左手に与えた。

ティーナは川に落ちる瞬間まで、意識があった。

岩肌が彼女の腹部を切り裂いた時もまだ意識があったのだ。

だが脳が防衛本能を働かせ痛みを感じる神経を遮断したのか、腹部を切り裂かれてもティーナは痛みを感じなかった。

しかし腹部が切り裂かれたのは分かった。

もう自分はお仕舞いだ。

体にこんな大きな傷を作ってしまったのは、もう、どこにもお嫁に行けないだろう。

年頃の娘であるティーナは、命の危機というのに、瞬時にそう考えた。

そして川に落ちて気を失い、気付けばファリスに抱きしめられていた。

ファリスの体は温かく、そしてその重みは心地よかった。

腹部の傷が塞がっているという事は、きっとまたファリスの魔法という物のおかげなのだろう。

だがそのファリスは、顔色は青ざめ、唇は紫色に変わり、見るからに衰弱している。

魔法の知識などないティーナにも、それが自分を助ける為の代償なのだと理解できた。

ティーナは左手も添えて、ファリスを両手で抱きしめた。

そしてファリスの体を抱きしめながら思った。
自分にもファリスの言う魔法という物が使えれば良いのに……。
そうすれば、ファリスを癒してあげる事が出来るのに……。

6..出番の無いヘタレ

ティーナは目を覚ました。

どうやら、あのまままた眠ってしまったらしい。

しかもファリスは、まだティーナの上に覆いかぶさったままだ。

よく貧弱とはいえ、男の子1人を自分の体の上に乗せたまま眠れるものだが、ファリスに傷を治してもらったとはいえ、大量に出血をしていたティーナも、かなり衰弱していたらしい。

だが、ティーナ自身がファリスを自分の体の上に乗せて抱きしめたまま眠ってしまった事に苦笑していると、不意にファリスの体が冷たいのに気付いた。

その冷たさに、ドクンとティーナの心臓が一つ大きくなった。

背筋が凍りつく。

そして「ファリスが死んでしまったのかも」と思った。
頭で考えるより前に体が反応したのだ。

ティーナは慌てて、滲む視界でファリスの服の上からファリスの心臓の場所に手を当てた。

（だめ……聞こえない）

ティーナは急いで、ファリスの服の前のボタンを外そうと、ファリスの服に手をかけたが、目がよく見えず、焦るばかりで中々ボタンは外れない。

ブチッ！ ブチッブチッ！

ティーナはファリスの服のボタンを力ずくで引きちぎると、服の中に手を差し込み、ファリスの肌に直接手をかざした。

そこは小さいながらも、確かにトクントクンという音をティーナの手に伝えた。

（ファリス……）

ティーナはファリスを抱きしめた。

気付くと頬に涙が流れていた。

（自分はいつから泣いていたのだろう）

ファリスの心臓の音が聞こえなかった時にだろうか？

ファリスの心臓の音が聞こえた時にだろうか？

でも、そんな事はどうでも良い事だった。
なにせファリスが生きているのだから。

だが、このままファリスの体が冷え続ければ危険だろう。

ティーナはファリスの体をさらに強く抱きしめた。

眠れば人の体は冷える。

さっきまではティーナも寝てしまっていたので抱きしめながらもファリスの体が冷えてしまったが、起きている今なら抱きしめて

ファリスの体を温めることが出来るはずだ。

相変わらずファリスの体はティナの体の上にあった。

さすがに貧弱とはいえ男の子一人をずっと自分の体の上に乗せていてはティナの負担も大きい。

しかも石だらけの川原にだ。

ティナの背中に石が当たりティナを責め続けた。

でも、衰弱したファリスの体を冷たい川原の上に横たわせられる訳が無い。

ティナはファリスの体を自分の上で抱きしめながら、色々と考えていた。

そういえばファリスはいくつなのだろう？

ちゃんと年を聞いた事はなかった。

多分自分より5つくらいは歳下なのではないか？ ティナはそう思ったが、本当は、ファリスは17歳で、そしてティナは20歳だったので3歳差なのだ。

だが、貧弱なファリスはティナには実際の年齢よりも若く見えたのだ。

（5歳だと、結構離れてるわね……）

だが不意にティナは赤面した。

お互いの歳が近かろうが、離れていようがどうだというのか。

ティナは別の事を考える事にした。

早く、フアーリスをリリエルまで連れて行かなくてはならない。

今はこうやって抱きしめて暖めているが、それにも限度がある。ここには火を熾す道具すらないのだ。

フアーリスをちゃんと温かいベッドに寝かせて休ませないといけない。

だが、自分は動けない。

城にはまだまだ先だが、すでに自分の生まれ住んだ領地内だ。自分が今いる場所は大体分かっていて、城まで辿り着く事は出きるだろう。

だがさすがにフアーリスを担いでいくという事が現実的で無い事ぐらいは分かる。

そして、フアーリスをこの場において急いで城まで行って応援を呼んできたとしても、丸一日以上かかるだろうという事も。

(どうすれば良いんだろう……)

ティーナはフアーリスを強く抱きしめた。

このまま自分の上でフアーリスが衰弱していくのを見守るしかないのだろうか？

また涙が頬を伝った。

だがティーナがそう悲嘆に促していると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「お嬢様ー」

間違いないボルジの声だ。

そして他の声も聞こえてくる。

「ティーナ様。どこでございますか！」

ムダルの軍勢にティーナが谷底に落された時、その軍勢に無視されたボルジが、あれから急いで城まで戻り、救援を呼んできたのだ。

しかもムダルの軍勢に襲われても大丈夫な様に、大部隊を派遣してきていた。

ヴィデンまでは派遣できなくても、城のすぐ近くであるここまですら大部隊を派遣しても何の問題も無い。

ティーナは神に感謝した。

だがこの事が例え神の御蔭ではなく、悪魔の御蔭だったとしても、ティーナは感謝しただろう。

ファールリスが助かるなら、誰の御蔭だろうと対した問題ではない。

ティーナは、ゆっくりとファールリスト体を入れ替えて、慎重にファールリスの体を横たえ、頬を伝っていた涙を拭うと大声で叫んだ。

「ここに居るわ！ ファールリスも一緒よ！」

そしてその声に反応して、ボルジと兵士達がティーナに近づいてきた。

ティーナを見つけたボルジが喜びの声を上げる。

「おお！ お嬢様！ よくぞご無事で」

「フアーリスが助けてくれたの」

そのティーナの言葉に、隊長らしき男が口を開いた。

「ボルジ殿から聞いております。なにやら不思議な力を持っている少年らしいですな」

「ええ。でも今はとても衰弱しているわ。ゆっくりと城まで運んであげて」

ティーナの言葉に隊長が後ろの兵士に合図すると、兵士はすぐに担架を持ってきて、ティーナが心配そうに見守る中フアーリスを横たえた。

こうしてフアーリスは慎重に運ばれ、ティーナとフアーリスは城に辿り着く事が出来たのである。

「おお！ ティーナ！ 心配したぞ」

城に着くとティーナの父である、リリエル領主のクリストフが、娘が無事なのに喜び、娘を抱きしめようと大きく手を広げて出迎えた。

妻が亡くなってから大事に育てた一人娘だ。

クリストフは、愛する娘が谷から落ちたと聞き、昨晚の内に救援の部隊を派遣してから一睡もしていなかったのだ。

娘も生きて父と再会できたのが嬉しいのか、足早に近づいてくる。

そして間近まで近寄った娘に、クリストフはさらに大きく腕を広

げた。

だが、その目に入れても痛くない可愛い娘は、クリストフの手を振り払い「じゃまです。お父様」と目もあわせず言うのと、足早にクリストフの傍を通り過ぎた。

あまりの事にクリストフが唾然として娘の後姿を見送っていると、娘は振り返った。

（おお。通り過ぎたのは冗談であつたか。なんとお茶目な娘なのだろうか）

クリストフは再度笑顔で両手を広げ、お茶目な娘がその胸に飛び込んでくるのをまつた。

ドカツ！

「おわっ！」

「りょ領主様！ 申し訳御座いません！」

後ろから突き飛ばされたクリストフが、起き上がりながら振り返って見ると、兵士2人が担架を担いで人を運んでいる。

担架の先頭の者は後ろ向きに進んでいたので、クリストフが見えなかったのだ。

「ばか者！ 良く見んか！ ワシを誰だと思っ「そんな事どうでも良いからいいから早くしてちょうだい！」

クリストフの怒鳴り声にうわっかぶせしたのは当然ティーナだ。

そしてさらにティーナは「こっちよ!」と先に進みだした。

担架を担ぐ兵士はティーナの剣幕に押され、足早にティーナを追っていく。

その場には、最愛の娘に「そんな事」呼ばわりされた未だ突き飛ばされた体勢のままのクリストフが、呆然と残されたのだった。

そしてファリスを乗せた担架を担ぐ兵士達に、ティーナが「こよ」と案内した部屋は、最上級の賓客の為に用意された部屋だった。

「あの。よろしいのですか?」

担架を運ぶ兵士が恐る恐るティーナの問いかけた。

「なにがよ?」

「ですがこの部屋は……」

兵士が戸惑うのも無理は無い。

最上級の賓客の為とは、リリエルの領主であるクリストフ以上の貴族の為、つまりは公爵家や、万一にも王が泊まる事があれば用意された部屋なのだ。

だが戸惑いながら問いかける兵士に、ティーナは当たり前前の事を言う様に答えた。

「この部屋のベッドが一番暖かいの」
そして懇願する様に兵士達を見つめた。

そう、別にティーナは「自分の命の恩人なのだから最高級の持成しをしよう！」と考えた訳ではなかった。

ファリスを暖めてあげなくてはいけない。それだけを考え、城で一番暖かいベッドがある部屋に連れて来ただけに過ぎない。

もし、この城で一番暖かいベッドが召使の部屋にあったなら、ティーナはまっすぐにその召使の部屋に向かっただろう。

「……わかりました」

担架を担ぐ2人の兵士のうち、後ろの方を担いでいた兵士が答えた。

前の方を担いでいた兵士が後ろの兵士に「おい。大丈夫かよ？」と小声で話しかけると、後ろの兵士も小声で「しょうがないだろ」と答える。

兵士達は、ゆっくりとファリスをベッドに寝かせると、部屋を出た。

兵士達が扉を閉める時に閉じていく扉の隙間から部屋の中を覗くと、ファリスの顔を心配そうに覗き込むティーナの姿が見えた。

7..やっぱりヘタレ

ファールリスが城に運び込まれてから、丸一日がたっていたが、ファールリスはまだ意識と取り戻していなかった。

その間もティーナがずっとファールリスを看病していた。という事はさすがにない。

嫁入り前の領主の娘が、意識を失っているとはいえ、若い男と同じ部屋で夜を明かすなどという事が出来る訳が無いのだ。

本当にずっと意識を失っていても「実は意識を取り戻していて、一夜を共にしたのだ」などという醜聞が広まっては一大事である。

やむなく、夜の看護を担当する中年の侍女に、くれぐれも大事に看護して、ファールリスが目を覚ましたらすぐに自分を呼ぶように申し付けた。

そして勿論昼間はティーナが自分で看病する。

他の者達は「お嬢様がする事ではない」と止めたが、ティーナは「命の恩人の看病すらしらないなどという事になれば、私は人でなしと言われるでしょう」と聞く耳を持たなかったのだ。

とはいえ、実際、ファールリスはずっと寝ているのだから看病と言ってもする事などは、あまり無い。

一番手間がかかるのは、定期的にファールリスを着替えさせる事だが、さすがにティーナがする訳にはいかず、着替えは夜の看護をする侍女が行っていた。

だからティーナに出来ることは、ファリスの寝るベッドのそばに椅子を置き、ときおり清潔な綿に薄く作った砂糖水をしみこませ、その綿でファリスの口を拭って飲ませてあげる事ぐらいだ。

結局大半の時間は、ファリスが目覚めるのを待つという事に費やされた。

だからティーナはファリスの手を握り、ファリスの顔を見つめながら、目覚めるのをまつた。

（侍医の診断では、病気という訳ではなく体力の低下から眠っているだけだから、暖かくして休んでいればすぐに目を覚ますという事だったけど……）

だがまだファリスは目を覚まさない。

ティーナはファリスの唇が少しでも乾くと、綿にしみこませた砂糖水をファリスに飲ませた。

ファリスの喉がコクリと小さく鳴ると、ファリスがちゃんと生きているのだと感じられて嬉しかった。

とはいえ、それも頻繁に行うことではない。

ティーナは眠るファリスの青白い顔を見つめた。

きっと私はファリスに恋をしているのだろう。

ファリスの具合が悪くなったとなれば胸が苦しくなり。

ファリスの具合が良くなったとなれば嬉しくなる。

これが恋でなくてなんだと言うのだろうか。

でも、どうしてファリスに恋したのだろうか？

助けて貰ったという感謝の気持ちが摩り替わったのだろうか？

それともよく聞く、危機的状況におかれた男女の種の保存本能による錯覚なのだろうか？

そうじゃなくて、知り合ったばかりの、ほとんど何も知らない年下の男の子の事を好きになったりするのだろうか？

何も知らないといえば、ファリスも私の事をほとんど何も知らないはずだ。

でも、それでもファリスは、自分の体をこれほど衰弱させてまでも、私を助けてくれた。

ボルジはファリスの事をヘタレという。
私もそう思う。

でも、それ以上に優しいのだと思う。

私の恋は摩り替わりだろうか？ 錯覚だろうか？

でも、過失だろうと放火だろうと、火事な事に変わりはない。

今はその炎に身を任せるしかないだろう。

でも、できるなら、ファリスの優しさに恋したのでありますように……。

そして夜に看病はしていなかったが、心配で結局はほとんど寝て

いなかったティーナは、ファリスの手を握り締めながら、ベッドのファリスの足元あたりにうつ伏せになり、静かに眠りに落ちた。

（ここはどこなのだろう？）

ファリスが目を覚ますと、自分がやけに装飾にこったベッドに寝かされているのに気付いた。

そしてファリスが起き上がろうとすると、誰かに手が捕まれているらしく上手く行かない。

自分の足元を見ると、ティーナが自分が寝ているベッドの横に椅子を置いて座り、自分の足元あたりのベッドの縁にうつ伏せになって寝ている様だった。

そのティーナの手が、ファリスの手を握っていたのだ。

「ティーナ……」

ファリスがそう呟き、さらについ体を少し動かしてしまうと、ベッドの縁に寝ていたティーナも目を覚ました。

そしてティーナは、目を覚ましたファリスを見て、心配そうな、しかし目を覚ました事に安心した様な、そんな微笑をファリスに見せた。

そしてファリスは、ティーナの手がさっきより少し強く、自分の手を握り締めたのを感じた。

「あの……大丈夫だった？ ティーナ」

ティーナが目を覚ましたので、ファリスはティーナにそう問い

かけた。

結局意識を失ってしまったファリスは、ちゃんとティーナの傷を治す事が出来たのか心配になったのだ。

だがティーナはそんなファリスに「あは。この状況で、人の心配をしている場合？　あなたの方こそ大丈夫なの？」と言って微笑みながら、少し首をかしげて問いかけ返す。

「うん。僕は大丈夫だよ。それでティーナは？」

繰り返し問いかけるファリスにティーナはさっきより少し強く微笑んだ。

「ええ。私はなんとも無いわ。あなたのおかげよ」

するとやっとファリスが「そっか。それは良かった」と安心した様だった。

そしてファリスもティーナに微笑み返し、その為2人は見詰め合った。

いや、ティーナはずっとファリスから目を逸らしていない。ずっと見つめ合っていた。だ。

だが不意にファリスは辺りをきょろきょろと見回した。

「それで……ここってやっぱり、お城なの？」

「ええ。そうよ」

「そっか……ごめんね」

「え？　何がなの？」

ティーナはそう言うと、驚いた様に身を乗り出して、俯いたファリスの顔を下から覗き込んだ。

自分はファリスのおかげで命が助かり、その為にファリスはこんなにも衰弱してしまったのだ。

どこのファリスが誤る要素があると言うのだろうか？

「だって、最後の最後で気を失っちゃってたみたいだし……」

「何を言っているの！」

そう言ってティーナの顔がさらにファリスに近づくと、それに押されるようにファリスの顔が少し上向いた。

「私はあなたのおかげで助かったのよ！」

「あ。うん」

と、ファリスは曖昧な返事を返したが、すでに思考は別の事に飛んでいた。

（ティーナ……顔が近いよ）

とファリスは、ティーナがあまりにも自分に顔を近づけるのでドキドキしたのだ。

しかも未だティーナの手はファリスの手を握り締めているままであり、いまさらながらその事に気づいたファリスの顔が赤く染まった。

ティーナがさらに顔を少し近づけ「どうしたの？」と首を傾げた。

視界がティーナの顔でいっぱいになり、ファリスの胸がドキツとした。

そしてティーナの問いに「え？」と返すのが精一杯だった。

「だって顔が赤いわよ？」

「あ。そうかな？」

と答える誤魔化す様に答えたファリスだったが、自分でも顔が赤いのは自覚していた。

「熱があるのかも知れないわね」

「え？ 熱？ どうだろう？」

すると、ティーナはファリスの言葉が終らない内に、身を乗り出し自分の額をファリスの額にくっ付け、ティーナとファリスのさっきよりもさらに顔が近づく。

男性と女性がこれ以上顔を近づける事があるとすれば、それはもうキスをする時だけだろう。

「うーん。どうかしらね」

「だ。大丈夫じゃないかな」

ファリスは近くにあるティーナの顔にさらにときどきとしながら、自分の心臓の音がティーナに聞こえてしまわないかと心配した。そして自分の事で精一杯で、ティーナの手がさらに強くファリスの手を握り、そして汗ばんでいることには気付かなかった。

2人は至近距離で見つめあい、そしてティーナは中々どうこうしない。

だが先に耐えられなくなったのは、やはりヘタレだった。

「多分大丈夫だよ！ それより僕おながすいちゃったかな！」

フアーリスはあまりの恥ずかしさに、ついそう叫んだ。

「そっか。まあ、大丈夫そうね。じゃあ、何か作ってもらおうように言ってくるわね」

ティーナはそう言うと、フアーリスから離れて椅子から立ち上がり、部屋から出る為に扉に向かった。

そして扉から部屋の外を出るときに、フアーリスに聞こえないように小さく呟いた

「このヘタレ」

「フアーリス。お待ちせ」

しばらくするとお盆を持ったフアーリスが部屋に戻ってきた。

フアーリスからもお盆に乗った深皿から湯気が立っているのが見える。

フアーリスが上体を起こそうとすると、ティーナが「あ。ちょっとまって」と言って、お盆をベッドの横に備え付けられたサイドテーブルに置くと、フアーリスの体に手を添えて、上体を起こすのを手伝った。

「ありがとう」

フアーリスが礼を言うと、ティーナがにこりと微笑んだ。

そしてサイドテーブルに置いたお盆をフアーリスに差し出す。

「はい。消化に良いものがないと思って」

フアーリスは「ありがとう」と、そのお盆を受け取り、自分の膝の上においた。

お盆の上に乗った深皿のを見ると、どうやらミルクで煮たオートミールの様な物らしい。

（旅の時も思ったけど、食べる物がほとんど同じって幸運だね）

フアーリスがまだ元の世界に居た時に読んだ本では、住んでいた国から遠く離れた国では、まったく食文化が違っていてフアーリスにはとても食べられない様な食文化の国もあったのだ。

だが、その食べられない物を思い浮かべそうになって、急いで考えるのをやめた。折角ティーナが食べる物を持って来てくれたのに、食欲がなくなってしまう。

フアーリスは食欲が無くならないうちにと、急いで深皿の中身をスプーンで一すくいすると、口に運んだ。

「ツアチ！」

「あ。大丈夫？」

フアーリスの右側に座っていたティーナは、身を乗り出してファ

ーリスに近寄り、左手をファリスの背に添えて、右手をスプーンを持っているファリスの右手に添えた。

「あ。うん。大丈夫だよ」

ファリスは左手で口を押さえながら、このティーナの態度に戸惑っていた。

（とても優しいんだけど、どうしたんだろう？）

「どうしたの？」

ついティーナを見つめてしまっていたファリスを不審がってティーナが問いかけた。

「あ。なんでもないよ」

ファリスは、誤魔化す様にまた、急いで深皿の中身をスプーンですくうと口に運んだが、「ウワッチ！」とまた熱さに悲鳴を上げた。

「もー。本当に気をつけてよ！」

ティーナが少し怒った様にそう言ったが、その目を笑っている。

そしてまたファリスの右手に手を添えて、スプーンをファリスの手に持たせたまま深皿から中身をすくい、そしてそれを冷ますように、息を吹きかけた。

その為、ティーナの後ろ頭がファリスに近づき、ティーナの後ろ髪がかすかに、ファリスの顎を掠める。

「ティーナ？」

あまりに近づき過ぎるティーナに戸惑い、思わずファリスがその名を呼んだ。

しかしそれは、さらに彼を戸惑わせる結果となった。

ファリスに呼ばれて「なに？」と振り向いたティーナの顔は、やはり近かったのだ。

あせったファリスは何か言わなくては成らないと、必死に考えたが良い話題が思い浮かばない。結局ファリスの口から出たのは先ほどの疑問だった。

「あ。えーと。どうしてそんなに優しくしてくれるのかな……って」

「え？」

内心の胸の高鳴りを隠しながら、彼女なりに必死にファリスにアタックしているつもりでティーナだったが、さすがにこう正面から質問されては戸惑う。

「それは……私を助けてくれたし……」

戸惑った挙句そう答えたティーナだったが、彼女はすぐに自分の失敗に気付いた。

なんとファリスが「あ。そうか！」と納得してしまったのだ。

これでは、いくらファリスに優しくしたりアタックしても、助けてくれた事への恩返し、としか思われないだろう。

（仕方が無いわ。ここは一旦引くべきね）

ティーナは内心がっくりとうな垂れたが、表情には出さず、むしろ

ろがんばってにっこりと笑って見せた。

「さあファリス、ちゃんと自分でもってね。ゆっくり食べないと駄目よ?」

ティーナはそう言うと、ファリスの右手に添えていた手を離す。そしてファリスも「うん。ありがとう」と素直に礼を言う。

だが一時撤退と言ってもアタックを一時中断するだけで、まだこの場を去る気は無い。

色々と確認しなければならぬ事があるのだ。

「ファリスって歳はいくつなの? 私より5つくらい下なのかしら?」

今度はちゃんと冷ましながら食事をしていたファリスが、ティーナの声に顔を上げた。

「ティーナより5つ下って、ティーナは何歳なの?」

「あ、そっか。私は20歳だけど?」

「じゃあ、5つも下じゃないよ。僕17だから」

ファリスの返答にティーナは少し嬉しくなった。年下に違いがないが、5歳差よりはまだマシだろう。

だがティーナがファリスの返答ににこにこしていると、ファリスの表情はその逆に少し曇っているのに気付いた。

「どうしたの?」

「あ。いや、僕ってやっぱり幼く見えるのかなーって……」

（あ。まずかったかも！）

そう思ったティーナは、急いで「いえ。別にそう言う意味じゃないわよ。えーっと。ふけて見られるよりは良いと思ってちよっと若めに言ってみたの」と誤魔化した。

素直なファリスは、ティーナの言葉を素直に受け止めて「あ。そうなんだ。でも、別にちよっとくらい年上に見られても気にしないのに」とすぐに笑顔になる。

（うまく誤魔化せたけど、ここまで素直に反応されるとさすがに胸が痛いわね……）

だがそうこうしている内にファリスの食事も終わり、日も暮れてきた。

目を覚ましたところで、あまり無理をしては行けないだろう。

「食べ終わったなら、また少し寝た方がいいわね。」

「うん。色々ありがとう」

ティーナはファリスの膝の上においてあったお盆を手にとると立ち上がり、一旦そのお盆をサイドテーブルに置いた。

「最後にもう一度だけ、熱を見てみましょうね」

そう言うとティーナは屈んで、ファリスの額に自分の額をくっ付けた。

だがファリスは、さっきの「恩返しなんだ」という判断で暫くじっとしていたが、ティーナがなかなかどかないと、やはり最後には顔を赤らめ「だっ大丈夫だよ!」と身を引いてしまうヘタレだった。

最後にもう一度だけ! と思ったアタックも空振りに終わり、ティーナはファリスに気付かれない様に内心ため息を付いた。

「じゃあ、私も寝るわね。夜にあなたの看病をしてくれる人と呼んで来るわ」

そう言うと、ティーナは立ち上がり、背を向けた。

そして扉から部屋の外を出るときに、ファリスに聞こえるか聞こえないかの声で呟いた

「このヘタレ」

「え? 何か言った?」

「ううん。何でも無いわよ。お休みファリス」

ティーナはそう言いながら、振り返ってにっこりと笑った。

8..救国のヘタレ

ティーナの看病のかいあって、ファールリスの体調も良くなった。
った。

元々病気というわけではなく、生命力を消耗しただけなのだから、十分な休養と栄養のある食事を取ればすぐ良くなったのだ。

そして新しく用意して貰った服に袖を通し、起き上がれるまでに
なったファールリスはティーナにつれられ、城内の庭を散歩していた。

「あまり無理しないでね」

ティーナはそう言って心配げにファールリスに付き添ったが、ファ
ールリスには久しぶりに浴びる日光は心地よかった。

庭に出てみて改めてティーナの父であるクリストフが領主この城
を見てみると、思いの外立派な物だ。

ティーナが看病がてら色々と話してくれたところによると、ティ
ーナもボルジも普段は単に「城」と呼んでいるが、正しくはリクル
ハルド城と言うらしい。

城の内側から見た感想ではあるが、リクルハルドは赤いレンガで
造られた褐色の城で、四方に塔が立ち城壁も高く、ファールリスは「
こう言うのを難攻不落の要塞と言うのかな?」と思った。

「すごい城だね」

ファールリスが素直な感想を漏らすと、ティーナも得意げに答えた。

「まあね。この辺の土地は肥えているし、交通の要所で商人の行き来も多いのよ」

「そうなんだ。でも、こんなにすごいのに、攻められているんだね」

「またもやファールリスは素直な感想を漏らしたが、ティーナは今度は顔を顰めた。

「うっ上には上が居るのよ」

とはいえ、その交通の要所である為に外部からの侵略に備え、城は強固で頑丈な作りと成っているという事だった。

そしてその城のおかげで未だにリリエルはムダルからの侵略に持ち堪えているらしい。

さすがに敵もこちらの10倍、20倍といった兵力ではなく、城に押込められていて一歩も外に出れないという訳ではない。

領地内の村や町や砦などがムダルの軍勢に襲われたら、こちらから出撃して迎え撃ち、勝ったり負けたりを繰り返す。

だが全体としては押されている、という事らしい。

そして負けても城に籠り、その間に体勢を立て直す事が出来るので、今まで持っているのだ。

もっとも、リリエル単独ではムダルに勝てないから、ヴィデンに援軍を頼もうとしていたのだ。勝てていないのは当然だった。

「でも、このお城に籠っている限り負けじゃないの？」

するとティーナが腕を組み険しい顔をした。

「うーん。それがそうでもないの。今はまだ城外に出撃する余裕があるけど、このままじゃいつかそれも出来なくなるわ。そうなれば領地で採れる食料もムダルの軍勢に持ってかれちゃって、こちらの食べる物もなくなってきちゃうし……。そうなたらいくら城が落ちなくてもね……」

「そっかー……」

（じゃあ、やっぱり僕も戦いに参加した方が良いのかな？）

そこへボルジが現れ、小走りに2人に近寄ってくる。

「お嬢様！ ファーリス！ クリストフ様がお呼びです！」

「お父様が？」

「はい。謁見の間で文武の重臣共々お待ちです」

3人がその謁見の間につくとクリストフが奥の一段高いところに置かれた椅子に座り、そしてその前の左右にそれぞれ10人ずつほどの人間が並んで立っていた。

この人達が、文武の重臣という人達なのだろう。

まるでどこかの王様の様だが、この領地の主となれば、ここに住んでいる者にとっては同じ様なものなのだろう。

ボルジが文官の列の最後尾に並ぶと、それを待っていたかの様に、

重臣の一人が大声で口を開いた。

「ファールリスといったな。前に出よ！」

「あ、はい」

その声に反応し、ファールリスがつい反射的に前に出る。

そして左右に並ぶ重臣達の列の真ん中あたりの場所で、「ここらへんで良いのかな？」と思いながら立ち止まった。

すると別の重臣が叫んだ。

「跪かんか！」

「あ、はい」

ファールリスが跪く。

そしてまた別の重臣の大声。

「御領主様を正面から見据えるなど無礼だぞ！ 頭を下げんか！」

「はい」

こうしてファールリスは、ティーナの父親の前で跪いて俯いた。

するとティーナの父親であり領主であるクリストフが重々しく口を開いた。

「お主ファールリスと申すそうだな。ファールリスよお主に命じる。我が領地を攻めているムダルの軍勢を、お主が持っている不思議な力で追い払うのだ」

あまりにも一方的で偉そうな態度だが、実はボルジの入れ知恵だった。

ボルジがファリスとティーナを呼びに行く前に、彼はクリストフや重臣達にこう言ったのだ。

「旅の途中で出会って連れて来たあの子供は、不思議な能力の持ち主なのです。彼には矢も効かず、また彼の手から放たれる火の玉は岩をも焼き爛れさせます。彼に戦わせればムダルの軍勢など一溜まりもありません」

このボルジの言葉に、クリストフも重臣達も「おおー！」と声を上げたが、クリストフは当然とも思える疑問を持った。

「それほど力の持ち主であれば、もはや恐れるものなどなからう。素直に我々のいう事を聞いてくれるだろうか？」

だがこの疑問にボルジはにんまりと笑った。

「確かにその力を好き勝手に使うならば、恐れるものなどありますまい。ですが彼はヘタレなのです」

「なんと！ ヘタレと申すか！」

このボルジの言葉にクリストフおよび重臣達は顔を見合わせた。そして新たな疑問である。

ヘタレとは、情けない者。意気地の無い者。臆病な者を表す言葉だ。

それほどの力を持つ者が、どうしてヘタレに育つと言うのか。傲慢不遜、傍若無人と育つべきではないのか？

だがボルジはこの疑問に得々として説明した。

それはファリスと出会った時に、ファリスがボルジとティーナと一緒に連れて行って貰おうと、必死で洗いざらい喋った時の内容だった。

「なんと彼は異世界から来たと言うのです。そしてその彼が元居た世界では、彼の力は特別な物では無いと」

そして説明が終わると、またにんまりと笑った。

「……異世界とな？」

「はい。勿論私も初めは信じられない思いでした。ですが、そうではなくては彼の力の説明が出来ません」

「なるほどの。その者は我らからしてみれば恐るべき力を持っているが、元の世界では当たり前……。いや、ヘタレという事は、驚くべき事にその世界ではむしろたいした能力の持ち主ではない……と言うのか」

「はい」

ボルジは短く答え一礼した。

「では、そのヘタレをムダルの軍勢と戦わさせるとして、報酬はどのような物が良からうな？ ヘタレであれば、領内の村の一つでもやると言えば、飛び跳ねて喜ぶであろうかの？」

「いえいえ。御領主様。ヘタレはその様な事では動きません。ましてやあの様な子供では、領地をやると言われてもどうして良いか分からず重圧に耐えかね、むしろ逃げ出してしまいかねません」

「では、どうしろと言うのか？」

「御領主様が御命令あそばせればよろしいのです」

そしてまたにんまりと笑う。

「勿論、命令はしよう。だがその命令に対しての報酬の話をしておるのではないか」

だがボルジは、このクリストフの言葉に首を振る。

「いえいえ。ヘタレには御命令されるだけで結構で御座います。何の報酬も入りません」

「なんと？ ヘタレとはそれほどの者なのか！」

「はい。私は今まで色々なヘタレを見てまいりました。程度の差こそあれヘタレの行動原理はただ一つ。それは無理難題で無い限り、人のいう事を聞くという物です」

「それは本当か？」

「はい。さすがに無理難題を押し付ければ、いくらヘタレと言えども遂には逆上し逆らう事もあります。ですが、それが自分がやろうと思えば出来る事の範囲内であれば、なんとヘタレは「逆らうくらいならやった方が気が楽」と考えるのです」

「おー」

またもや重臣達が顔を見合わせた。

「なるほど。それでは早速その者を呼んで来るがよい。ムダルの軍勢を追い払う様に命じようではないか」

ボルジは「かしこまりました」と頭を下げたが「しかし……」と前置きし、言葉を続けた。

「同じ命じるにしても、高圧的に命じなくてはなりません。ヘタレには如何に「断り難い様に命じるか」が重要なので御座います」

そしてボルジは一礼した。

こうして主従共々、ファリスに対して高圧的な態度を取る事になったのだ。

そして実際ファリスも（まあティーナも困っているみたいだし、僕にはそれが出来るみたいだし）と考え、「はい。わかりました」と答えようとした、その時……。

「あなた達は、何を言っているのです！」

その声の主はティーナだった。

そしてその顔には怒りが、いや、悔しさが滲んでいた。

自分の目の前で、自分が恋している相手がこの様な扱いを受け、平然としていられる者など居ないだろう。

ファリスもティーナの声に反応し後ろを向くと、ちょうどティーナが傍に寄ってくる所だった。

そして近くまで来ると、ファリスに右手を差し伸べた。

「さあ立ちなさい。あなたはひざまずく必要など無いのよ」

そしてその言葉に反応してファリスも右手を差し出すと、手を引いてファリスを立たせた。

ファリスが立ち上がると、ファリスの右手にさらに自分の左手を添えた。

そしてファリスを見つめて微笑む。

だが次の瞬間、ティーナの表情が険しくなったと思うと、重臣達を見渡しながら睨みつけた。

「彼はこの領地の民ではありません。私達に彼に命令する権利は無いのです！」

このティーナの言葉に「いやだってボルジが高圧的に言えって……」と思い、ファリスに高圧的に出る事に対して後ろめたさを感じていた重臣の一人が口を開いた。

「しかし、それではムダルの軍勢をどうする御つもりなのか？
我らではとても……」

「彼に頼めば良いのです」

だがティーナのこの言葉に重臣達は首をかしげた。

「命令するのと、どう違うのです？」

ティーナはその重臣を一瞥した後、彼らには考えられない行動を取った。

なんとこの領地の者にとっては絶対的な支配者の娘であるティーナが、どこの馬の骨とも分からぬ者にひざまずいたのだ。そしてさらに頭も下げた。

「ファリス。お願い。ムダルの軍勢をやっつけて」

あまりの光景に重臣達は呆然としている。
だが、頭を上げたティーナが重臣達を怒鳴りつけた。

「何をしているのです。あなた達もひざまずくのです！」

重臣達は慌てて跪く。

「お父様も！」

「あ。ああ」

ティーナの剣幕に、クリストフも慌てて椅子から降りて跪こうとする。

「そこではありません。床に跪くのです！」

「ああ」

クリストフは、さらに慌てて皆から一段高いところから降りて床に跪く

そしてそれを見届けると、ティーナは改めて頭を下げた。

はじめにファリスに対しては高圧的な態度を取るべきだと助言したボルジも跪いている。

この広間で立っているのはファリス1人だった。

だがファリスはティーナに手を差し伸べた。

「ティーナ」

その声に反応してティーナが顔を上げる。

そしてファリスの手を取った。

今度は、さっきとは逆にファリスがティーナを立たせたのだ。

そしてティーナを見つめた。

ファリスは今まで、ずっと誰にも必要とされずにいた。

だがティーナは自分を必要として、いや、認めてくれているのだ。

「僕やるよ。ムダルの軍勢をやっつける」

そしてティーナに微笑んだ。

9…ヘタレの戦い

翌日、ムダルの軍勢を倒す為の作戦会議が行われた。

とはいえ、作戦といってもティーナが襲われて滝に落ちた時の教訓から考えれば、結局ファリスが1人で戦うのが一番良いのだ。

他に人が居れば、ファリスはその人を守らなくてはならなくなる。

それに矢や槍などの敵の攻撃は、ファリスの結界にはまったく歯が立たない。

ファリス1人が瞬間移動でムダルの軍勢のと真ん中に突っ込み、敵の攻撃を物ともせず、ファイヤーボールを撃ちまくる。

これで勝負はつくだ。

こうして、ファリスが1人で突っ込む。という作戦とも言えぬ作戦が実行される事となった。

ムダル軍の参謀ザークは陣営にて司令官のディエゴに戦況を報告していた。

ザークは黒く短い髪と同じ色の瞳を持った男だった。年のころは30を過ぎたぐらいだろうか。体格は武人としては大きい方とは言えないが、引き締まり鍛え上げられた印象を受ける。

「戦況はこちらに有利に進んでおります。ここ数日の戦績は3勝2

敗。こちらの計画通りです」

報告を受けてディエゴは渋い表情となった。

ディエゴはザークよりも10歳ほど年下で、ザークよりも頭半分ほど背が高く体も一回り大きかったが、その体はどこか弛んだ印象を与えた。

「やはり全勝するわけには行かんのか？」

「はい。なまじすべて勝ってしまったては敵に警戒されます。そうならば敵は早々に城に立て籠もりましょう」

つまり、ティーナを初めとしたリリエル陣営では、勝ったり負けたりしながら少しずつ押されていると思っていたのだが、そもそもそれはムダル陣営の作戦だったのだ。

しかしディエゴはザークの説明に納得しかねる様に口を開いた。

「だが、敵が城に立て籠もると言うなら、敵の食料を断ち、兵糧攻めにすれば良いではないか」

ザークは頭を抱える思いだった。

何度同じ説明をさせれば気が済むのか。

この様な男など、もしムダルの跡取りでなければ、一軍の司令官どころか何の職にも、いや乞食すら務まらないだろう。

「確かに敵を城に押し込めれば兵糧攻めを行う事が出来ます。しかしその挙句最後の最後で敵が決死の攻撃を仕掛けてくればどうなりますか？ 現在、我が軍は敵の3倍の兵力ですが、死を覚悟して向かってくる敵の力は侮れないもの。3倍の数とはいえ安心できません

ん。野戦で出来るだけ消耗させるべきなのです」

「だが、負ければこちらも被害を受けて、敵も減る様にこちらも減るならば意味が無いではないか」

駄目だ。こいつは底抜けの馬鹿なのだ。

だが何度目になるかは分からないが、ザークはうんざりしながらも最早一言一句暗記している台詞を繰り返した。

「いいですか。初めは30対10で3倍でも、お互い5ずつ損害を受ければ、25対5で5倍となり、6ずつなら24対4で6倍。7ずつならば23対3で7倍以上。しかも実際は我々の損害は敵よりも少ないのです。敵がこちらの思惑通りに野戦に応じる限り、我々も野戦におびき出す様に動くべきなのです」

「だが、敵を兵糧攻めにするならば、敵を倒さず城に立て籠もる数を多くした方が良からう」

ディエゴの言葉に、ザークは改めて今回の戦いで一番困難な任務が何かという事を再認識した。

それはこの馬鹿の御守をする事なのだ。

並みの神経の持ち主ならば、既に任務を放棄し軍からも出奔しているだろう。

「城に立て籠もる人数など、敵が完全に籠城してから村々を襲い、その住民を、特に女子供を城に追い込めばいくらでも増やせるのです！ 逃げてきた領内の民を追い返す訳には行かないのですからな。そして立て籠もらせるならば、兵士ではなく戦闘の役に立たない女子供の方が良いのです！」

「うむ。なるほどな」

ディエゴはここまで説明されてやっと鷹揚に頷いた。

「ご理解ありがとうございます」

ザークは内心の「お前、三日前も同じ事を言っただろ！」という言葉を飲み込み礼儀正しく一礼した。

そして最早馬鹿の相手にしてられないと「では、各部隊の隊長と打ち合わせがありますので」と言い残し、その場に背を向けた。

ザークはディエゴの「うむ。ご苦労」と言う言葉を背に受けながら、どうして今の台詞で「自分が軍議から除外されている」という事にすら気付かないのか、不思議でならなかった。

そしてその後、ディエゴを除いたこのリリエル遠征軍の幕僚達を、ある天幕に招集して行われている軍議にて、ザークは数日前から気になっているある事について報告を受けていた。

そのある事とは、リリエルに魔物が味方している。というものだ。

勿論、ザークも初めはその様な事は信じなかった。

だが複数の兵士が証言し、重ねて報告があるとさすがに信じないわけにも行かなくなったのだ。

「だが、今のところその魔物が戦闘に参加しているという報告は無いのだな？」

本来司令官が座るべき場所に座りながらザークが問いかけると、

幕僚の一人がそれに対して答えた。

「はい。その魔物はリリエルの領主クリストフの娘、ティーナの護衛をしていたらしいという事でしたが、戦場に出てきたという報告は届いておりません」

ザークはその言葉に考え込んだ。

どうして敵はその魔物を戦場に出さないのか？

以前、領主の娘のティーナを谷底に追い落とし命を奪ったという報告を受けたが、どうやってか、そのティーナは命を拾ったらしいという報告も受けている。

その魔物はあくまでもティーナの護衛としてだけ存在しているのだろうか？

そして今も戦場には出ずに、ティーナの護衛を続けているのだろうか？

いや、その様な事は馬鹿馬鹿しい話だ。

戦場に出せば勝つと分かっている戦力を、わざわざ出さずに居るなどあり得まい。

では、その圧倒的な戦力を出さない理由とはなんだというのか？
敵に何か策があるとでも言うのか？

しかし、今までリリエル軍と戦ってきた感触からは、リリエル陣営に自分に悟られぬほどの策を立てられる者など居そうに無い。

ザークは思案を重ねた。

だがこのザークの長々とした思考は、まるっきり無駄だった。

突然、軍議を行っている天幕の外で、ドゴン！ という轟音が聞こえてきたと思うと、それに続いて兵士達の逃げ惑う悲鳴。そしてさらに続く轟音。

ザークが「どうしてそれほど戦力が戦場に出てこない？」と思っていたその戦力が今まさに攻めてきたのだ。

「まっ魔物です！ 突如魔物が現れました！」

天幕の外から兵士が転がり込んできた。

ザークがその兵士の脇を駆け抜けて天幕の外に出ると、確かにその魔物が居た。

ファアリスは、ムダル軍の本陣のど真ん中に瞬間移動で出現すると、とりあえず兵士達がたむろする付近の地面にファイヤーボールをぶっ放した。

いきなり火の玉が目の中の地面に突き刺さり、轟音と共に舞い上がった地面の土を被った兵士達は悲鳴を上げて逃げ惑う。

「うっうわー！」

「化け物だ！」

他の兵士達はその轟音と悲鳴に何事かと思いついて集まってくると、ファアリスはその兵士達の足元の地面にもファイヤーボールをぶっ放した。

そしてその兵士達も逃げ惑う。

しかし、さすがに敵の本陣だけあった精鋭揃いなのか、なんとこの状況でもファールリスに攻撃を仕掛けてきた猛者がいた。

だがこの猛者の勇氣ある行動は、結局は味方をさらに怯えさせる結果しか生まなかった。

渾身の力をこめて放たれたその猛者の槍による突きは、ファールリスの心臓の位置でガキンという金属音を鳴らし跳ね返された。

そして次の瞬間、かざされたファールリスの手から放たれた火の玉により、その猛者は吹き飛んだ。

その光景をみた兵士達が恐怖のあまり逃げ散った。

そして逃げる兵士達を追い立てる様に、ファールリスのファイヤーボールが放たれる。

結局その猛者の行動は、ファールリスの不死身ぶりとファイヤーボールの威力を改めて、兵士達に植え付ける事しか出来なかったのだ。

いや、違った。

この猛者の行動から一人だけあるヒントを得た人物がいた。
他でもないザークである。

（あの魔物はもしや……）

ザークは辺りを見回し、一頭の馬を見つけた。

どうやらその馬の持ち主は地面に打ち込まれたファイヤーボールの轟音により棹立ちになった馬から振り落とされ、しかもその後徒歩で逃げ去ってしまった様である。

ザークはその馬にまたがり、そしてなんと攻撃をまったく受け付けず、一撃で猛者を吹き飛ばす魔物に近寄って行ったのだ。

その間にもファリスの攻撃により、兵士達は逃げ惑いムダル軍本陣からはほとんど兵士が居なくなっている。

勿論、ディエゴは真っ先に逃げ去っている。

ファリスは、ムダル軍兵士を追い払う為にファイヤーボールを連射していたが、視線の隅に馬に乗りこちらに近寄ってくる人物を捕らえた。

その者へと手をかざし、ファイヤーボールをぶつ放す。

ファイヤーボールはその者が乗る馬のすぐ近くの地面へと突き刺さり、轟音と土砂をその者に叩きつけた。

だがなんとその者は、器用にも轟音に驚いて棹立ちになった馬から落馬せずに耐え切り、馬を押さえ込んだのだ。

そしてファリスを睨むと、ゆっくりと馬の歩を進めさせて、さらにファリスへと近寄っていく。

ファリスもそれに対して、さらにファイヤーボールをぶつ放す。

だがまたしてもその男は、棹立ちになる馬に耐え切った。

そして今度はファリスを睨むのではなく、にやりと笑ったのだ。その笑いはまるで何もかも見通している様だった。

その笑いを見た瞬間、ファリスの背中に冷たいものが流れた。

「うわー！」

フアーリスは反射的に叫び、そしてファイヤーボールを連射する。

さしものその男も、そのファイヤーボールの連射には馬を抑えきれずに落馬した。

そして、落馬した時にどこかを打ったらしく、危なげな足取りでゆっくりと立ち上がった。

フアーリスは思わず身構えた。

明らかに自分の方が強いのは分かっているにも関わらず、なぜか相手から恐怖を感じたのだ。

だがその男は、立ち上がった後にフアーリスを一瞥すると、フアーリスに背を向けて、やはり危なげな足取りで立ち去って行った。そして他の兵士達もすべて逃げ去った。

こうしてフアーリスの攻撃により、ムダル軍本陣は崩壊したのだった。

だが、逃げ去る兵士達の群れに紛れ、落馬した時に打ち付けた体を引きずりながら、ザークはまたもやにやりと笑い、そして呟いた。

「ヘタレか」

10…ヘタレの晩餐

ムダル軍の本陣が崩壊したとの報告を受けたリリエルのリクルハルド城では、みな喜びに沸いていた。

「おお。ムダル軍を追い払ったか！」

リリエルの領主クリストフも大いに喜び、城内での戦勝の宴を催すべくその準備を命じる。

そして勿論ティーナも喜んだ。

「ありがとうファリス、あなたのおかげよ！」

ファリスが1人になった時を見計らい、満面の笑みでファリスを迎えて、その笑みのまま近づき、そしてファリスを抱きしめた。

勿論「この状況なら、喜びのあまり抱きしめても可笑しくないわよね？」と十分計算の上である。

だが、ファリスもやはり気が高ぶっているのか、普段の彼のヘタレ振りからは考えられない行動を取った。

ファリスの両手は、数瞬戸惑った様に宙を掴んでいたが、その後軽くではあるが、なんとティーナの腰にその両手を添えたのだ。

これに驚いたのはティーナの方だった。

ファリスはどうせまたドギマギとし、そして最後には自分の体を突き放し、その結果に内心ため息をつく自分。というところまで

予想していたティーナは、自分の腰にファリスの手が添えられた瞬間、つい「キャッ!」と小さく叫んで反射的に体を引いてしまったのだ。

「あ。ティーナごめん……」

「い、いえ……」

ファリスが顔を真っ赤にする。

良い雰囲気と思い女の子の手を握ったら、その手を振り払われたかのような気恥ずかしさだ。

（調子に乗りすぎちゃったかな……）

そして勿論ティーナは、好きな男の子が折角手を握ってくれたのに驚いてその手を振り払ってしまったかのような、無念さを味わっていた。

（折角のチャンスを……）

そして気まずいながらも、この後どう動けば良いか分からず、ほとんど背の変わらない2人は同じ高さの目線で見詰め合っていた。だが、いつまでもこのままという訳にも行かず「そろそろ行かなくちゃ」「そうね。じゃあまたね」とお決まりの台詞を交わし、2人は別々の方向へと、そそくさとその場から立ち去ったのだった。

そして時も過ぎて夕刻となり、さあ戦勝の宴を始めようと、領主であるクリストフ、娘のティーナ、今回最大の功労者ファリス、そして重臣達が集まり、グラスを片手に乾杯をしようという時に、ムダル軍を監視させている部隊から伝令が届いた。

「ムダル本陣は、元の場所から数キロ後退した場所で再度軍勢を集

結させているもようです!」

この報告にリリエル軍の司令官であるアルベルトが口を開いた。

「それは、自領へと退却する為に一旦軍勢を纏めているという訳ではないのか?」

だがアルベルトのこの質問に伝令は困惑して答えた。

「いえ……さすがに集結した意図までは……」

「そうであろうな……」

アルベルトは、右手にグラスを持ったまま、顎に左手を添えて、ムダル軍の意図を考えている様だった。

そこへ同じく右手にグラスを持ったままの領主クリストフが口を開いた。

「宴は中止にするべきかの?」

伝令へと向いていたアルベルトは、クリストフへとすばやく向き直ると、うやうやしく一礼する。

「は! もし敵が逃げたのではなくまだ戦うつもりならば、その前に戦勝の宴をしたとなるとかなり恥ずかしい事になります。中止になさるべきかと」

「そうか……」

クリストフは残念そうにため息をついた。

そしてその様子を見た給仕の者は慌ててその場を後にし、厨房へと向かった。

城の料理人に料理を作るのを止める様に伝えに行ったのだ。

すでにかなりの量を作ってしまったているが、今からでも止めるべきだろう。

こうして戦勝の宴は中止となり、その代わりに対ムダル軍についての軍議が行われる事となった。

「敵本陣は再集結しているとして、敵の他の部隊はどうなっておるのだ？」

アルベルトが伝令に問いかけた。

ムダル軍は一箇所に纏まっているのではなく、領地内の要所要所に部隊を配置して複数の陣がある。

ファリスが本陣だけを狙ったのは、本陣が壊滅すれば敵はリリエル攻略を諦め全面撤退するに違いないという判断によるものだったのだ。

「ファリスこれ美味しいわよ。食べなさい」

ティーナが料理が盛られた皿をファリスに差し出した。

「は。他の部隊に動きは見られません」

伝令がアルベルトの質問に答える。

「ありがとう。ティーナ」

ファリスがティーナから皿を受け取り、自分の前においた。

「そうか……」

アルベルトは短く呟いた。

本陣が崩壊すれば他の陣も動揺し、敵軍は四散する可能性もある。とも考えていたがさすがに虫が良すぎた様だ。

「折角だから、あなたもこれを食べていきなさい」

ティーナが伝令に声を掛けた。

「ありがとうございます。お嬢様。いただきます」

普段はとても食べられないご馳走を前に、伝令の顔がほころぶ。

アルベルトの思案は続いていた。

ザークはリリエルに自分に対して策を立てられるほどの者など居ないと、言い放ったがアルベルトとて無能と言う訳ではない。

ザークが有能過ぎると言うべきだろう。

アルベルトの見たところ、敵本陣が再集結する事に不思議は無い。先ほど伝令にも問うた様に、退却する為に軍勢を一旦纏めているという事も十分考えられるのだ。

だが、退却するというのなら他の陣の部隊にも集結する様に命令しても良さそうなものなのだが……。

「アルベルト。あなた食べないの？」

「あ。すみません。食べます」

ティーナの問いかけにアルベルトは即座に答えた。

どうしてこういう状況になっているかと言うと、勿論、宴の為に作った料理が勿体無いので、どうせなら食べながら軍議をしようという事になった為だ。

そして、なぜティーナがその軍議の場にいるかということ、今リリエル軍で最大の戦力と目されるのはファリスなのだが、そのファリスが戦っているのはティーナの願いによるもの、という事になっているからである。

「でも、さっき聞いていた通り、撤退する為に軍勢を纏めていたんじゃないの？」

ティーナが問いかけると、アルベルトは手にしたフォークで突き刺した肉の塊を口に入れる直前で止め、フォークを置いてティーナの疑問に答えた。

「はい。それは私も考えましたが、退却するのならば敵の他の部隊も動いているべきかと」

そして答え終わると、またフォークを手にした。

今まで口に料理をほおばっていたファリスが、料理をゴクンと飲み込むとアルベルトに問いかけた。

「じゃあ、また僕が攻めた方が良いのかな？」

アルベルトはフォークを置いてその質問に答える。

「確かに敵の意図が戦闘継続とはっきりしたのなら、そう願う事になるでしょうが、現時点ではまだそこまでは……」

「そっか。よかったー」

ファリスも「攻めた方が良いか」とは聞いたが戦闘が好きなわけではない。

取り敢えずは戦わなくても良いと言う返答に安心した。

「どれくらいで、敵が撤退なのか、まだ戦うつもりなのか分かるの？」

グラスから口を離してティーナが問いかけた。

アルベルトはフォークを置いた。

「そうですね。そればかりは敵に聞いてみないと……と言いたいところですが、実際撤退するつもりならば、長期間留まっている必要はありません。近日中に動きが無ければ撤退の意思はないと判断してよろしいかと」

そしてまたフォークを手にする。

そこへ、今まではじめて食べるご馳走に舌鼓を打っていた伝令が、顔を上げてアルベルトに問いかけた。

「では、敵本陣はやはり交代で常時監視して置くべきでしょうか？」

フォークを置いた。

「勿論だ。そして何かあればすぐに伝令をよこす様に。些細な事でも構わん。それがどの様な意味を持つかはこちらで判断する事だ」

フォークを手にした。

「じゃあ、僕は敵が動くまで待機していれば良いの？」

すでに料理を食べ終わっているファリスが、行儀よく膝に手を置きながら問いかけた。

フォークを置いた。

「はい。先ほども申しましたが、ファールリス殿には敵が撤退しないとはつきりした時に、またご出陣をお願いする事になります」

フォークを手にした。

そしてアルベルトはティーナやファールリスからの質問について考えた。

どうして俺にばかり質問するのか、料理が食べられないじゃないかと。

軍議なので当然、自分以外にも軍部の人間は沢山いるのだ。

特に副官のベムエルや、副司令官のクラウス。奴らは何をしているのか。

少しは気を利かせて自分が変わりに答えようとは思わないのか。

だがアルベルトがベムエルとクラウスに目を向けると、その2人はすでに料理を食べ終わり食後の酒を飲んでいた。

アルベルトは反射的に2人を怒鳴りつけそうになったが、踏みとどまった。

さすがにお嬢様の御前で怒鳴る事など出来ない。

だが、アルベルトは大きく息を吐くと、気を取り直した。

もう自分への質問は終わった様だ。ならば今の内に料理を食べるべきだろう。

アルベルトはフォークを手にし、そして改めて肉の塊をフォークで突き刺した。

だがそこへ耳を疑う様な言葉が聞こえた。

「じゃあ、話も終わったみたいだし終わりにしましょう」

ティーナの声だった。

軍部の責任者は自分なのに、どうして自分を差し置いて軍議を終了させようとするのか。そう思ったアルベルトだったが、さすがにお嬢様に対して文句を言う訳にもいかない。

しかも実際、軍議で話し合うべき事は話し終わっている。

後は、自分が料理を食べる時間が欲しいだけなのだ。

しかし自分が料理を食べ終わるまで軍議を続けて欲しいなどと、言える訳が無い。

だが、かと言って、軍議が終わった後自分だけ残って食事続けるなど、給食で嫌いな物が食べられなくて食べ終わるまで残されている子供じゃあるまいし、出きる訳が無い。

アルベルトは、汚れてもない口をナプキンで拭うとおもむろに口を開いた。

「はい。話し合うべき事も他に無い様ですし、軍議は終了いたしました」

こうして極一部の人間を除き、内容的にもお腹的にも満足して軍議は終了した。

そして軍部ではしばらくの間、この時の軍議の参加者の間でこう言う話が囁かれた。

「最近アルベルト司令官が、俺達に対して厳しいのだが……」

11…ヘタレの弱点

ファールリスの襲撃から数日後、ムダル軍が新たに構築した本陣でザークは将兵の掌握に努めていた。

「とにかく本陣将兵の動揺を鎮めるのが先決だ。この状態のまま他の部隊を合流させれば他の部隊にまで動揺が広がる」

だがその軍の動揺を抑えようとしているザークの神経を逆撫でする者がいる。

誰かと言うと、勿論ディエゴである。

「どうせあんな化け物には勝てんのだ。軍の動揺を抑える事など不要だろ。早く領地に帰ろうではないか」

彼は敗戦の屈辱を紛らわせる為に酒の力を借り、そして酒臭い息と共に吐き捨てた。まるであんな化け物に勝てないのは当たり前なのだから、敗戦は自分の責任ではないと言わんばかりである。

いや、もったも領地に帰れば、彼はどのような負け方であったとしても敗戦の責任はザーク以下幕僚達に取らせるつもりなのだろう。

ザークは、こんな邪魔にしかならん男は、出来るならば本陣崩壊の混乱に乗じて殺してしまおうか。とも考えたが、跡取りを戦死させてしまったとなれば、その責任の追及は免れまい。そう考えると我慢するしかなく、そして生きながらえさすならば、この男を納得させなければならぬ事も、また仕方が無いことだった。

「いえ、まったく勝機が無いわけではありません。私はあの魔物の

弱点と言うべき物を見つけております」

「弱点だ？ あんな化け物にそんな物ある訳がなろう！」

ディエゴが半分以上酒が空になった杯をテーブルに叩き付けた。巨体であるディエゴのこの乱暴な動作に、気の弱い者なら身を竦ませる所であろうが、勿論ザークは眉一つ動かさない。

槍の一撃をまともに受けても傷一つ付かず、手からは火の玉を放つ魔物に対してすら、毅然と対峙できる胆力の持ち主であるザークに、体と声が大きいだけの者など何ほどの事も無いのだ。

ザークはディエゴの威嚇などまるで無かったかの様に話を続けた。

「奴は……あの魔物はヘタレなのです」

「ヘタレだー？」

ディエゴが醜い顔をさらに歪め疑わしげに言葉を吐いたが、またもやザークは意にかえさず話を続ける。

「ディエゴ様も見えていらっしやっただとは思いますが、結局奴が攻撃したのは自分に対して攻撃を仕掛けて来た者のみ。他の者達に対しては威嚇の攻撃しかして来なかったでは無いですか？」

ザークは少し首をかしげまるで「そうでしょ？」と言わんばかりにディエゴに問いかける。勿論、ディエゴが真っ先に逃げ、その様な光景を見ている訳が無いと分かっている上で言っているのだ。

だが真っ先に逃げた為見ては居ないとは言えないディエゴは「うむ。確かに……」ともしっかり顔を顰めて同意した。

ザークは内心の嘲笑を完璧に覆い隠し「そして私はさらに確認する為に、奴に近寄っていきました。攻撃を仕掛けてこない者には自分も攻撃しないと言うのが偶然、と言う事もありえない話ではないですから。ですが奴はいくら私が近寄っていても、私が攻撃しない為、私に対しては威嚇しかして来なかったのです」と噛み砕くように説明した。

そうでないとディエゴには理解できず、何度も同じ事を繰り返して説明する事になるのだ。

だがディエゴは納得しかねる様に腕を組み、またも酒臭い息を吐いた。

「だが、あの化け物は我らを追い払う為が目的で、初めから、こちらには攻撃するつもりが無かったのかも知れないではないか」

ザークは咳をする振りをして右手で口を隠し、ディエゴに聞こえない様に小さく舌打ちした。どうやらあれほど噛み砕いて説明してもディエゴには足りなかったらしい。

「奴は自分に攻撃してきた者には攻撃しているのです。つまり奴も場合によっては攻撃する事もある。そしてその場合とは、敵が攻撃してきた場合だけなのです」

ディエゴはなにやら不満げに「まあそうかもしれない」と言い、ザークから顔を背けて酒壺から手酌で杯に酒を満たした。

結局ディエゴはその歪んだ性格から、他の者の言う事に初めから素直に頷く事が気に食わないだけなのだ。

「で？ それで？ ヘタレだからどうしたと言うのだ？」

ディエゴはザークの言葉を素直に受け入れざる得なかった苛立ち

を隠さず、吐き捨てる様にザークに問いかけた。

ザークは、今から説明する内容を、この馬鹿に納得させるにはどれほどの時間が掛かるかを考え、気が遠くなる思いを感じた。

だが形だけでも司令官である許可を受けねばなるまい。これも任務の内と覚悟を決め、長い説明を始めた。

ティーナは姿見の前で、念入りに自分のつま先から頭のとっぺんまでをチェックしていた。

ファールリスと共に城にたどり着いた時にはファールリスは衰弱のあまり昏睡状態にあり、そしてその後良くなり、歩ける様になったと思うと、ムダル軍との戦闘。

折角城に着いたというのに、未だファールリスに城下町を案内していなかった。

ティーナは胸の高鳴りがファールリスに聞こえない様にと、さりげなく左手を胸に当て出来る限り平静を装ってファールリスを「折角だから、町を案内するわね」と誘った。

ファールリスは素直に「ほんと！　ありがとう」と笑顔で応じてくれた。

ティーナは胸に当てていた左手を強く握り、喜びを胸に押し込んだ。

内心飛び跳ねて喜びたい気持ちだったが、単に町を案内するだけと言うのに、飛び跳ねる訳にも行かないだろう。

勿論、初めてきた場所で、案内するといわれて断る者もそうは居ないとは分かってはいるが、それとこれとはまた別の話だ。

そしてもうすぐファリスとの待ち合わせの時間なのだが、今ティーナは泣きそうな気持ちになっていた。

姿見で自分の顔をチェックすると、左目が少しいつもより腫れぼったい気がする。

侍女のエリスは「いつもと変わりませんよ」というが、違うのだ。

ティーナは姿見の前で何度も瞬きし、左目を指で擦るが、やはりいつもと違う気がする。

侍女のエリスはそんなお嬢様の後ろ姿をうんざりと眺めていた。お嬢様はさっきから、目が腫れぼったいと「違うの。違うの」と繰り返すが、エリスにはどう見てもいつもと同じにしか見えない。

だがエリスは不意に、ある豆知識を思い出した。

「そう言えば、目の腫れは冷やせば直ると聞いた事が……」

「それよ!」

エリスの言葉にティーナが叫びながら振り向く。

「すぐに冷やす物をもってきてちょうだい!」

こうしてティーナは冷やした水で絞ったタオルを左手で左目に押し当て、右手で素早く髪型や服装の乱れを直した。

そして暫くしてからタオルを放し、再度姿見で顔をチェックした後「腫れがひいたわ！ エリス、ありがとう！」とエリスに笑顔で礼を言い、足早に部屋を後にした。

部屋に残されたエリスはティーナが出て行った扉を見つめながら呟いた。

「やっぱり、なにが違うのか分からなかったわ……」

思わぬ事に手間取ったティーナは待ち合わせ場所に急いでた。

だがその足元は踵の高い靴を履いており、走りにくい。だが遅れる訳には行かない。がんばって走った。

しかしその待ち合わせ場所が見えてくると、ファリスの姿が見えた。既にファリスが先に着いていたのだ。

ティーナは足を止め、そしてゆっくりと歩き出した。待ち合わせに遅れるのは避けたかったが、こうなっては仕方が無い。

裾を乱して走る姿を見せるくらいなら、余裕を持ってきたと装う方がマシだろう。

「あら。ファリス早いね。私遅れたかしら？」
構えて平静を装い、むしろ悠然と話しかけた。

そしてファリスは「ううん。そんな事ないよ」とにこりと笑った。

「そう？ 良かったわ」

ティーナもファリスに微笑む。

そして2人で町を色々と見て回った。

ティーナはこの領地の支配者の娘。住民達にとっては一国の王女と変わることは無い。

行く先々で「お嬢様。お嬢様」と傳かれた。

「ティーナって本当にお嬢様なんだね」

ファリスが関心した様に言う。

「そんな事はないわよ。みなと変わらないわ」

そう言って首を振った。

だが実際には変わらないわけは無い。むしろこれはティーナの願望と言った所だろう。

年頃の娘にとって、自分と対等の友人が居ないというのも寂しいものだ。

ティーナは少し寂しげに俯いた。

ここで気の利いた男の子ならば、「じゃあ、僕が友達になってあげる」なり「僕にはティーナがお嬢様でも関係ないよ」とでも言うのだろうが、当然ヘタレにそんな甲斐性はない。

ファリスにはティーナの顔を覗き込み「大丈夫？」と聞くのが精一杯だった。

だがティーナは心配そうな顔のファリスを見て、がんばって気を取り直した。

今日はあくまでファリスの案内を、いやデートをしにきたのだ。自分の人生相談ではない。

ティーナは「大丈夫よ。それよりも次に行きましょう」とにっこりと笑って見せた。

そして見るべき所も見えて周り、日も暮れてきたので城へ帰る事にした。

ティーナは道を知らないファリスに悟られない様に、あえて人通りの少ない道を選んだ。

ここで、ある作戦を計画していたのだ。その為にティーナはずっと足が痛いのを我慢して踵の高い靴を履いていたのだ。

人通りの無い道を暫く歩いているとティーナが不意に「ついた！」と声を上げた。

突然声を上げたティーナにファリスが声をかけた。

「どうしたの？」

「ちょっと靴が合わなかったみたい……」

ティーナの言葉にファリスがティーナの足を見ると、靴擦れをしたのか踵に血が滲んでいた。

するとファリスが心配げにティーナの顔を覗き込んだ。

「大丈夫なの？ 血が出てるよ」

「大丈夫よ。でもちょっと歩き難いかな……」

ティーナの作戦だった。

いくら何度もアタックしているとはいえ、なんだかんだ行ってティーナはお嬢様である。自分から手を握ってとはいいい難い。

今までのアタックもすべて、ファリスから手を出させる様になんばって仕向けようとするものばかりなのだ。

足を痛めていると成ればファリスも手を貸して、いや握ってくれるだろう。その為にティーナは今まで足の痛みに耐えてきたのだ。

だがファリスの行動はティーナの予想を超えてた。

「大変だ。ちょっとだけ待っててね」

というとファリスは瞬間移動でその場から消えた。

そして暫くすると、その手には歩きやすそうな踵の低い靴があった。

ティーナが歩き難いと言ったので、瞬間移動で城へ行って歩きやすい靴を持ってきたのだ。

ファリスの手にある靴を見て、ティーナは目の前が真っ暗になるかの様な衝撃を受けたが、何とか耐え切った。まだ負けた訳ではないのだ。

「ありがとうファリス。でもやっぱり足が痛いわ……」

足をまじまじと見られるのは恥ずかしいとは思いながらも、血の滲む踵をファリスに見せ付けた。

「本当だ。ちょっと待ってね」

そう言っているとファリスはその踵に手をかざした。勿論、治癒魔法である。

そして魔法により踵の傷も治ると、ファリスはにっこりと笑った。

「これで大丈夫だね」

ティーナは人形の様な感情の籠らぬ笑顔でファリスに礼を言った。

「ありがとう。ファリス。魔法って便利なのね」

その台詞はどこまでも棒読みだった。

11..ヘタレの弱点(後書き)

どうも深夜に書くと暴走しますね。

っていうか、主人公ティーナ？

12…黄昏のヘタレ

フアーリスは城内に宛がわれた部屋のベッドに仰向けに寝転がり、考え事をしていた。

元の世界の事をだ。

フアーリスは元の世界では魔法学校の寄宿舎に寝泊りしていた。

それゆえ、親元を離れての生活にも慣れていたし、実際馬鹿にされていた魔法学校よりもこちらの世界の方が居心地がよかった。

だが、こちらの世界に着てからの巡るましく訪れる数々の騒動が一段落し、改めて冷静になるとやはり不安は拭えない。

（僕、元の世界に帰れないのかな……）

自分と同じ様に、魔法の世界からこちらの世界に飛ばされてきた人が居ないか調べようかとも思ったが、自分の魔法に対するこの世界の人々の反応を見れば、今までその様な人が居なかった事くらいフアーリスにも理解できた。

どうやら、魔法という言葉がないというより、魔法に相当する概念すら無いらしい。

彼らにとって魔法とは、伝説にすら、御伽噺にすら出てこない代物なのだ。

学校はともかく、両親の元へは帰りたいと思う。だがどうやって帰れば良いと言うのか。

そう考えると、ファリスの心は深く沈んだ。

そもそもファリス自身気絶していた為、どうやってこの世界に
来たのかも分かっていないのだ。

それに、これから先の事も考えると、不安で胸が押し潰されそう
になる。

今はまだティーナのおかげで城に住めている。

だが、いつか自分の力で生きて行かなくては成らないとなったら
どうすれば良いのか。

実際ファリスに行動力があれば、自分の魔法を駆使すれば、別
にその魔法を悪事に使用しなくても、瞬間移動を使つての運送業な
り、治癒魔法を使つての医者なり、十分商売として成り立つのだが、
ヘタレなのとあくまでまだ学生であるという事が重なり、そこまで
の行動力も、発想も無い。

ファリスは改めて思う。この世界に来てすぐ、ティーナに出会
えてよかったと。

ティーナは、見ず知らずの自分を見捨てずに助けてくれたのだ。
ファリスは、ボルジの事はすっかりと忘れて、そう思った。

それだけでも、十分ティーナは優しいのだとファリスは思っ
ていたが、最近は特に優しい気がする。

この城にきて目覚めた時に、ティーナは谷から落ちた時に助けて
くれたお礼だと言っていたので、きっとそうなのだろう。

そしてファリスはティーナに町を案内して貰った時の事を思い出し、ファリスの思考はその事に移った。

それは、元の世界には戻れないかもしれないという、現実から目を背ける行為だったが、実際元の世界に戻る方法が皆目検討もつかない以上、それは考えても無駄な事だ。

こればかりは彼がヘタレという事だけが原因ではないだろう。

ファリスがティーナに連れられて町に行くと、まず商店などの品々が広場や道に面したところに山積みになされている事にまず驚いた。

ファリスの居た世界ではリードと呼ばれる魔法の効果を遮断する物質で作られた壁で囲んだ店の奥に商品が置かれているのが普通だったのだ。

その壁の内側も魔法の影響をすべて無効化する。

つまり凹型の店の奥に商品が置いてあると考えればいい。

なぜその様な作りになっているかというと、勿論、瞬間移動を利用しての窃盗に備える為だ。

そしてさらに言えば、刑務所の独房の壁、さらに刑務所の塀自体がこの物質で作られている。

ちなみに防御結界の魔法もその時は無効化されているが、魔法自体は体の奥底に発動したままなので、その場から離ればその瞬間、また結界は張られる。

また、その時にファイヤーボールなどの魔法を撃たればどうなるかと言えば、その場に入った瞬間ファイヤーボールの魔法自体無効化されて、掻き消される事になる。

ファリスがこの世界の店に驚いていると、ティーナが「こんな事が珍しいの？」と不思議がったので、自分の世界の店の事を説明した。

するとティーナは「そうなんだ。面白いのね。もっとファリスの居た世界の事を教えてね」と言うので、色々と話した。

自分が通っていた魔法学校の事や寄宿舎の事をだ。

家での事や家族の事は話さなかった。泣かない自信が無かったからだ。

女の子の前で泣くのは嫌だった。

ファリスは不意に、自分がティーナの事を女の子だと思っているのに気付いた。

初めて見た時は、ティーナの事は年上の女性なのだと思っていたのに。

勿論、ティーナがいきなり同年に成ったのでも、ましてや年下になったのでもない。

そんな事魔法でも出来やしない。

どうしてだろうと考えて、出会った時のティーナと今のティーナを思い起こして見ると、ティーナが最近よく自分に笑いかけてくれているのに気付いた。

それとティーナが谷に落ちた時に自分がティーナを助けた時の恩返しにと、優しくしてくれる事もあって、きっと前よりもずっと仲良くなれたからだ。

ティーナと仲良くなれていると思うと、嬉しかった。

自分には姉は居ないが、姉が居ればあんな感じなのだろうか？
では、ティーナは自分の事を弟の様に思っていたりするのだろうか？

そう考えてみると、自分の胸がもやもやとしてくる。

確かに自分はティーナよりも年下ではるが、「弟みたい」といわれると、何か一段下の存在に思われている気がするのだ。

（弟みたいとは思われたくないな……）

ではティーナも自分に姉の様にとは思われたく無いのだろうか？
そうファリスは考えたが、ティーナが聞いていれば「うん。うん」と大きく頷いただろう。

勿論実際は、本人に聞いてみない事には分からないが、ファリスは、自分が嫌なんだし、きっとティーナも嫌だよ。とそう考える事にした。

だが、そうなると、ファリスにとってティーナはどのような存在になるのか？

年上の女の子の友達だろうか？

そう考えると、ファリスの顔は赤くなる。

ファリスには縁のない話だったが、元の世界でも同級生で女の子と一緒に出かける者は沢山居た。

そしてそれは当然、デートと呼ばれるものだ。

ティーナが、自分にとって女の子の友達だとすると、前回一緒に

出かけたのはデートという事になるのだろうか？

そう考えると、いまさらながらにファリスの鼓動は早くなる。
自分は年上の綺麗な女の子とデートをしたのだ。

ファリスはベッドの上で落ち着き無く何度も寝返りをうった。
気持ちが高ぶって、なぜかじっとしてられないのだ。

そして遂には、寝て居られなくなってベッドの縁に座る。

座ってもまだティーナの事を考えていた。

（またティーナと一緒にどこかに出かけたり出来るかな？）

そう考えると、また鼓動が早くなる。

だが前回自分は失敗をしてしまった。

ティーナが足を痛めている事に気付かなかったのだ。

気付きさえしていれば、魔法で簡単に解決できたのに。

結局は、ティーナが足の痛みに耐えかねて声を出すまで気付いて
あげられなかった。

（ティーナももっと早く言ってくればいいのに……、あ、でもテ
ィーナは魔法が使えないから、魔法でどうにか成るとか分からなか
ったのかな？）

そう思い至ると、ファリスはさらにティーナに対して申し訳な
い気持ちになった。

（今度から、もっとティーナの事をちゃんと見ていないと……）
そう決意したファリスだった。

13…ヘタレの晚餐再び

ムダル軍を監視している部隊からリクルハルド城に伝令がやって来た。

どのような情報を伝えてきたのかというと、ムダル軍本陣以外の部隊も次々と陣を引き払い本陣へと集結しているという事だった。

「これってムダルの軍勢が退却するっていう事なの？」

ファーリスが前回の食事会、いや軍議の時にアルベルトが言っていた内容を思い出し、アルベルトに聞いてみた。

「はい。その様に考えて問題はないと思われます」
そう言うアルベルトの顔には、やっと戦いが終わると笑みがこぼれている。

アルベルトの返答にファーリスも喜んだ。これでまた戦わなくてすむのだ。

ファーリスは戦いが好きな訳ではないのだから。

そしてファーリスがティーナにも伝えようとティーナを探していると、テラスでティーナを発見した。

だが、ファーリスが伝えるまでも無くティーナもムダル軍が撤退するらしいという話を聞いていたらしく「ありがとうファーリス、あなたのおかげよ！」という聞き覚えのある台詞を発し、さらにデジャヴの様にファーリスに抱きついてきた。

前回折角ファリスからも抱きしめられそうだったのに、心構えが出来てなくてつい身を引いてしまったティーナは、心構えも万全にファリスからも抱きしめてくれるのを待った。

だがティーナは、まだヘタレという者をよく分かっていなかった。

今回は前回と違い戦いの後で気が高ぶっている訳でもないのも有るが、それ以上にファリスは（前にティーナを少し抱きしめ様とした時に嫌がられちゃったし、きつと今回もダメだよね……）とヘタレにふさわしい思考をしてしまっていたのだ。

ティーナはファリスを満面の笑みで抱きしめながら、ファリスからも抱きしめてくれるのを今か今かと待っていたが、その時は結局やってこず、そしていつまでもファリスに抱きついている訳も行かないティーナは、しぶしぶファリスから離れる。

内心がっくりしていたティーナだったが、その落胆を表には出さず、笑顔でリリエルの領主でありティーナの父であるクリストフからの伝言をファリスに伝えた。

「お父様が、戦勝の宴をするんですって」

「また？」

ファリスがついそう言うと、ティーナは笑った。

「ええ。そうよ。またよ。しかも今度は準備に2日も掛けて盛大にするらしいわ」

「2日も？　すごいね」

フーリスは前回の食事の美味しさを思い出し、準備に2日も掛けるという次の宴の料理を思い、口の中に唾がたまるのを感じた。

「前回は中止になったのがとても残念だったみたいなの」

「そうなんだ。そういえばあの後みんなで料理を食べた時、ティーナのお父さん居なかったしね」

「ええ。それがとても悔しかったらしいわ」

そう言うと、またティーナは笑う。

そして2人はさらに言葉を交わしながら並んで歩き出した。

その2人の影は、以前より少し距離が近く感じられた。

2日後、前回以上に盛大に準備された宴の会場に、クリストフは満足げだった。

料理も装飾も前回よりも遥かに手間が掛けられ、前回の宴がまるでただの家族の夕食かと思われるほどだ。

クリストフは酒を満たしたグラスを右手に掲げた、他の者達もそれに倣う。

そしてクリストフが「乾杯！」と言いかけたその時、またもやムダル軍を監視させている部隊から伝令が届いた。

みな視線がその伝令へと集まった。そしてその伝令が携えてき

た報告とはある意味みなが予想した通りのものだった。

「ムダル本陣から数部隊が出陣し、敵軍はすべて元の配置に戻りました！ 敵は退却しない模様です！」

やはり宴は中止か！ 出席者達がそう思うなか、その結末に納得いかない者がいた。

他でもないクリストフである。

彼は他の人々が宴は中止かと考え諦めた雰囲気の中、大きな声で叫んだ。

「乾杯！」

だが、毅然と宴を強行しようとした彼にみなは冷めた目が集中する。

「お父様、無茶よ……」

ティーナもつい呟く。

そしてファリスは（え？ 乾杯するの？ しないの？）と周りを見渡す。

会場中が静まり返る中、アルベルトが少し俯きながらクリストフの前まで静かに進むと、その場に跪く。

「御領主様……、残念とは思いますが、宴は中「わかつとるわ！」

沈痛な表情で宴の中止を訴えるアルベルトの言葉を遮り、怒鳴ったクリストフは持っていたグラスをその場に叩きつけると足早に会場を後にする。

アルベルトはクリストフが会場から姿が見えなくなるまで跪いていたが、クリストフの姿が見えなくなると立ち上がり、宣言した。

「では、軍議を行います！」

急いでテーブルの配置が換えられた。中央には軍議に出席する者達の席が設けられ、会場の端に他の人々の席が設けられる。

なぜその様な事をするのかといえば、当然料理が勿体無いからである。

そして準備も終わり軍議を開始されると、アルベルトがおもむろに口を開く。

「今回は主に、私の副官のベムエルと副司令官のクラウドスから、報告そして疑問にお答えします」

今度こそ料理を食べる！ そう決意していたアルベルトは前もって他の参加者の対応を2人に押し付けたのだ。

そしてまず副官のベムエルから状況が説明された。

「当初ムダル軍は本陣、それと5箇所陣を敷き我が領土に攻撃を仕掛けて来ておりました。我々はそれに対し迎撃の部隊を派遣し対応していたのですが、前回ファリス殿の御蔭で敵本陣は壊滅しました」

そしてここで一旦話を区切ったベムエルが周りを見渡し、特に話についてこれて居ない者や質問がある者が居ない事を確認すると説明を続ける。

「ですが、敵は新たに本陣を構築再集結しました。しかしこの時点では退却の為の再集結とも考えられ、さらに先日他の部隊も本陣に集結した事により、軍勢を纏めて自領に退却するものと推測されたのです。しかし、先ほど入った報告によるとなんとムダル軍は、改めて部隊を派遣し、また同じ様に本陣以外に5つの陣を構えたこの事です」

「それは、ムダルがまだ戦おうとしているという事なの？」

ティーナの質問に副司令官のクラウドが応じる。

「はい。自領に退却するならば、改めて陣を敷きなすす必要はありませんから」

このクラウドの返答に、ティーナは「そうね」と頷き、そしてアルベルトも満足げに頷いた。これで安心して食事が出来るだろう。だがこれで大丈夫とアルベルトがフォークを手に取り、目の前の料理に突き刺しすと、ここで我が耳を疑う言葉が聞こえた。

「そうですよね。アルベルト司令官」

クラウドの声だった。

（どうして俺にふるんだ！）

みな視線がアルベルトに集中する。

アルベルトがフォークを置き、姿勢を正した。

「はい。クラウドの言う事で間違いないと思われます」

そこかしこで「やはり……」と暗いが聞こえる。

折角、ムダル軍が退却し領内の平和が戻ると思っていたら、まだ戦いが続くとは。

出席者達は、心を沈ませながら、豪勢な料理に舌鼓を打った。

だがアルベルトは気を取り直した。もう自分の出番は終わったのだ。これ以後はゆっくりと料理を食べられるだろう。

「ムダル軍の本陣の位置は前と変わってないの？」

このファリスからの質問には、副官のベムエルが答える。

「ムダル軍の本陣は、以前ファリス殿に撃破していただき、その後再集結した場所からは移動しておりません」

アルベルトはベムエルの声を聞きながら、おもむろに料理を口に運んだ。

だが、ここで我が耳を疑う言葉が聞こえた。

「確か報告ではそうになっておりましたよね。アルベルト様」

ベムエルの声だった。

（俺に確認する様な事か！）

だが再度、視線がアルベルトに集中する。

アルベルトは、みな監視の中料理を口に入れる訳にも行かず、

フオークを置いた。

「ムダル軍の本陣は動いておりません。その為敵本陣だけ他の陣に比べ、位置が後退している事になります。ですので敵の意図は計りかねますが、他の陣が改めて構築されている以上、敵に侵攻の意思がある事には間違い無いと思われます」

このアルベルトの言葉に、出席者達の間には憂いを含んだ空気が漂った。

いまこの場に居るファリスという一見頼りなげな男の子は、無敵の力を持っているという、にも関わらず敵はまだ諦めず、しかもその敵の意図が計りかねているとは。

出席者達は不安げに、グラスを傾ける。

そこにティーナの不安げな声が発せられた。

「またファリスが戦わなくてはならないの？」

ティーナの不安とは、ムダル軍の意図が分からないという事ではない。

またファリスが戦わなくてはならないのか？ という不安だった。

自分がムダル軍をやっつけてとお願いしたものの、やはりファリスがあまり戦いたくは無いのだと察したティーナが心配がったのだ。

そしてティーナは「ねえ、アルベルト」と言葉を続けた。

（直接来たか！）

最早フォークを手にする間も無かったアルベルトは愕然とする。

ちなみにティーナがアルベルトに直接聞いたのは、クラウドとベムエルが結局アルベルトに問いかけるので、だったら初めからアルベルトに聞けば良いと判断した為だ。

アルベルトは両手を膝の上においてティーナの質問に答える。

「ファリス殿には申し訳ありませんが、出陣をお願いする事になります」

「そう……」

ティーナは沈んだ声でそう言うと、隣に座るファリスのグラスが空なのに気付いて水を注いであげた。

ファリスは、ティーナに向かって「ありがとう」と言うと、続けて「じゃあ、僕はすぐにまた戦ったほうが良いの？」と疑問を投げかけた。

ファリスの言葉はアルベルトを名指ししていなかったが、視線はアルベルトを指していたる。

すでにこの場の空気は、アルベルトが質問に答えるものだという雰囲気になっていたのだ。

アルベルトの手は既に膝の上から動いていなかった。（やむえん……）と既に彼は諦めていたのだ。

「いえ。敵の意図が分からぬ以上、少し様子を見ようかと思っています。万が一、敵がファリス殿と戦う手段を見つけたとも限りませんし」

この言葉に驚いたティーナは、口に入っていた料理を急いで飲み込むと叫んだ。

「駄目よ。それではファリスが危険だわ！」

「あ。いえ……。ですから、万が一の場合です。実際ファリス殿に対抗できる手段などありますまい。たとえ敵がその方法を見つけたと思っていたとしても、それはおそらく敵の勘違いか何かでしょう。私がファリス殿からお聞きした、ファリス殿の体を守っている「防御結界」なるものは、例えば寝ていたとしても体を守るとか。それでは誰もファリス殿に手は出せません」

「そうよね……」

不安が完全に拭われた訳ではないが、とりあえずは納得するしかないティーナだった。

そして軍議は、敵の警戒し防備を固めながら、敵の動きを待つ。という結論で幕を閉じた。

そして軍部ではしばらくの間、この時の軍議の参加者の間でこう言う話が囁かれた。

「最近アルベルト司令官が、俺達に口を聞いてくれないのだが……」

14…見抜かれたヘタレ

村のあちこちで火の手が上がっている。

ムダルの軍勢が村に攻めてきたのだ。

敵は村にやってくると、所構わず火を点けて回り、敵の進むのと同じスピードで火の手は広がっていく。

村中に村民の悲鳴が響く。だが、それが敵兵をおびき寄せる事になると気付くと、村人は口に手をあて必死に悲鳴を抑えようとする。

ある者は逃げ惑い、ある者は物陰に隠れてやり過ごそうとしたが、逃げる者は馬に乗る兵士によって容易に追いつかれ、物陰に隠れる者は建物ごと火をかけられた。

だが、傍若無人に暴れ回っていた敵兵の足元が、突如として轟音と共に弾け飛んだ。

村が襲われているという報告を受けたファリスが瞬間移動で飛んできて、村にあわられた瞬間村が襲われているのを目の当たりにし、反射的にファイヤーボールを放ったのだった。

「止めて！　これ以上ひどい事しないで！」

ファリスはそう叫ぶと、さらに敵兵を追い立てる様に、ファイヤーボールを連射する。

このファリスの攻撃に、敵兵はまったく抵抗らしい抵抗もせず逃げ散り、村民達は村に火が放たれているというのに、さらに火

の玉を連射しても大丈夫なのか？ と心配しながら、ファールリスに感謝した。

もったもこの後、敵兵により点けられていた家々の火が、ファールリスのブリザードの魔法により瞬く間に消されると、村民は心のそこからファールリスに感謝したのだった。

普段はファイヤーボールばかり使っているファールリスであるが、ブリザードやサンダーボルトが使えない訳ではない。

だが逆に言えば、使えない訳ではない程度にしか使えないのだ。

ブリザードはファイヤーボールより高度な魔法とされ、ファイヤーボールと同じ威力のブリザードを放出するには、2倍の魔力が必要だと言われている。

そしてサンダーボルトは同じ魔力ならばファイヤーボールより威力は強いのだが、なにぶん電気なので、思ったとおりの的に当てるのには高度な技術が要求されるのだ。

つまり、ファールリスのブリザードは威力が弱く、サンダーボルトはどこに飛ぶか分からない為、結局使い勝手の良いファイヤーボールばかり撃っているのである。

だが今回はその威力の弱いブリザードでも消火には役立った。

しかし、ファールリスによって敵を追い払いはしたが犠牲者も多く、家を焼かれた者も多い。

村民達の顔は一樣に沈んでいる。

ファールリスは居た堪れなくなり、自らを襲った悲運に絶えながら

もフアーリスに礼をいう村民達から逃げるように、また瞬間移動で城へと戻っていったのだった。

もっとも、フアーリスの瞬間移動では一回の瞬間移動では城まで届かないので、5回の瞬間移動でやっと城にたどり着くのだが。

「フアーリス殿御苦勞様」

帰ってきたフアーリスを出迎えたのは、アルベルトの副官ベムエルだった。

ベムエルは29歳になる長身の男で、長い茶髪を後ろで束ねている。

上官であるアルベルトは28歳で、実はベムエルより一つ年下なのだが、なぜそう言う事になっているのかというと、どうやらリリエルの重臣達は基本的に身分が世襲らしかった。

ちなみに副司令官のクラウスが31歳で3人の中では最年長だ。

アルベルト家とクラウス家が交代で、司令官と副司令官に任命され、ベムエル家は代々副官を務めるらしい。

そしてちょうど代替わりの時期なので、みなその職責に対して若いらしいのだ。

フアーリスは例によって、素直な疑問をぶつけてみた。

「代々副官って嫌じゃないんですか？」

だがベムエルは心底不思議そうな顔をした。

「どうしてだい？　今までずっとこれでやって来て問題は無いのに」

フアーリスは、自分が元居た世界では自分の職業は自分で選べた

ので、自分の職業が生まれた時から決められていて、しかも副官という誰かの補助的な仕事だという事は嫌じゃないのかと思ったが、ベムエルは嫌じゃないらしい。

というより、この世界では「そう言うもの」らしかった。

ファールリスはベムエルと連れ立って、アルベルトが居る司令官の執務室へと向かった。

その途中も廊下を歩きながらベムエルがファールリスに話しかけてくる。

「だけど、敵も何度もファールリス殿に追い払われても、追い払われても攻めてくるけど、いい加減にして貰いたいね」

そう、このベムエルの言葉通り、ムダル軍は本陣から軍勢を分散させ5つの陣を構築した後、村々を襲いだしたのだ。

もつとも、それらはすべて敵襲の報告がもたらされると、すぐにファールリスが出撃して追い払っている。

だがそれでも執拗に攻めてくるのだ。

「うん。早く諦めてくれたらいいのに……」

応じるファールリスの表情は暗い。敵は追い払ってはいるが、ファールリスが到着するまでに受けた村の惨状を見るのは、やっぱり辛いのだ。

そして執務室に着くと、ベムエルがノックをし「ファールリス殿を連れて参りました」と言った後、ベムエルが扉を開け中に入った。

「御苦労様です」

大きな地図を広げたテーブルの傍に置かれた椅子に座っていたアルベルトはそう言いながら立ち上がり、テーブルを挟んだ向かい側の椅子を右手で示し、ファリスに座るように促した。

そしてファリスが椅子に座ると、アルベルトも改めて椅子に座りベムエルはその後ろに立つ。

そしてファリスはムダルの軍勢を追い払った事を伝えたが、地図を睨みながら聞いていたアルベルトの表情は優れない。

だが、それが折角戦ってくれたファリスに対して失礼な態度だと思ったのか慌てて弁解する。

「すみません。気に掛かる事が合ったものですから」

「あ。別にいいです。それより気に掛かることって何なの？」

「敵の攻勢がなぜ止まないのかと……」

アルベルトはテーブルに両肘を付き、顔の前で手を組んで、ため息を付いた。

「やっぱりそうですか……」

アルベルトの返答にファリスの表情も曇る。

アルベルトは現状を再確認する為に説明を開始した。

「便宜上敵陣を近い順番から1、2と呼ぶと、ファリス殿が敵本陣を攻めるまでは、第1陣から3陣までが比較的我らの城に近く、その後ろに第4陣、そして本陣、その本陣の後ろを守る様に第5陣が有りました」

そう言う、アルベルトは地図のその元の本陣の位置を指差す。
そして地図の上を指を滑らせながら言葉を続けた。

「そしてファリス殿が本陣を攻めた後は、本陣はこの第5陣よりも後方のこの位置まで下がっております」

ファリスは、アルベルトがちらつと上目遣いで「理解できてますか?」と言った風に見たので、「うん」と返事する。

そしてアルベルトはその返事を受けるとまた説明を続ける。

「そして、現在敵は前衛の第1陣から第3陣を中心に部隊を出撃させて村々を襲っています。そしてその度にファリス殿に出陣していただいているのですが……」

ファリスは、先は言わなくても分かっているという意味を込めて「うん」と頷いた。

だがアルベルトの言葉は止まる事無く続いた。

「敵の攻撃が止まないのは勿論なのですが……。さらに問題が発生して、いや発生しつづあります。敵は村々を襲っていますが、その襲われた村の中には、2度、3度と襲われた村もあります。そしてその村の住民達がとても村には住んでいられないと、城に保護を求めて参りました」

「城に?」

アルベルトはファリスの言葉に地図から顔を上げずに短く「はい」と答える。

ファリス自身は気にしないが、それが非礼に当たるという事に

気が回らないほど、アルベルトの心配事は深刻だったのだ。

「それがどう問題なの？」

今まで地図を睨んでいたアルベルトが、目を瞑り唇を噛んだ後、フーリスからの問いに答えた。

「その様な者達がこのまま増え続ければ、城の食料がなくなります」

その頃、ムダル軍の本陣の天幕では参謀のザークが司令官のディエゴに戦況を報告していた。

村々を襲わせている前衛3陣からの報告書を手に、ザークが口を開く。

「リリエルの村民達の一部が城に逃げ込んだ様です。そしてこの人数はさらに増えていく模様。計画は順調に進んでいます。いずれリリエル城の食料は底を尽きましよう」

だが、このムダル軍に有利な報告にディエゴは喜ぶどころか、不満げにはき捨てた。

「そんな上手い手があるなら、初めからすれば良かろう。以前の作戦はなんだったのだ！」

（さーて、お勉強に時間だ）

ザークは心の中で皮肉に呟くと、ディエゴへのお勉強を開始した。

「司令官のお父上であるロンバルド様は、豊かな土地であるリリエルを我が領土に加えたい。とのお心で御座いました。土地とは毎年耕し、作物を植え、そして収穫する事により生きるのです。耕す者も無く、植えた作物を収穫せずに放置すれば、土地は干上がり、作物は腐ってその土地は死にましよう。ですので、以前はリリエル軍に損害を与えて籠城させた後に、計画的に村々を取り囲み、男は残してそのまた農地を耕させ、女子供だけ城に追いやる心算でした。そうする事により豊かなりリエルの土地を我が軍の手にする作戦だったのです。ですがあの魔物の出現でそれが叶わぬという状況になった為、仕方が無く今回のとにかく住民達を城に追いやると言う作戦になったのです。そして当然この方法では土地を耕す者が居なくなり、土地は荒れます。元の豊かな土地に戻すまでには時間が掛かりましよう。ですがそれでも領土が獲れないよりはマシです。勿論、以前言っていた追い詰められた敵兵が死に物狂いになって攻めてきては3倍の兵力でも心許ない。と言っていた事もご懸念されているのでしようが、それはあくまで城に籠城する敵をこちらが囲んでいた場合のこと。今回の作戦ならば城を囲む事無く敵を兵糧攻めにする事が出来ます。これだけ城から離れていれば、敵の必死の突撃にも十分対応できます。ちなみに以前の作戦で敵に十分な兵力がある場合にも、なぜ城を取り囲まなければならぬかという、城を取り囲んでいないと、食料が無くなった敵が城から出撃し、村々から食料を徴収してしまうからです」

ザークは一気にまくし立てると「はい。じゃあ、何かご質問は？」
とでも言うように、ディエゴの顔を覗き込んだ。

ディエゴはその視線から逃げる様にそっぽを向いて「うーん。まあ……、そう言う事なら仕方なからう」と歯切れ悪く答える。

ザークは内心（こいつ、絶対に内容を理解してないな）と思いな

がらも、黙って一礼する。

そして「まだ雑務が残っておりますので」とディエゴに告げると、再度一礼し「失礼します」とその場を後にした。

ザークは天幕を出ると、リリエルの本拠地であるリクルハルド城の方角を見つめた。

この本陣の場所からではリクルハルド城を望む事は出来ないが、ザークの心はリクルハルド城に居るであろう、あの魔物へと飛んだ。当然雑務が残っているなどというのは、まったくの嘘である。

自分達が兵糧攻めを受けていることを知ったとき、あの魔物はどう動くだろうか？

あの魔物は確かに強い。不死身と言っていいたいだろう。だがヘタレだ。

今のところ、あの魔物はザークの推測通りの行動を取っている。それは取りも直さず、あの魔物がヘタレであると言うザークの推測を裏付ける事となる。

ザークは日が暮れるまで魔物について思案を続けていたが、日が暮れるとおもむろに踵を返し、自身に宛がわれた天幕へと向かった。

15…ヘタレの庭

ティーナは城の庭にある林の少し奥まったところの木の根元に座り込んでいた。

そしてその手は膝の上に乗る金色の頭を触れるか触れないか、というギリギリのところで優しく撫でている。

その金髪に触れたい。でも、起こしてはいけない。その葛藤による両者のせめぎ合いの結果、ギリギリのところで撫でる。という中途半端な行為となっているのだ。

だがそれでも彼女は幸せだった。

ファリスとここで並んで座りながら、会話をしていると不意にファリスが自分に持たれかかってきたのだ。

（まさかファリスの方から、アプローチしてくるなんて。ヘタレなのに！）

とティーナが思ってファリスの方を見ると、すやすやと眠り込んでいたのだ。

出撃から帰ってきたファリスをティーナが「お疲れ様」と笑顔で出迎えた。

ファリスもティーナに微笑みかけたが、その足取りは危なげだった。

「大丈夫？ 疲れているみたいだけど」

ティーナが心配げにファリスの顔を覗き込む。

それに対しファリスは「うん。大丈夫だよ」とティーナに微笑んだが、その顔には隠し切れない疲れの影が見て取れる。

アルベルトの「このままでは城の食料がなくなる」という言葉から数日が経っていた。

そしてアルベルトは敵の動きをさらに厳重に警戒する様にと偵察の部隊に申し渡し、敵が村を襲う前にファリスを出撃させる作戦にでた。

この作戦が功を奏し、敵からの村への襲撃は一時収まったのだが、しばらくすると敵は前にも増して攻撃を活発化させたのだ。

時間を合わせたかのように、敵の第1陣、2陣、3陣から村々を襲うために同時に部隊が出撃する。

ファリスはその部隊の対応に追われまくり、さらに敵は時間差で別の部隊も出撃させてくる。

こうして、同時に数部隊、時には十を超える敵部隊が領内を駆け巡り村々を襲おうとするのだ。

いくらファリスが瞬間移動出来るとはいえ、敵の位置は軍の偵察からの報告が無いと捕捉出来ない以上、後手後手に回り、時には抑えきれず村が襲われてしまう事もある。

とはいえ、さすがにそれでも城からリリエルの軍勢を派遣するよりは、ファリスが瞬間移動した方が早い為、ファリスを頼るしかない。

その為連日の出撃でファリスは疲れきっていたのだ。

「立ってると疲れるわよね。少しあそこに座りましょう」

そう言ってティーナは少し道をそれたところにある、木陰へとファリスを誘ったのだ。

だが、2人で並んで座り会話をしていると早々にファリスが眠ってしまい、ティーナは肩に持たれかかってきた。

そしてティーナは、ファリスを起こさない様に、ゆっくりとその膝に乗せたのだ。

ティーナは何時間でもこのままで居たいと思ったが、時がそれを許さず、日が傾いてくると、今まで木の枝で日陰となっていた2人のところに日が当たり、その眩しさとファリスが目覚ましてしまったのだ。

「あ。ティーナごめん！」

目を覚まし、ティーナの膝の上でごろごろと頭を動かし状況を確認していたファリスが、状況を理解し慌ててティーナの膝から立ち上がろうとする。

だがティーナは、つい「ダメ！」とファリスの肩を抑えて、強引にまたファリスの頭を自分の膝の上に乗せてしまったのだ。

反射的に行ってしまった行為だったが、ティーナの顔は見る見るうちに赤くなる。いくらなんでも強引過ぎる。

だが幸いな事に、ファリスからティーナの顔は見えず、またファリスはヘタレだったので「ダメ」といわれると、「え？ ダメなの？」と素直に、その「ダメ」に従いティーナの膝の上で大人しくなった。

だが「ダメ」と言ったからには、なぜ「ダメ」なのかを説明する必要がある。

ティーナは必死で頭を巡らし、もっともらしく、それでいて彼女が心の底から思っている言葉を拾い上げた。

「あなたは疲れているのだから、ゆっくりと休まないとダメよ?」

ティーナが優しくそう言うと、ファリスも素直に「うん」と返事をし、そしてティーナの膝にさつきより少し重みが増した。

今まで身を硬くしていたファリスが、ティーナの言葉に安心して身を任せたのだ。

とはいえこの場所は、日が傾いた所為で日がさしている。ゆっくりと休むと言うにはあまり相応しいとはいえない。

その事に気付いたティーナがファリスに声をかけた。

「あ。ファリス。ここは眩しいでしょ? あそこに行きましょうね」

ティーナはそう言って、木の幹の反対側に移動して座り、ファリスに手を差し伸べた。

ファリスも素直に導かれて、ティーナの膝の上に頭を乗せた。

だが2人は、この何気ない行為が、2人にとって重大な意味を持つ事に気付いていなかった。

ファールリスがついティーナの膝の上で寝てしまったという事ではなく、自分の意志でティーナがファールリスを膝枕に誘い、ファールリスは自分の意志でティーナに膝枕をしてもらった。

この事で、2人の間でティーナがファールリスを膝枕をするという事が、特別な事では無くなったという事を。

今後、当たり前のようにティーナがファールリスに膝枕をしてあげる事になる事を。

この事で、2人の距離がまた少し縮まった事を、2人が気付く事は無かったのである。

数日後、アルベルトと副官のベムエル、それとその2人の護衛がファールリスと共に出撃する事となった。

当然2人とその護衛達は瞬間移動が出来る訳ではないので、ファールリスが出撃した後に、懸命に馬で追いかける事になる。

出撃といっても敵はファールリスが追い散らした後なので、敵と戦う訳ではない。

あまりにも敵の攻勢が激しく、村々の動揺も深刻なので現状視察を行う事にしたのである。

そして敵が出撃してきたという報告が入ると、その視察団は城を出発した。

だが、敵は複数の部隊で出撃してくる。

伝令からファールリスが敵のどの部隊の進撃を防ぎ、次にどこの村

が狙われてファリスがそこに向かったなどの報告を受けながら、軌道修正しつつ進む。

そして敵の進入を防げなかった村に到着した、とはいえ敵はすぐにファリスが追い払ったため、それほど被害が出たわけではない。ファリスはすぐに次の敵へと向かっている。

副官のベムエルが村長に状況を問いかけると、村長は力なく答えた。

「今回は被害は少なくてすみましたが、村が襲撃されるのはこれで2度目なのです。村人の者達は、みな怯えております」

ベムエルは村長に痛ましげな視線を投げかけると、次に司令官であるアルベルトへと視線を移した。

そのアルベルトが村長に口を開く。

「確かに、お前達の不安も分かるがもう暫く辛抱して貰えないか」

アルベルト自身無責任な言葉だとは自覚しているが、軽率に「では、城に避難する様に」といえる状況ではない。

出来るだけ、村で頑張って貰うしかないのだ。

村長はアルベルトの言葉を聞くと、力なくため息をつき、そしてある方向へと目を向けた。

アルベルトとベムエルが釣られて同じ方向を見ると、そこは果たして墓地だった。

この戦いで無くなった村民が埋葬されているらしい。

村長は別段2人に無言の非難をしている訳ではなく、これからの不安が無意識にそうさせたのだ。

そして2人にもその事が理解できる為、城に村民を避難させる様に言えない事を、なおの事2人を心苦しくさせる。

それゆえに、2人は状況を確認した後は、足早にこの場を立ち去ろうと考えたのだが、最後にアルベルトが村長に労いの言葉をかけた。

「村の復興をせねばならない時に、敵兵の埋葬なども大変だろうが、がんばってくれ」

そして、背を向けようとしたのだが、村長からは思いがけない言葉が投げかけられた。

「いえ、敵兵の埋葬はしておりませんが……」

2人は驚いて、村長から背を向けかけていた体を、また村長へと向けた。

「確かに村をこのようにした敵は難いだろうが、埋葬せんと遺体が腐敗し、疫病が発生しよう。今からでも遅くは無い。ちゃんと埋葬する様に」

だが村長はこのアルベルトの言葉に困惑の色を隠せない。

「そうは言われましても……敵兵を埋葬するもなにも、敵兵の遺体

など無いのです」

村長の言葉に2人は顔を見合わせた。

16…善人系のヘタレ

「追い払うだけで、敵を倒して無かっただ！」

ムダル軍に襲撃された村からの帰城の途上、アルベルトが激昂していた。

よく訓練されたアルベルト自身の馬は兎も角、後ろに続く護衛の騎士達の馬の中には、アルベルトの怒号に歩調が乱れるものもいるほどである。

副官のベムエルも困惑の色を隠せない。

「そういえば、ファリス殿から、「撃退するってどうすればよいの?」と聞かれた時に、敵を追い払えばよい。とは答えましたが…。本当に追い払っていただけとは…。」

「いくら追い払っても敵が攻めてくるのは当然ではないか! 敵に損害は無いのだからな。ファリスが来れば逃げればよい。そしてファリスが居なくなればまた攻めて来るのだ!」

アルベルトはファリスの名を、つい「殿」を付けずに呼び捨てで叫んだ。

敵を一生懸命倒してくれていると思うからこそ、敬意を持ってファリスに接していたのである。

それが実質ほとんど意味を成していなかったなど、アルベルトの怒りは収まらない。

「それで…どうします?」

「どうしますだ! 敵をぶっ倒して来いと言うに決まっておろう

が！」

普段の落ち着いた雰囲気からは考えられないほどの怒号である。

「とはいえ、ファリス殿が戦っているのはティーナお嬢様からの要請があるからです。我々がそう頭ごなしに怒鳴るわけには……」

アルベルトの様にファリスに対して必要以上の敬意を持って接して居ない、逆に言えば壁を作らずファリスと接していたベムエルは、ファリスの事を「頼りなげだが素直な男の子」と思い、好意を持っていたのである。

その為、ついファリスを擁護してしまったのだった。

アルベルトもそう言われると、さすがに冷静にならざるを得ない。だが、このままで良い訳では無いのも、また事実である。

大きく息を吐き、気を落ち着かせると、普段通りの落ち着いた口調で口を開いた。

「では、どの様にすれば良いというのか？」

とは言うもののベムエルにも良い考えなどある訳ではない。

だが、かばってしまった以上は、何か言わなくてはならないだろう。

それはダメだが、どうしたら良いかは自分も分からない。では無責任と言うものだ。

しかし、いくら考えても良い案が浮かばない。だが代案なら浮かんだ。

「どうでしょう、ボルジ殿に相談してみては？　ヘタレについて詳しい様ですし」

「ボルジ殿か……なるほどな」

ベムエルの言葉にアルベルトも頷き、こうして今や、ヘタレ心理学の第一人者と目されているボルジに相談する事になったのである。

アルベルトは城に到着すると馬番に馬を預け、さらに従者を呼びつけた。

「ボルジ殿に、司令部にある私の執務室まで来る様に伝えてくれ」

アルベルトはボルジに対して、年長者として敬語で対応してはいるが、実際身分の上では、アルベルトは現在副司令官のクラウス家と共に代々軍部の最高責任者を務める家柄だ。

文官の末席に名を連ねるだけのボルジとは身分が違う。

アルベルトの方からボルジを訪ねるなど、よほどの事がない限り有り得ないのである。

従者は「は！　かしこまりました！」と足早にその場を後にした。

アルベルトがその執務室に着き、軍部の司令官の物に相応しい重厚で頑丈そうな机に備え付けられた椅子に座り、ボルジにファースの事をどう相談しようかと暫く考えていると、果たしてそのボルジがベムエルに案内されて執務室にやってきた。

そして「よくお越し頂いた」とアルベルトが椅子に座ったままボルジを向かえ、ボルジはアルベルトと机を挟んだ前に立ち「いいい

え。それで、何か御用でしょうか？」とアルベルトに問いかける。
そしてその間に、ベムエルはアルベルトの背後に進みその後ろに立つ。

座っているのはアルベルトだけだ。

それがこの３者の身分関係を表していた。

アルベルトがファリスを迎える時に椅子から立ち上がり、そしてファリスが椅子に座ってから自分も椅子に座っていたのは、ファリス自身はあまり気を止めていなかったが、アルベルトにしてみれば最上級に敬意を表して居たのだ。

アルベルトがそれほどの敬意を表す相手となれば、文官の最高責任者で年長でもあるウルマスか、さも無ければ領主の娘であるティーナが執務室を訪ねて来た時ぐらいである。

ちなみに、領主であるクリストフが執務室を訪ねるということは、そもそもが有り得ない話である。

どんなに火急の用事でも、アルベルトがクリストフを訪ねるのだ。

そしてそれほどファリスに敬意を払っていたにも関わらず、ファリスのヘタレぶりにアルベルトの失望は大きかった。

「実は、ファリス殿が敵を追い払ってくれていたのは良いのだが……本当に追い払っているだけで、敵を一人も倒してなかったようなのだ」

「確かに、ありえない話ではありません……」

「ボルジ殿からの見てもそうなのか？」

アルベルトの問いかけにボルジは顎に手をやり、少し考えるそぶりを見せてから口を開いた。

アルベルトに説明する為の上手い言葉を搜している様だった。

「そうですね……ヘタレと一言で申しても色々種類があります。ファールリスのヘタレを名付けるならば、「善人系のヘタレ」……そう申せましょう」

「善人系ヘタレだと？」

「はい。どうしても悪事や人に対して酷い事ができない。例えば、お金が無くて凍え死にしような時に、何時も自分を苛めている人が財布を落としてもその財布をその人に届け、そして自分は教会で凍死する少年の様なものなのです」

「そうか……」

ボルジの妙に具体的な例えに、アルベルトは考え込んだ。

善人系ヘタレ、と言えば聞こえは良い……いやヘタレはヘタレなので、良くは無いか。

だがそんな事より今は、敵を攻撃しないという事が重要なのだ。是が非にでもファールリスに戦わせなくては成らない。

「やはり、ファールリス殿に逃げる敵を追いかけて攻撃する様に。と頼むのは難しいか？」

「はい。逃げる敵になど……とてもではありませんが、出来ますまい」

「そうか……」

アルベルトそう短く呟いたが、ある事を思い出した。

「そう言えば、以前ヘタレは高圧的に命じればという事を聞くと申し
ていたではないか。高圧的に敵を攻撃する様にとは頼めないのか？」

「はい。確かにそう申しました。しかしこうも申しました「無理難
題で無い限り」と。ファールリスには出来ない事でしょう」

「それでは全然役にたたんではないか！ では、ファールリス殿はど
の様な時に戦えるというのか！」

「おそらく、ファールリス自身か他の誰かが攻撃されていれば、その
時は攻撃するでしょう。それ以外で敵を攻撃するのは難しいかと……
…」

「だったらだ。敵兵達に村民達は害されておるのだぞ！ 攻撃して
もよさそうなものではないか！」

ボルジは、「確かに」と答え一礼した後、再度口を開く。

「ですが、今までファールリスが敵を攻撃していないという事は、お
そらく敵はファールリスを見た瞬間、村人への攻撃を中止し逃げ出す
のでしょうか。村人を攻撃するその瞬間を目撃していない事には……」

「うぬ……」

アルベルトは歯を食いしばる様に言葉を漏らすと、机の上に肘を
突いて頭を抱え込んだ。

どうすれば良いのか。

では、結局ファリスは役に立たず、やはり、自分達で戦うしかないのか……。

そう考えると、不意にアルベルトの顔に自嘲気味な笑みが浮かんだ。

そうか。

元々自分達の戦いだっただけか。

ファリス殿にだけ戦わせて解決しようとしてたのが間違いだったのかもしれない。

自分達も戦わなくてはな……

ん？ 待てよ。自分達も戦う？

アルベルトは抱えていた頭を上げた。

その顔は何か晴ればれとし、そして自信に溢れていた。

「ベムエル。ファリス殿を呼んで来てくれ。作戦を思いついた」

16：善人系のヘタレ（後書き）

ボルジが例えに出している「教会で凍死する少年」とは勿論、フランシスの〇の〇ロです。

17…知りすぎたヘタレ

その頃ファリスとティーナは、庭の奥の木陰にいた。

勿論、ティーナがファリスを膝枕しているのだ。

そして2人は他愛もない会話を楽しんでいた。

ティーナが自分の膝に寝転がるファリスの肩に左手を置いて語りかける。

「ファリスって金髪なのに目は黒いけど、ファリスの居た世界では珍しくないの？」

「え？ どうして？ こっちの世界では珍しい？」

「珍しいわよ。私は聞いた事も見たことも無いもの」

「へー。そうなんだ？」

ファリスの頭がさらに動き、ファリスはティーナの膝の上で仰向けに寝転がった。

その為、ファリスの肩に手を置いていたティーナの左手が肩から外れてしまったが、今度は右手をファリスの頭に添える。

そしてファリスの金髪をもてあそびながら再度問いかける。

「ええ。そうよ。ファリスの世界ではどう？」

「多くは無いけど、珍しいというほどじゃないかな？ こっちの世界で金髪碧眼の人を見るのと同じくらいと思うよ」

「そうなの」

ティーナはそう言いながらも、ファリスの金髪を自分の右手の人差し指に巻きつけて遊んでいる。

そしてファリスに微笑みかけ、ファリスもティーナに微笑みかけた。

まことに良い雰囲気だが、そこに別の人間の声が割って入った。

「ファリス殿ー。いないかー？」

とファリスを探す声が聞こえる。

誰かと言えば、勿論アルベルトに言われてファリスを呼びに来たベムエルである。

ファリスはその声に反応して、ティーナの膝から上体を起こしベムエルに向かって「ここだよー」と返事を仕掛けたが、ティーナが「ダメ」と小さく言うのと、ファリスの体を抑えてまた自分の膝の上において、さらにファリスの頭を抱える様にして、自分も座りながら身を縮こませた。

そしてファリスが例によって「あ。ダメなんだ？」と素直にそれに従っていると、ティーナはファリスを探し続けるベムエルの声が聞こえ無くなるまでじつとし、その声が聞こえなくなってからやっと上体を起こした。

「ベムエルさんに見つかったらダメだったの？」

ファリスがティーナの膝に頭を乗せたまま問いかけると、ティーナが笑いながら答えた。

「だって、領主の娘が男の子とこんなところで2人きりで居たなんて、みんなに知れたらお嫁に行けなくなるわ」

そしてまた笑った。

だが笑い終えて、ファリスの顔を見ると、その表情は目を見開いて驚いていた。

「どうしたの？」

ティーナがそう聞くと、ファリスはと言えば分からず口ごもった。

そしてティーナの膝に仰向けに寝ていたのだが、顔を見られない様に寝返りをうち、横向きになる。

「ファリス？」

ティーナには何がなにやら分からない。

そしていつもの様に、ファリスの金髪を指に絡めて遊ぼうと、ファリスの頭に手を置いた瞬間。

「ベムエルさんが呼んでるみたいだから、僕行かなくちゃ！」

と言いながら飛び上がる様に起き上がり、挨拶もそこそこに駆け出してしまったのだ。

その後に残されたティーナは「変なの」と小さく呟くと、大きく

ため息をついて木に持たれなかったのだった。

ベムエルが呼んでいるからと言って、ティーナの元から駆け出したファリスだったが、自分でもどこを走っているか分かっていなかった。

心はまったく別の事に囚われていたのだ。

（ティーナ。2人で居る所を見られたらお嫁に行けなくなるってどういう事なの？）

改めて考えれば、ティーナがファリスに抱きついて来たりする時もすべて他に人がいない2人きりだけの時だった。

ファリスも自分とティーナが良い雰囲気という自覚は確かにあった。

しかしそれでも交際というには、程遠いと思っていたのだ。

だがファリスが住んでいた世界と、この世界では考え方が大きく違う。

ティーナはこの世界では他の人に見つかれば、他の人と結婚出来なくなるほどの事分かっていて、自分を抱きしめたり、自分に膝枕をしたりしていたのだろうか？

そう思うと、ティーナの顔を見る事が出来ず、そしてじっとしても居られなかったのだ。

とはいえ、いつも遠くに移動する時は瞬間移動の魔法で移動している貧弱なファリスに、ずっと走り続ける事など出来ない。

しばらくすると、立ち止まり大きく息を乱して傍にあった木に手を着いて上体を持たれかけさせた。

あの、綺麗で優しいティーナが自分の事を好きなのかも知れない。ヘタレのファリスにとっては、頭がパンクしそうなほどの衝撃だった。

（明日からどうやってティーナと顔を合わせたらいんだろう……）

まさか僕の事好きなの？ とは聞ける訳が無い。そう思うと、頭を抱え込んでしまうヘタレだった。

「お。こんなところに居たのか」

不意に声を掛けてきたのは、勿論ベムエルである。

「ベムエルさん……」

「ん？ どうしたんだい？ やっぱり連日の出撃で疲れてるのかい？」

「え？ あ。はい」

ファリスはそう答えると、気に持たれかけていた上体を起こしベムエルに向き合う。

実際ベムエルにそう思われている方が都合がいい。

ここで「どうしたんだい？」とでも聞かれ様なら、どう言ったら良いかまったく分からないのだ。

「そうか。疲れているところ申し訳ないんだけど、アルベルト様が君を呼んでいるんだ。悪いが着てくれるかな？」

「あ。はい。わかりました」

そして2人でアルベルトの執務室へと向かった。

アルベルトの執務室に着いて室内に入ると、アルベルトがいつもの通り立ち上がってファリスを出迎え、座る様に進め、ファリスが座ってから自分も座った。

その様子を確認したベムエルは微かに微笑むと、アルベルトの後ろに直立不動で立つ。

「一応お聞きしますが、ファリス殿は逃げる敵に攻撃出来ますか？」

それが出来るならば、何も問題ない。アルベルトは念の為に聞いてみたのだ。

だがそのファリスの答えは、聞くまでも無い事だった。

「あ、すみません。逃げる人を撃つのはちょっと……」

アルベルトは小さくため息を着いたが、次の瞬間には自嘲気味な笑みを浮かべた。

「いや、気にしないで下さい。私達はファリス殿に頼り過ぎていた様です。とはいえ、じゃあこれからは私達だけで戦う、とも言っては出来ないのも事実なのです」

ファリスは「はい」と答えるのもどうかと思い、曖昧に「はあ」と返事する。

アルベルトはそのファリスの返事に笑みを浮かべると話を続け

る。

「なので、今後はファリス殿と我々が共に戦おうと思います」

「一緒に？」

「ええ。軍勢とは指揮官の元統率されてこそ力を発揮します。ですがファリス殿が魔法で敵を追い散らしたのなら、敵の指揮系統は壊滅していると考えられます。敵兵は、追い散らされたなら自らの陣地に逃げる様に前もって言い渡されているのが精々でしょう。その時に我々が敵に攻撃すれば勝利は間違いありません」

そして言い終わるとアルベルトは、ファリスに向かって力強く笑った。

ファリスも釣られて笑う。

「それではみなさんのお役に立てるのなら」

アルベルトはその言葉に改めて笑いながら大きく頷いた。

そして「それでは、お疲れのところ、わざわざお呼びして申し訳ありませんでした」と自らが率先して立ち上がり、ファリスにも立ち上がる様に促す。

ファリスも素直にその進めに従って立ち上がる。

そして「失礼します」と、扉へと向かった。

するとベムエルがずっと前に出て扉に先回りをする。

ファリスがベムエルが開けてくれた扉を潜ろうとすると、その背中にアルベルトが声を掛けた。

「明日はがんばりましょう！」

「はい！」

執務室を出たファリスは、アルベルトの力強い言葉に元氣付けられ、瞬間移動の魔法を使わずに足取りも確かに、自分の部屋へと向かって歩き出した。

だがそのファリスを呼び止める声が聞こえた。

「やっぱり、ここに居たのね！」

振り返ると、果たしてティーナがにこやかに立っている。

「ベムエルが呼んでいたってなんだったの？ やっぱりアルベルトの用事？」

ティーナは、にこやかに微笑みながらファリスに近寄ってくる。

「あ。うん。そうだよ！」

ファリスの声がつい不自然に大きくなる。

そして自分の顔が熱を帯びるのが感じられ、鏡など見なくても自分の顔が真っ赤になっているのが分かった。

「どうしたの？ 顔がものすごく赤いけど」

「そっそうかな？」

「ええ。とても赤いわ。熱があるのかしら？」

ファールリスはティーナのその言葉に、ティーナが以前同じ様台詞を言い、額を自分の額にくっ付けて来たのを思い出し、さらに顔を赤くする。

そしてティーナがさらに近寄ってくると、また以前と同じ様に額をくっ付けてくるのかと身構えた。

だがその予想はずれ、ティーナは自分の額に右手をやり、ファールリスの額には左手を添えた。

「うーん。熱いわね。やっぱり熱があるんじゃないの？」

「大丈夫だよ！」

ファールリスはそう叫ぶと、その場から駆けて行ってしまったのである。

（どうしたのかしら？）

いきなりファールリスに嫌われたとはさすがに思えない。

しかし明らかにファールリスの様子はおかしい。

その場には困惑した顔のティーナが1人残された。

そしてファールリスも駆けながら、さらに頭が混乱していた。

ファールリスは、ティーナが誰か他の人が見ているか分からないところと、2人きりの時とでは明らかに違う行動を取る事に気付いてしまったのだ。

17：知りすぎたヘタレ（後書き）

金髪碧眼になるのは共にメラニン色素についての遺伝なので、黒目で金髪は有り得ない。

と指摘を受けたので（黒髪で碧眼はあるらしい）あのような会話になりました。

18…ヘタレの増長？

翌日、アルベルトの作戦の日である。

だがこの大事な日にも関わらずファアリスは寝不足だった。というより、寝ていなかった。

勿論ずっとティーナの事を考えていたのである。

ティーナとは良い雰囲気だとは思っていた。

だがティーナは貴族の領主の娘であり、この土地の者にとってはお姫様と変わらない。

実質的に小国のお姫様なのだ。

ファアリスにとってはおとぎ話の登場人物の様であり、仲良くは成りたいと思っても高嶺の花だと考えていたのである。

だがその高嶺の花が、ひょこひょこ自分で高嶺から降りてきて、しかもファアリスに向かって手を上げ「こんにちは」と挨拶しているのだ。

ファアリスが混乱するのも無理は無い。

そして今もボーとティーナの事を考えていたが、アルベルトの「では、準備は良いですか？」という言葉に我に返った。

「あ。はい。大丈夫です」

アルベルトはファアリスの返事に頷くと、改めて作戦の説明を開始した。

「まずファアリス殿にはいつも通り、敵を迎え撃って頂きます。我

々は後から追いかけて、ファリス殿が追い散らした敵に遭遇すればこれを討ち果たします。もしファリス殿と遭遇しておらず秩序だった敵部隊と我々が遭遇した場合は、狼煙を上げますので、ファリス殿は注意して置いてください。そして狼煙の合図でこちらに来てもらい我々に加勢して頂ければ、敵を打ち破るのは訳ありません」

アルベルトの説明をファリスは必死で頭に叩き込んだ。

とはいえ、実際ファリスのやる事は今まで通りに戦い、狼煙が上があればそこに向かうというだけなので、そう難しい話ではない。

そして作戦が実行された。

いつも通りファリスは伝令からもたらされる敵軍の位置へと瞬間移動で向かい敵を追い払う。

だが、敵に向かいいつも通りファイヤーボルトを放つと、とうとうより、敵はファリスの姿を視界に捉えた瞬間逃げ散ってしまう。

そしてアルベルトは、その後を追う様に軍勢を率いて進撃を開始した。

こうして自身が所属する部隊ともはぐれとにかく自陣へと向かっていた敵は、アルベルトの率いる統率の取れた軍勢に見つかり慌ててさらに逃げようとするが、騎兵に追いつがられて討ち取られていったのである。

そして秩序だった敵と遭遇すればすぐさま狼煙を上げる。

狼煙の合図でやって来たファリスが、馬に乗っている士官らしき者を重点的に追い払い、敵の指揮系統を壊滅させた後、アルベルトが突撃を行うのだ。

この様にして、この日のアルベルトの作戦は大成功を収め、味方の被害は6名のみ。敵の損害はその数十倍にも及んだのだった。

この様な戦いを続けられるなら、ムダル軍を追い払えるのも時間の問題である。

戦いの報告を伝令により城内で知ったティーナは喜んだ。

（ファリスも大活躍だったみたいね！）

大好きな男の子が活躍したのだ。

ティーナの顔も自然と笑みがこぼれた。

ファリスが帰ってきたら、また膝枕をしてあげよう。

それとも抱き付けば、今度こそファリスも抱きしめ返してくれるだろうか？

ティーナはファリスの帰りを今か今かと待った。

だが不意に昨日のファリスの様子を思い出した。

昨日は、明らかに自分を避けている様に感じられた。

どうしてだろう？

嫌われているわけではない。

それは分かる。

ついちよっと前まで、庭で仲良く膝枕をしてあげていた。

だがその後急に、ファリスの様子がよそよそしくなったのだ。

何かあったかと言えば、ベムエルが来たのでファリスに隠れる

様に言っただけである。

そして、ティーナにはまさにその事で自分のファリスに対する恋心がファリスにばれてしまったという事に気付かないのだった。

（まあ、とにかくファリスの帰りを待ちましよう。何か話してくれるかも知れないし）

ティーナはファリスの帰りを、落ち着き無く城中を歩き回りながら待った。

すると城中のそこかしこでファリスの噂話をしているのを耳にした。

その内容とは「あの男の子のおかげで戦いに勝てそうだ」とか「見かけによらず強いんだな」と言った好意的なものが多く、ティーナもうんうんと頷いた。

だが中にはティーナには、聞き捨てなら無い話をしている侍女達も居たのである。

なんとその者達は、よりにもよって「あの男の子、結構可愛いわよね」とか「初心そうだから、ちょっと誘惑すれば落せそう」などと言っているのだ。

ティーナはその者達の顔を覚えようと、物陰からじっくりと観察した。

（あの者達は、ファリスに近づけさせないようにしないと行けないわね）

そう決意してさらに城中を歩き回ると、さらにティーナには馬鹿馬鹿しい話だが、次の様な話をしている者達もいた。

「気の弱そうな男の子だったが、これだけ活躍すればいい気になって増長するだろう。自分の御蔭で勝てたのだと、偉そうな態度になるのではないか」

ティーナはこの話を聞いて思わず吹き出してしまった。
ファールリスに限りてあり得ない話である。

そして遂にそのファールリスが帰ってきた。

ファールリスが城内に入ると、今回は出撃しなかった将兵や文官の重臣などの多くの人々が出迎え、口々にファールリスの功績と、今回の戦いの戦果を褒め称える。

その為、折角ファールリスの帰りを、今か今かと待ちわびていたティーナが近寄る事も出来ない。

そして、ファールリスを揉みくちやにしている人々は、ファールリスの体を押す様にして、城内に入りどんどんファールリスを連れ去っていつてしまったのだ。

結局、ティーナはファールリスを、見送るしかなかったのである。

だが、ティーナは気付かなかったが、何度も繰り返し皆に褒め称えられるファールリスのその顔はどこか虚ろで、足取りも危なげだったのだった。

そしてそのまま夜になり夕食も食べ終わったであろう時間に、ティーナは再度ファールリスの部屋を訪ねることにした。

深夜となればかなり問題だが、この時間ならばまだ部屋に訪問しても問題ないだろう。

だが、ティーナがファリスの部屋のある建物に入ると、いつもファリスの夕食を届けている侍女が困惑気味に、ティーナに話しかけてきた。

「実は、ファリス様が夕食にまったく手を付けていないのです」

「ファリスが？」

「はい。まったく……」

ファリスは食べ盛りの男の子だ。普段なら食べないどころか食べ残す事すら有り得ない。

「そう……分かったわ。ちょっと様子を見てくるわね」

そうして、ファリスの部屋の前まできて扉をノックする。

だが返事が無い。

もう一度ノックするが、やはり返事はない。

ティーナが「居ないの？」と言いながら扉を開けると部屋は明らかに点けていなかった。

だが、月の微かな光でおぼろげながらファリスがベッドの上に座っているのが見て取れた。

「居るんじゃない。どうしたの？」

そしてランプに火を点けようとした時、ティーナには信じられない言葉が聞こえた。

「ねえ。僕ってえらいの？」

その頃ムダル本陣では、ザークが報告書を片手に今日の戦いの損害をディエゴに報告していた。

「ふ。どうした？ いつも偉そうにしている割には不甲斐ないではないか？」

普段、ザークから馬鹿にされていると感じていたディエゴは、こぞとばかりにザークに対して嘲笑を浴びせているのだ。

ザークはディエゴなど相手にしても仕方がないと、あえて逆らわず俯きかげんに神妙に答えた。

「大変申し訳ありません。今後はこの様な事の無きよう勤めます」

だが、ディエゴにはそれがまた面白くないらしく、ザークを挑発する。

「どうだ？ リリエル攻略を諦めて帰るか？ ん？」

ザークは先ほどと、まったく姿勢も口調も変えずにまた神妙に答える。

「いえそればかりは。私はリリエル攻略の大任を仰せつかって参りました。それを途中で投げ出す訳には参りません」

だがこの一見神妙に答えていると思われる言葉の裏の「リリエル攻略を任されたのは自分であり、司令官であるお前など飾りでしかない」という皮肉にディエゴが気付く事は無い。

そもそも司令官たる物が、自軍の損害を喜び、皮肉を言う為だけ

に撤退を口にするなど、正気の沙汰とも思えない話なのである。

ディエゴもザークの反応に、いたぶり甲斐が無いと感じたのか、手を振って立ち去るように促した。

「反省しておるなら、とっとと被害を受けた部隊の再編を急がんか。口ほどにも無い」

そしてザークはも、これ幸いと「は。かしこまりました」と素直にディエゴの天幕を後にしたのだった。

だがザークがまっすぐに自身の天幕へと向かった。

ディエゴに言われるまでも無く、部隊の再編が必要な事など分かっており、そしてそんな事はとつくに終わっているのである。

そして、自分の天幕に入ると、報告書を机の上に投げ捨てた。

ザークはやり場の無い苛立ちを持て余していた。

今日の事は、確かに油断と言えば油断だろう。

だが、まさか敵が「今さら」こちらの作戦に気付くとは！

ザークの想定では、気付くなら気付くでとつくの昔に気付いているはずと考えていたのだ。

そして想定の時期になっても敵が気付いていなさそうだったので、ならばもはや敵が気付く事など無いと警戒を解いた挙句に、この有様とは！

「敵が無能だと、よけいにやり難いわ！」

ザークは、机に備えられた椅子を怒りに任せ蹴り潰した。

19：可愛いヘタレ

「ねえ。僕えらいの？」

ティーナが困惑して答えられずにいると、ファリスが再度問いかけてきた。

明かりの点いていない部屋は、ファリスの表情を隠し、それがなおの事ファリスがどの様な意図で言葉を発しているかを曇らせる。

ティーナは仕方が無く、困惑しながらも何とか言葉を探った。

「えらいって言うか……すごいと思うけど？」

しかしそのファリスはティーナの声が聞こえているのか聞こえていないのか、さらに言葉を続ける。

「今日の戦いどうなったか知ってる？」

「ええ。ええ。知っているわ」

「どうなったの？」

「えーと。味方の損害は少しで、敵に大損害を与えたって……」

「味方の損害って？」

「確か6名だったと思うけど？」

「その6人の人はどうして亡くなっちゃったの？」

「どうしてって……」

ファールリスの意味が分からずティーナは戸惑う。

「僕が敵を攻撃するのを嫌がったから……、アルベルトさん達も戦う事になったから、だから死んじゃったんだよね？」

「ファールリス……」

「僕が戦うのを嫌って理由で、6人も……。ねえ、僕ってそんなにえらいの？　僕が嫌っていう方が、その人達より大事なの？」

まだ明かりの点いていない部屋に目は慣れてはいなかったが、ティーナにはもうファールリスが今どういう表情で居るのが、はっきりと分かった。

ファールリスは泣いているのだ。

ティーナはゆっくりとファールリスに近づくと、ファールリスをその胸に抱きしめた。

この世界でもそう頻繁に戦いがある訳ではないが、珍しいという訳でもない。

勿論身内が亡くなれば悲しいが、敵と戦い味方の損害が少なく、敵に大損害を与えたともなれば、それは喜ばしい大勝利なのだ。

それは、決して冷酷ではないティーナにしてからそうだった。

だが、戦いの知らないファールリスにとっては、それは損害ではなく、人が死んだという事であり、しかもそれが自分がちゃんと戦えていたら防げていたというのならなおさらだった。

ティーナはファリスをさらに強く抱きしめた。

「ごめんね……」

本当はファリスには関係の無い戦いなのだ。

ファリスが戦っているのは自分に関わったから、自分が戦う様に頼んだからなのだ。

ティーナはファリスに言いたかった。

この戦いは元々ファリスには関係が無いのだ。

自分達だけで戦っていてはとっくの昔に負けていて、よほど多くの犠牲が出ていたはずなのだ。

だからファリスは十分やってくれているのだ。

ファリスが気に病むことは無いのだ。

そう言いたかった。

でも、どうして自分が戦えと言っておきながら、今度は、あなたは戦う必要は無かったのだから気にするな、などと言えるのだろうか？

だからティーナはこの言葉を繰り返した。

「ごめんね……ごめんね……」

そして力の限りファリスを強く抱きしめた。

ファリスはティーナに抱きしめられながら、自分の頭に何かが当たるのを感じた。

はじめは何か分からなかったが、それは次第に数を増やし、遂には線となってファリスの額から流れ落ちたとき、ファリスはそれがティーナの涙なのだと気付いた。

ファリスの顔を伝うティーナの涙は、ファリスの頬で、ファリスの涙と交じり合って共に流れ落ちた。

ファリスはティーナに抱きしめられたまま、ティーナに問いかけた。

「泣いてるの？」

「ええ。泣いてるわ」

「どうして？」

「あなたが泣いているのだから」

ファリスが起き上がろうと体を動かすと、それまでファリスを強く抱きしめていたティーナの腕から力が抜け、ファリスはティーナと向かい合って座りなおした。

「どうして僕が泣いていると泣くの？」

「あなたの悲しそうな姿を見ると、私も悲しいわ」

ファリスはティーナを見つめた。

すでに目は暗闇に慣れ月明かりでもはっきりとその姿を見る事が出来た。

ファリスの前に座るティーナの瞳からは涙が溢れている。

いつも自分に微笑みかけてくれるティーナの悲しみの姿に、ファリスの胸は痛み、そしてその痛みはファリスの苦しみをも覆い尽くした。

これほど自分の事を想ってくれる人が居るなんて、今まで考えた事も無かったのだ。

そしてファリスは、その人を泣かしては行けないのだと強く思った。

でも、そのティーナはファリスが悲しそうにしていると、自分も悲しいと言う。

だからファリスはティーナに向かって、がんばって何とか微笑んで見せた。

「ティーナ。僕は大丈夫だからね？　泣き止んで？」

すると、ファリスの言葉に、ティーナも小さく微笑む。

ファリスはティーナを見つめ、ティーナはファリスを見つめていた。

2人はベッドの上に座ったまま、しばらく見詰め合っていたが、不意にティーナが目を瞑った。

残されたファリスは暫く戸惑っていたが、意を決して、おもむろに……口を開いた。

「キスしていいの？」

ティーナは思わず噴出した。

そして、毛布を頭から被りベッドの上で体を丸めて寝転がり、必死に笑いに耐えている。

だが笑いを抑えきれずに、その肩は激しく上下にゆれ、ごろごろと左右に寝返りをうった。

「え？ ティーナ大丈夫？」

ファリスは慌てて、ティーナの体を押さえ様とするが、激しく体を波打たせながら笑うティーナを押さえる事が出来ない。

結局ティーナが自然と笑い終わるまで待つ事になったのである。

ティーナの体が波打つのが止まると、ティーナは被っていた毛布を取り、改めてファリスと向かい合う。

ティーナは肩で息をし、顔にはまだ涙の後が残っていたが、その表情は優しくファリスを見つめながら笑っていた。

「ええ。キスしていいわよ」

そして目を瞑り「ん」っと顔を前に突き出す。

ファリスは、ゆっくりとティーナの顔に自分の顔を近づけると、小さく啄ばむ様にティーナにキスをした。

そして、ティーナが瞑っていた目を開くと、その目前には、顔を真っ赤にしているファリスの顔があった。

そして今度はティーナの方からファリスにキスをした。

それは、ファリスがティーナにしたキスよりも遥かに強いキスだった。

そしてファリスの顔を両手で挟むと、その顔中にキスをする。

「ちよっちよっど。ティーナやめてよ」
ファリスが慌てて逃げる。

だがティーナはそれを許さない。
「ダメよ。逃げないで」

そして、それでも逃げようとするファリスを追いかけ、ベッドに押し倒してもまだキスの雨を降らせた。

（まったく。なんて可愛いのかしら。このヘタレは！）

20：ついにヘタレと

前回の戦いから数日が過ぎていた。

その間にムダル軍からの新たな攻撃は行われず、ファリスもティーナも平和な毎日を送っていた。

あの晩のその後は、勿論ティーナは自分の部屋に戻った。

ティーナがファリスの部屋に行った事は、その前に会った侍女も知っている為、もしティーナが自分の部屋に戻らなかったら大問題である。

そして2人は相変わらず、いつもの様に庭の奥の木陰でティーナがファリスを膝枕していたのだった。

「ムダルの軍勢ってもう攻めてこないの？」

そう言いながらティーナはファリスの金髪を玩んでいる。

「うーん。アルベルトさんは様子を見ようって言ってたけど、ベムエルさんはあれだけ一方的に負けては、敵も諦めたのかも知れないって」

「そうね。そうだと良いのだけどね」

そしてファリスの金髪を指に巻きつけた。

ファリスが前の戦いで、自分の所為で6名の兵士が亡くなったと気に病んでいる件については、あの後アルベルトに相談した。

するとアルベルトは、自分の所為で兵士が亡くなったのだというファリスの言葉に、心底意外そうな表情をしたのだった。

「それは話が逆です。我々が本来自分達で解決すべき問題なのを、ファリス殿に手伝って頂いているのです。決してファリス殿の所為で、我々が被害をこうむっている訳ではありません。そう思っているらっしゃるなら、まったくの見当違いと言うものです」

アルベルトの断言する言葉に、ファリスの気もかなり楽になったが、それでもやはり戦いは無い方が良いに決まっている。

そして今2人は、ゆったりとした時間を過ごしていたが、そこへベムエルの声が聞こえた。

「ファリス殿！ 敵襲です！」

ファリスは驚いて飛び上がりかけたが、ティーナがそれを押さえ、ベムエルに聞こえない様に小さい声でファリスに叫ぶ。

「だからダメなの！」

「あ。そうか」

とファリスも小さい声で答えた。

ティーナの言う「ダメ」とは、勿論、領主の娘が隠れて男の子と2人きりで会っていると、ばれては行けない事についてである。

そしてベムエルの声が聞こえなくなると、ファリスは立ち上がり、急いでベムエルの後を追おうとする。

だが座ったままのティーナが、その立ち去ろうとするファリスの服の裾を引っ張った。

ファリスが振り向いて「え？ なに？」と問いかける。

すると、ティーナが「ん」と顔を突き出す。

ティーナの意図を察したファリスは、ティーナの前に跪き、そしてティーナにキスをした。

そしてファリスは顔を真っ赤にしながらティーナに「じゃあ、行って来るね」と声をかけ、走り去っていった。

ティーナはファリスの後ろ姿を笑顔で見送り、感慨深げに呟いた。

「やっと、ここまでこれたのね……」

「ベムエルさーん！」

ベムエルの後を追いかけたファリスが、ベムエルを呼び止め、その声にベムエルが振り向く。

「おお。ファリス殿。ここに居たか。ムダル軍が侵攻してきた。奴らまだ諦めてなかったらしい」

「早く諦めてくれたら良いのに……」

ベムエルは、ファリスが前回の戦いで、僅かとはいえ損害が出た事を自分の所為と考えて気に病んでいた事を知っている為、ファリスを元気付けようと励ました。

「なに。今回の戦いでも圧勝すれば、敵はもう諦めるさ」

「そうだよね」

ベムエルの励ましに、ファアリスの表情も幾分は明るくなる。

そして、2人は司令部へと向かうと、そこにはアルベルトが待ち構えていた。

「ファアリス殿。ご足労、ありがとうございます。敵がまた出陣してきたようです」

「はい。聞きました。作戦は前回と同じで良いの？」

「いえ。実は敵は前回までのように数部隊を出撃させては来ず、かなりの兵力の一部隊だけを出撃させて来ている様なのです」

「それって。どういう意味なの？」

ファアリスが首を傾げて問いかけると、アルベルトは少し考えてからその問いに答えた。

「もしかしたら、前回までの様な戦い方はもうこちらには効かないと諦め、決戦を挑んできているのかも知れません」

「決戦？」

「はい。そうです。ですがこちらにはファアリス殿が居ます。ファアリス殿の魔法で、敵の指揮系統を破壊していただければ、勝利は間違い有りません」

アルベルトはそう言くと、力強く笑った。
前回の快勝でかなり自信をつけた様だ。

こうしてムダル軍を迎撃する為に、ファリスとアルベルトは出陣した。

そして、ファリスがその敵軍の近くに瞬間移動で現れると、その軍勢が騎兵のみで構成されているのに気付いた。

ファリスにはそれがどういう意味なのかまでは分からなかったが、とにかく、いつも通り指揮官らしき人を狙おうかと思ったその時、ファリスは困惑した。

（いつもは馬に乗っている人が仕官と思って攻撃していたけど、全員馬に乗ってるんじゃないや誰が仕官なのか分からないよ）

ファリスは仕方なしに、片っ端から威嚇すべくファイヤーボールを連射したが、敵はやはりファリスを視界に納めた瞬間逃げ出してしまったのである。

しかも全員が騎兵の為、その逃げるスピードはすさまじく、騎士達の乗る馬の足元に対してファイヤーボールを撃ったつもりが、地面に着弾する頃には騎士達は数メートルも先に進んでしまっている有様だ。

だが、ファリスが「まあ、一応は追い払ったのでもう良いかな？」と思い追いかけるのを止めると、なんとその敵軍は引き返してくるのだ。

そしてファリスが追いかけると、やっぱり逃げる。

ファリスが手間取っていると、アルベルトが率いる部隊が追いついて来た。

一旦アルベルトの傍に戻るべく、ファリスは瞬間移動の魔法で飛んだ。

「ごめんなさい。敵が逃げたかと思ったたらまた戻って来て、追い払えないんだ」

「逃げたかと思ったら、また戻ってくるですと？」

ファリスの言葉にそう言いながら、騎乗のアルベルトは少し険しい表情となる。

「うん。それがずっと続いてて」

「うーん。敵は決戦を挑むつもりだが、それには我々リリエル軍が居なくては意味がないと考え、我々の出現を待っていたのかも知れないですね」

「あ。そうかも知れないですね。じゃあ、僕はまた敵軍に突っ込めば良いの？」

「はい。お願いします」

アルベルトはファリスにそう答えると、振り返って背後に控える軍勢にも進軍の合図を送った。

こうして敵軍へと向かったファリスとリリエル軍であったが、やっぱり敵は逃げてしまう。

そして騎兵と歩兵の混合部隊であるリリエル軍は、騎兵のみで構成されたムダル軍に追いつけない。

騎兵だけで追いかけると、さすがに敵兵の方が多すぎて、いくらファリスの援護があっても危険なのである。

「どうしよう。やっぱり敵は逃げていくだけだよ」

「うーん。明らかに敵は我々を引き付け様としています。もしかしたらこの先に敵の伏兵が居るのかも知れません」

「じゃあ、どうしよう？」

「とりあえず、ここに一旦留まりましょう」

そしてアルベルトが停止の合図を送り、リリエル軍はその場に停止した。

ファアリスの瞬間移動で偵察をお願いしたいところだが、あくまでファアリスは戦闘については素人だ。

偵察に出ても、伏兵の存在を見落とす可能性もある。

伏兵が無いと思って進撃した挙句、伏兵に会いでもすれば目も当てられないのだ。

するとやはり敵はまた戻ってきて、停止しているリリエル軍に挑発を続ける。

その様子を見ていたアルベルトが、口を開いたが、その口調にはアルベルトらしからぬ敵への微かな嘲笑が見て取れた。

「こんなあからさまな挑発に乗る訳もあるまいに。相手にせずここに留まりましょう。ファアリス殿。もし敵が向かってきたなら魔法で敵の出鼻をくじいて下さい。怯んだ敵に我々が攻勢をかけます」

だが、結局敵からの攻撃は無く、にらみ合いのまま日が暮れ、両軍は引き揚げて行ったのである。

帰還の途中もアルベルトの機嫌はよく、彼には珍しく饒舌に上機嫌でファアリスに語りかけた。

「あの様なあからさまな手で来るとは、敵にはもう打てる手が無い

のでしょう。もはや敵が撤退しても不思議ではありません」

だがその彼の自信はリクルハルド城に着くなり、打ち碎かれた。彼らの帰還を待っていたか様に、次々と報告が入ったのだ。

その報告とは、ファリスとアルベルトが率いる主力が敵に引き付けられている間に、複数の村が敵に襲われ、壊滅状態となった村が続出したというものだったのである。

21…ヘタレの深刻な悩み

城内に村を焼かれて行き場の無くなった領民が溢れた。

住むところを焼かれ、そして領外へと通じる道は全てムダル軍に押さえられている為、彼らは城へと逃げ込むしかなかったのだ。

幸いな事に、村がそれほどの被害を受けているに比べて村民の被害は少なかったが、そのささやかな幸運すら、城を兵糧攻めにする為に、多くの村民を城へと追いやるザークの作戦の一部である事に気付く者は居ない。

そしてこの光景を前に、アルベルトは屈辱に血が出るほど唇を噛んだ。

敵は打つ手が無く、自分達を遠巻きに挑発するしか出来ないのだと高をくくっていたら、実は自分達こそが敵に良い様に翻弄されていたのである。

アルベルトはリリエルの軍部最高責任者を務める家系に生まれ、その責務に耐えるべく幼少の頃より軍略について学んできた。

だが敵はそのアルベルトをあざ笑っているのだ。

アルベルトの受けた屈辱感はそのプライドを粉碎するには十分だったのである。

しかしアルベルトも、悔しがってばかりもいられない、何かこちらも手を考えなくてはならない。

だがどうすれば良いのか？

アルベルトは司令部にある自身の執務室で領内の地図を広げ、敵に対応する手段を模索する。

ファリス殿には以前の様に村を襲う敵軍に専念してもらい、自分達はあの敵騎兵部隊に当たるか？

いや、あの部隊の数はこちらと同じ程度と推測されたが、歩兵と騎兵の混成部隊であるこちらの主力より全兵騎兵な分、攻撃力は敵が勝ろう。

勝算が高いとは言えない。

では、ファリス殿に敵騎兵の相手を頼むか？

だが、敵の総兵力はこちらの3倍ほどと推測されている。

あの騎兵隊以外にも、こちらの主力の兵力に勝る敵部隊が派遣されてこないとも限らない。

いつその事、あの敵騎兵を無視して、村を襲う部隊のみに集中してはどうか？

いや、あの敵騎兵を放置すれば、敵騎兵自体が村を襲うだろう。

アルベルトは突然、地図を広げた机に自分の右拳を叩き付けた。その表情には、敵に対抗できない自身に対する怒りが浮かんでいた。

ファリスとティーナも、城内が村民で溢れる光景に啞然としていた。

「まったく、ひどい事をするわね！」

「アルベルトさんが言うには、敵の作戦みたいなんだけど……」

「作戦って？ 敵が村を襲うのは当然じゃないの？」

「えーと。アルベルトさんが言うには、村の人達を沢山城に追いやって、城の食料を無くならせようとしてるんじゃないかって……」

ティーナは「食料……」と呟くと、自分の周りをぐるりと見渡した。

「確かにこれだけ人が増えちゃ、食べる物なんてすぐになくなりそうね……」

そう言ったティーナの表情は不安げだった。

だがそのティーナの様子をみたファリスが

「大丈夫だよ。きっとまたアルベルトさんが作戦を考えてくれるよ」と彼には珍しく強い口調で断言し元氣付けた。

ティーナの不安がる表情など見たくは無いのだ。

するとティーナも「そうよね。きっと大丈夫よね！」とにっこりと笑って見せた。

ティーナは内心不安は拭えなかったが、ファリスが自分を元氣付けようとしてくれているのだ。

ファリスには心配をかけたくない。

そしてファリスもティーナが笑ってくれた事に喜び「うん」と笑顔で答えた。

だが城内が領民で溢れた為、2人には、特にティーナには深刻な問題が発生していたのだ。

ファリスと2人きりになれないのである。

勿論、今の様に2人で会話する分には問題は無い。

だが、ティーナの言う2人きりになれる場所とは、ファールリスを膝枕してあげたり、ファールリスとキスしたりする場所である。

領民達は気の毒とは思うが、それとは別として城内に領民達が溢れているこの状況はティーナには、精神的に死活問題だったのだ。

ティーナはファールリスと2人きりになれる場所を必死で考えた。

ファールリスの部屋に長時間2人で入り浸るのは問題だろう。

ティーナの部屋は昼間は侍女が控えているので無理だし、深夜なら侍女は下がっているのでファールリスが瞬間移動で飛んでくれば2人きりになれるが、それはまだ早いだろう。

そう考えると、ティーナの顔は赤くなった。

「どうしたの？」

突然顔を赤くしたティーナを不思議がって、ファールリスがティーナの顔を覗き込んだ。

ティーナは上ずった声で「なんでもないわよ!」と答えた後、まだ顔を赤くしたまま恥かしさを誤魔化す様に「ファールリスも何か考えてよ」とファールリスに矛先を向ける。

ファールリスは腕を組み考えるしぐさをし「僕の部屋は?」とティーナに問いかけた。

ティーナは「うーん」と首を傾げる。

「それは私も考えたけど、長い間あなたの部屋で2人きりにはなれないわ。少しの時間しか居られないならあまり意味ないし……」

「じゃあ、ティーナの部「ダメ!」

ファールリスが言いかけると、ティーナが即座にダメだしをする。

「え? ダメなの?」

ファールリスが「なんで?」というふう to 首を傾げた。

だがティーナは顔を赤くして「ダメなものはダメなの!」と叫ぶ。

こうして、ムダル軍をどうやって撃退するのかに頭を悩ますアルベルトに比べ、まことに恋人同士らしい事に頭を悩ませる2人なのだった。

そしてここに、城内に領民が溢れている事により仕事が増えた人物が居いた。アルベルトの副官のベムエルである。

彼はアルベルトの補佐的役割を任務としているのだが、現在は城内に収容した領民達の管理を任されていた。

だが、あまりの領民達の多さに、全員を屋根のあるところに寝かせる事も出来ない有様だ。

幸いにも今は温かい季節なので、寝るときも我慢できないほどではないが、雨でも降ろうものなら大変な事になるだろう。

そして一番の問題はやはり食料の問題だ。こればかりは我慢ですまされる問題ではないのである。

ベムエルは城内の食料を管理する文官に、あとのくらい食料が持つかを問い合わせると、その問いに文官が渋い顔をして答えた。

「この城は交通の要所として建てられた要塞です。2年、3年の籠城が可能な様に備えられています。ですので、この様な状況でもすぐに食料がなくなるという訳ではありませんが……」

言いよどんでいる様な文官の言葉に、ベムエルが少し眉をひそめて繰り返し問いかけた。

「具体的には？」

すると文官に、遠慮がちに口を開いた。

「現在の領民の数ならば半年以上は持ちましよう。ですが……今後まだまだ領民が増える可能性があるとなると、当然その期間は変わってまいります」

つまり、いつまで持つかはアルベルトやベムエル達、軍部の働き次第と言う事だ。

ベムエルもそう言われると二の句が継げず、取り敢えずは「今のところは後半年」という心許ない情報を胸に収め、そして司令部へと戻る道すがら今回の戦いについて思いを馳せた。

はじめはムダルの軍勢に押されていた為に、ヴィデンに援軍を頼む代償にとティーナお嬢様がヴィデンへと嫁ぎに行った。

するとなぜかお嬢様は、ヴィデンの援軍ではなく、頼りなげない男の子を連れ帰ってきて、どうするんだと思っていたら、その男の子は異世界から来たとかで、無敵の力を持っていた。

それならばヴィデンからの援軍が無くても勝てるだろうと自分達だけで戦い、はじめは優勢だったが、今はまた敵に押されている。

現在、戦況は芳しくない。

しかしベムエルを見ると、まだ勝つ手段はある。

確かにリリエルの戦力とファリスの戦力だけでは厳しい状況になっている。

しかし、まだ動員できる戦力はあるではないか。

それはヴィデンの戦力だ。

ヴィデンの動員力はムダルを超える。勿論、他領への援軍に全軍を遠征させてくるとは考えられないが、それでもリリエル軍とあわせればムダル軍に匹敵する戦力が期待できるだろう。

そしてさらに加えて、ファリスが居れば戦況はこちらが圧倒的に優勢に成る。だがその為には、ティーナがヴィデンへと嫁ぎに行く必要がある。

「しかし、ティーナお嬢様はファリス殿の事が好きみたいだしな……」

ベムエルはやれやれといった風に呟いた。

ティーナは隠しているつもりだったが、あれだけいつもファリスにくっ付いてはベムエルにはバレバレだったのである。

もっともそのベムエルにしても、すでに2人が出来ちゃっている事には気付いては居ないのであるが。

そしてそうこう考えているうちに司令部のアルベルトの執務室に辿り着いた。

「失礼致します。城内の食料の状況を確認してまいりました。現在の所、後半年ほどだそうです」

「半年か……」

アルベルトは机に添えられた椅子の背もたれにもたれ掛り、そう呟くと上を向いて目を瞑った。

「ただし、城内に避難する領民が増えればまた変わってくると……」

「まあ……そうであろうな」

半年と言えばアルベルトの予測よりは少し長いが、それも今後の戦況しだいと言われるとさらにアルベルトの気持ちは沈んだ。

「そのムダル軍を撃破する為の、なにか作戦は思いつかれましたか？」

「いや……やはり、逃げる敵を追いかけながら他の部隊も抑えるのは難しくてな」

空気が変わらない事に息苦しくなってきたベムエルは、少しでも場を明るくしようとあえて、希望的な話題をふってみた。

「しかし、食料と言えば敵とていつまでも食料は持たないでしょう。耐えていれば敵が先に撤退する事も考えられるのでは？」

「いや、敵はリクルハルド城が籠城に強い要塞と分かっている攻めてきているはずだ。長期戦を睨み食料を満載して……」

とここまで言った時、ベムエルにはこちらに飛んでくるのではないかと思われるほど、アルベルトは勢い良く上体を起こした。

そしてその顔には自身に満ちた笑みが浮かんでいた。

「ファリス殿を呼んでくれ。作戦を思いついた」

22…魔人へタレ

司令部の執務室でアルベルトはフアーリスに自身ありげに作戦を説明を開始した。

「逃げる敵を追いかけるのは困難ですが、敵陣は逃げません。敵陣を攻撃するのです」

「敵陣を攻めても兵士達は逃げて行っちゃうんじゃないの？」

「はい。敵兵は逃げるでしょう。しかし陣は逃げません」

「陣？」

フアーリスは驚いた様に声を上げた。

「はい。狙いは敵陣です。敵は領民を城に追いやり食料を消費させて兵糧攻めにしようとしておりますが、逆に我々が敵陣を襲って敵の食料を奪ってしまうのです」

「そっかー。アルベルトさんすごいね！」

アルベルトは「いえいえ」と謙遜するが、やはり顔は笑っている。

そして翌日には、アルベルトの作戦が実行された。

しかも敵の先手を打つ為に、まだ夜も明けきらぬ時間からの出撃である。

日が昇り敵からの村々への攻撃が始まってしまったのは、放置できなくなり後手後手に回ってしまう為だ。

そして明け方頃に、フアーリスとアルベルトの主力部隊、そして

ベムエルが指揮する運搬部隊はリリエル軍が第1陣と呼んでいる敵陣にたどり着いた。

「ファールリス殿。先行して頂けませんか？ 折角ですからこの軍勢で奇襲を。」と言いたいところですが、万が一敵に備えがあつて逆襲されては事です。今回の目的はあくまで敵陣を襲う事。無用な戦いをしてもしようがありません」

「はい」

アルベルトの言葉にファールリスは素直にそう答えると、次の瞬間その姿は消えた。

そして敵陣のすぐ近くに現れたファールリスは、まず陣地を守る柵にファイヤーボールを乱れ撃ちにする。

するとファイヤーボールが着弾した轟音に陣内から声があがった。

「敵襲だー！」

「魔物が攻めてきたぞ！」

その敵兵達の叫び声に

（魔物っていう呼び方どうにかならないかな……）

とファールリスは、敵から見れば魔物としか思えない能力を発揮しながら、心の中で不満の声をあげたのだった。

そして逃げる敵兵を追い立てる様に、その背後の地面に向かってファイヤーボールを放ち続け、敵兵をすべて追い払うと、またアルベルトのところに戻った。

「敵兵はみな逃げましたよ」

そう報告するファールリスの言葉に、アルベルトは大きく頷き「フ

アリス殿。ありがとうございますと御座います」と感謝の言葉を述べる。

そして率いる軍勢へと振り返り、ベムエルが指揮する運搬部隊に敵物資の搬出を命じた。

「食料を中心に持てるだけ持ち去るんだ。持ちきれない物はすべて燃やしてしまえ！」

そして物資の搬出作業の終了を待っていたのだが、その作業は意外にもすぐに終了した。

そしてその報告に来たベムエルは

「思いの外敵陣に蓄えられている物資が少なく、せっかく牽いてきた荷駄は全然埋まりません」

と困惑の表情を浮かべる。

「物資が少ない？ そんな事は無いと思うのだが……」
城攻めは長期間にわたるもの。それなのに物資が少ないなど通常は考えられないのだ。

「もしかしたら以前私が申し上げた様に、敵も食料が厳しいのでは？」

その言葉に、アルベルトは考え込む様に「うーん」と首を傾げる。
「その様な訳もない気がするが、実際物資が少ないというのか……」
と納得いかない様子だ。

「それっていけない事なの？」

「いえ。いけなくはありません。敵に物資の蓄えが少ないという事は、敵が戦えなくなるという事です。ですから、ですが、リリエル攻略の考えていたなら、その様な準備不足をするものなのかと」

「どうです？ 運搬部隊にもまだまだ余裕がありますし、敵の第2陣にも攻撃を仕掛けてみては？」

「そうだな……やってみても損はないか」

こうして敵の第2陣も攻める事となり、そして第1陣と同じ様にファールリスが敵兵を追い散らし、その後にアルベルト達が突入した。

そして敵陣の物資の蓄積状況を確認したベムエルが報告に来た。

「ここも物資の蓄えがほとんどありません。やはり敵の物資は残り少ないのでは？」

広告するベムエルの声は明るかったが、報告されたアルベルトの表情は陰しかった。

そしてしばらくの間、俯いて目を瞑り深く思案していたが、目を開け顔を上げるとおもむろに口を開いた。

「第3陣にも行きましょう……」

そして第3陣も攻略した彼らは、やはり敵陣には物資が少ないと知る事になったのである。

「やはり敵の食料はもう尽きているのではないのでしょうか」

「いや、それはどう考えてもありえん……」

「じゃあ、物資が少ないのはどういう事なの？」

アルベルトは、うつむき歯を食いしばり何かに耐えている様に見

えたが、言葉を搾り出す様に口を開いた。

「私の策は……敵に……見破られていた様です」

アルベルトの拳があまりに強く握られている為、小刻みに痙攣している。

「見破られて？」

「はい、そうです。やはりどう考えても敵の蓄えが少ないなどありえません。おそらく……敵は陣が攻撃される事があると見越して、必要以上の物資を蓄積していなかったのでしょうか」

そしてアルベルトは言い終わると、強く唇を噛んだ。

「そんな……」

せっかく敵に打撃を与えられる作戦を考えたと思っていたらそれが見破られていたとは。

しかも「またもや」なのである。

彼らが意気消沈するのも無理は無い。

そこにベムエルが遠慮がちに口を開いた。

「どうしますか？ 第4陣にも攻撃を仕掛けますか？」

「いや、第4陣もおそらく同じだろう。それに第4陣まで攻めるのは敵中に深く入りすぎる、いくらファリス殿が居ても危険だ」

こうして彼らは、わずかばかりの物資を敵から奪っただけで、むなしく引き返して行ったのだった。

そして城に戻ってきたファリスとその他達をティーナが出迎えた。

「どうだった？ 見たところ今回は誰も怪我とかも無いみたいだけど」

ティーナはそう言って笑った。

味方に損害が出るとファリスが悲しむと思って、味方に被害がなさそうなのを喜んでいるのだ。

「それが……敵陣は落としたんだけど、こちらが攻撃する事を敵が見破ってみたいで……」

「え？ そうなの？ でもひどい攻撃を受けた様には見えないけど？」

ティーナは、攻撃が見破られていたというなら、伏兵にあうなりしたのかと思ったのだ。

そこへアルベルトが会話に割って入った。

「お嬢様、実は敵はこちらに陣を攻め落とされてもよい様にと、元々陣に物資を蓄えて居なかった様なのです」

そう報告するアルベルトの表情は暗かった。

「そうなの……」

アルベルトの言葉にティーナも釣られた様に暗くなった。

しかし、アルベルトはすぐに表情を改め、力強く口を開いた。

「ですが、何かまだ手は有るでしょう。改めて作戦を考えて見ます」

そのアルベルトの言葉に、ティーナも安心したのか表情が和らぐ。そして「じゃあ、いきましよう」とファリスに声をかけ、ファリスと共にその場を後にしたのだった。

ベムエルはその2人の後ろ姿を見送り心配げな視線を投げかけた。（密室で2人で抱き合っているところでも見つからなければ、ばれないとも思っているのかな？）

そしてベムエルはやれやれとため息を付くと、執務室へと向かうアルベルトの後ろに続いたのだった。

23 ∴ 放火魔のヘタレ

前回の戦いから数日後、アルベルトは改めて作戦を立てた。

勿論その数日間は、ファールリスは以前と同じ様に村々を襲う敵軍を追い払っていた。

やはりかなり効果は薄くなっていたが、やらないよりはマシである。

そして今、その作戦を司令部にある執務室でファールリスに説明していた。

「惜しいですが、敵の食料を奪うという事は諦めました。ですが敵から食料を取り上げる事は止めません。敵の食料を燃やしてしまうのです」

「燃やす?」

「はい。敵の第1陣、2陣、3陣にはほとんど物資は蓄えられてはいませんでした。ですが、どこにも無い。などという事はありません。おそらく敵は本陣に物資を集積させ、そこから前線の陣へとこまめに物資を輸送しているのだと思われます」

「そっかー」

「ファールリス殿には、ここにあるムダル本陣を攻めて頂きたいと思っています。そして敵陣にあるすべての物を焼き尽くしてください」

アルベルトはそう言いながら机に広げた地図の一点を指差した。

「すべてを?」

「はい。すべてをです」

ファールリスは戦争に関しては素人である。なまじ倉庫らしき物とか食料らしき物と指定しても、敵も巧妙に偽装している可能性がある。

ある物をすべて燃やして欲しいと頼むのが一番なのである。

「わかりました。いつやればよいの？　今から？」

「そうですね。早ければ早いほど良いので、ファールリス殿に特に問題が無ければ」

（この後ティーナと会う事になってるんだけど……）

とはいえ、戦いは人命に関わる事だ。

ムダル軍が撤退するのが早まれば早まるほど襲われる村民は少なくなる。女の子と会いたいから後にしてとは言えない。

ファールリスは、ゆっくりと会えなくなったと伝えた時にティーナがどう思おうかを不安になりながらも「大丈夫です」と頷いた。

「では、早速」

「あ、ちょっとだけ待って下さい！」

「それは勿論構いませんが、なにか用事でも？」

「えーと。あ、はい、ちょっと」

と、ファールリスはずいぶん分かりやすい言葉の濁し方をしたが、アルベルトが許可してくれたので、足早に執務室を後にした。

「ティーナお嬢様か……」

後に残されたアルベルトはそう言って椅子の背もたれに思い切り身を預けると、大きくため息を付いた。

結局、ベムエルだけではなく、アルベルトにもバレバレだったのである。

しかも今の様子だと、ティーナがファアリスを好きというより、2人はすでに付き合っていると思われた。

アルベルトはもう一度ため息を付くと、椅子から起き上がり窓に近づき、窓から外を眺めた。

その表情はどこか寂しげだった。

ファアリスは執務室からでるとすぐ、瞬間移動である場所へと飛んだ。

そこは城内にある高い塔の内部だった。

ここが、ティーナと2人で一生懸命考えて見つけた2人だけで会える場所だったのだ。

この塔を上る螺旋階段の途中に座り込むのである。残念ながら膝枕をするには不向きであるがそこは仕方があるまい。

ここならばもし人が下から上ってきても足音ですぐに分かるし、もし人が来ればファアリスはすぐに瞬間移動で姿を消して、後はティーナが「ちよっと1人で塔の上から町を見たかったの」とでも言えば問題ない。

そして塔の内部に姿を現したファアリスにすぐにティーナの声が

飛んだ。

「ファリス、ここよ！」

ファリスがその声のする方を見ると、ティーナはファリスがいる位置より10段ほど階段を上ったところに、にこにこと笑いながら座っていた。

「ティーナ！」

ファリスもそう声を上げて階段を駆け上がり、ティーナの正面まで来たが、そこでファリスの表情が曇った。

折角2人っきりで会えたのに、すぐに行かなくては成らないと伝えないと行けないのだ。

だがファリスがどう伝え様かと言いよどんでいると、ティーナが先に口を開いた。

「出陣しないと行けないの？」

「……うん」

「しょうがないわよ。気にしないで」

ティーナはそう言いながら小さくため息を付き、そして少し首を傾げてファリスの顔を覗き込む。

だがファリスがティーナが怒っていない事に安心し、笑顔で「うん。ありがとう。じゃあ行ってくるね！」と言ってティーナから背を向け様としたが、ティーナは背を向け様とするファリスの襟首を「まてえい！」とでもいう様に、ガシッ！と掴んで引き止める。

>i22309—2976<

「え？ なに？」と驚いて振り向くファリスに、ティーナは「ん」と顔を突き出した。

そしてティーナの肩に手を置き、ファリスはティーナにキスをしたのだった。

ティーナは「いってらっしゃい」と手を振り、相変わらずキスするたびに真っ赤になるファリスを送り出した。

だがファリスが瞬間移動で消えるとすぐに螺旋階段に、ティーナの「もー！」という叫び声が響いた。

そして、階段に仰向けに寝転がる。

ファリスに負担をかけまいと、素直に諦めた様に装ったが、やっぱり残念で仕方がないティーナだったのである。

そしてファリスは、執務室に戻ってアルベルトに挨拶をすると、早速アルベルトが地図で指差した、ムダル軍本陣へと向かったのだ。

ムダル本陣に着いたファリスは片っ端から火を点けて回った。

手から火の玉を出しすべてを焼き尽くすその姿はまさに魔物である。

いくらファリスが魔物と呼ばれたくないと思っても、無理な相談というものだ。

そしてムダル本陣にあるすべての物が焼き尽くされ、その煙は遙

か遠くのリクルハルド城からも臨む事が出来た。

「ファリス殿が上手くやった様ですね」

執務室の窓から煙が上る方角を見ていたベムエルが、執務室に備えられた机の椅子に座るアルベルトへと向き直り笑みを浮かべた。

しかしそのアルベルトは「うむ」と答えるだけで、あまり喜んでいる様には見えない。

「どうしたのです？ 作戦は大成功と思われませんが」

アルベルトは机に膝を付き俯いて何かを考えている様だったが、重々しく口を開く。

「ファリス殿にせっかくやっていただいた作戦ではあるが、おそらく無駄の様な気がしてな……」

「無駄!？」

ベムエルはそう言って、目を見開いて驚き声を上げた。

「ああ、さすがにせっかくやって頂くファリス殿の前では言えなかったがな。敵はこちらが陣に対して攻撃を仕掛ける事を予測していた。そして敵もファリス殿が瞬間移動で前衛を無視して直接本陣を突ける事ぐらいは察していよう。ならば本陣にも物資は置いてはいまい」

そして大きくため息を付いて背もたれにもたれ掛り、目を瞑った。

ベムエルはアルベルトに気遣わしげな視線を送ると、また窓の外へと向き直り、立ち上る煙へと視線を移した。

そしてその夜、ムダル本陣ではザークが自身の天幕で被害報告を受けていた。

「突如現れた魔物は、こちらが食料に見せかけているおが屑の入った袋などをすべて燃やし尽くした後、姿を消しました。おそらく城へと戻ったのだと思われます」

実は、アルベルトをはじめとするリリエル軍が、本陣と誤っている陣は、ムダル軍の本陣では無かったのである。

その報告にザークは「わかった」と一言答えると、もう興味が無くなったかの様に手を振って報告者に退出する様に命じた。

だがその者が天幕を出ようとするや背後からザークが今一度声をかけた。

「一応、もう一度同じ様に偽装した本陣を構築するように」

そしてザークは、今度はもう本当に興味をなくし他の仕事へと励んだのだった。

ちなみにその前に攻め落とされた3つの陣もすでに再構築は終了している。

まず前衛にリリエル側が第1、2、3と呼ぶ3陣、そしてその後ろに第4陣、そして本陣、さらに本陣の背後を守るように第5陣。これがファールリスがリクルハルド城に着いた時の配置だった。

それがファールリスに本陣を攻められた為、本陣を第5陣のさらに後ろに構築した。

そして一度その新しい本陣へと全軍を集結。

さらにそれから各陣を構築し直す時に、本陣を元の第5陣の位置まで進ませていたのである。

なぜ、本陣を進ませたかと言えば、本陣が後方過ぎると指揮に支障があるからである。

そして4陣の位置まで進まなかったのは、さすがに前過ぎて危険だからである。

では、本陣を元の本陣の位置にまで戻さなかったかと言えば、敵に本陣の位置を誤認させる為である。

そして実際アルベルト達は、一番後ろにある陣をムダル本陣と誤認しているのだ。誤認させる理由は、さすがに何度も魔物に本陣を攻められると面倒だからだ。

そして物資は、その各陣の大移動に紛れて山中に分散させて隠すように作業されたのである。

各陣にはその画している場所から数日分ずつが夜陰にまぎれて運搬されている。

ザークにしてみれば今回のリリエル軍の動きは、30点と言った所だ。

第1、2、3陣を攻めて物資が少ないのを「敵はもう食料が少ないのだ」と喜んで守りを固め、こちらが退却するのを待ったりはせず、偽装のとはいえ本陣を攻めて来たのはまあ良い。

しかし、それだけの話なのだ。結局その本陣は偽物であり、何の意味も無い。

偽装本陣を構築しなおす兵士は大変かもしれないが、ザークには関係の無い話である。

だが、もしザークが、アルベルトがムダル本陣を攻めても無駄だ

ろうと分かっている攻めていたと知れば、10点を加算して40点にしてくれたかも知れないが、それを知ったとしてもアルベルトにしてみれば大きなお世話だろう。

そもそも始めに魔物に本陣を襲われた後、後退させた本陣に一旦全軍を集めた事の意味を少しでも考えれば、こちらの意図を察してもよさそうなものなのだ。

もしザークが、アルベルト達が軍議の席で、ムダル軍が一旦全軍を集めた事を「敵の意図は計りかねますが」などと言っていたと知れば、普段の重厚さを捨て腹を抱えて地面を転げまわって大笑いしただろう。

ザークの今一番頭を悩ませている問題はディエゴの事だった。

ディエゴはムダル領主の息子だ。いずれ後についてディエゴ自身がムダル領主になるだろう。

しかし、自分とディエゴの関係は蜜月と言うには程遠い。

ディエゴがムダル領を継ぐ前に、ディエゴを始末する必要があるだろう。

だが、この戦いの最中はまずい。自分の責任が問われてしまう。ディエゴを始末するなら、その後が良いだろう。

ザークは、もはやこの戦いの後の事を考えていたのだった。

24…ヘタレの甘い日々

「やはり敵は撤退せんか……」

リリエル軍司令部の執務室でアルベルトは力なく呟いた。

フアーリスによるムダル本陣への襲撃から数日が経っていた。

それにも関わらず敵が撤退しないとなれば、敵はやはり本陣にも物資を蓄積していなかったという事を意味する。

とはいえ、物資がどこにも存在しないなどという事はない。おそらく敵は物資を山中に隠しているのだろう、と考えられる。

だが、山中のどこかなどという事までは分かり様がないのだ。

だが手をこまねいてばかりは居られない。

城内に避難して来る領民達は日々増えていつているのである。

先日半年は持つと報告された城内の食料も、現在ではいつまで持つのか。4ヶ月か、いやもはや3ヶ月程度か。

こうなれば敵に決戦を挑むしかない。

だが戦力は向こうが上、ともに戦っては勝算は低い。ならばやはりフアーリスにも参戦してもらい、敵を混乱させつつ戦うしかないだろう。

だが敵がその決戦に乗ってくるだろうか？

以前の様にこちらが攻めては引き、こちらが引いては攻めてきて、足止めを食らうだけなのではないか？

いや、敵が逃げても、こちらは敵陣を次々と攻めていけば良いのだ。

前回敵陣を攻めた時は、運搬部隊も引き連れていて敵中奥深く攻めるのは危険だったので第4陣を攻めずに引き返したが、次は第4陣どころかすべての陣を攻めるつもりで攻めれば、敵も放置は出来まい。

「ベムエル。フアーリス殿を呼んできてくれ」

「は。かしこまりました」

アルベルトの命に、ベムエルはそう言って、即座に執務室の外へと通じに扉へと向かう。

だが立ち去るベムエルの背を眺めながらアルベルトは、ベムエルに気付かれない様に小さくため息を着いた。

この作戦も敵には読まれているのではないか？　そう思えてならないアルベルトだったのである。

「膝枕をして欲しくないかしら？」

少し上ずった声でティーナがそう言った。

フアーリスとティーナは、2人きりになれる塔の螺旋階段に座りながらいつもどおり、他愛のない会話を楽しんでいたのだ。

「膝枕？」

フアーリスはそう言いながら首を傾げてティーナを見つめる。

「えーと。ほら、ここに座ってお話するのも良いけど、ずっと膝枕してないでしょ？　前はよくしてたのに」

「あ。そうだね。して欲しいかな」

そう言うところファリスは微笑んだが、次の瞬間その微笑を収めてまた首を傾げた。

「でも、どこかティーナに膝枕して貰える様な場所あるかな？」

螺旋階段の上で膝枕をするのは中々難しいだろう。

（落ち着くのよ）

ティーナはファリスに自分の胸の高鳴りを悟られない様に、自分に言い聞かせた。

「私の部屋だったら大丈夫と思うわ」

「あれ？ ティーナの部屋は前はダメって言ってなかった？」

そう言って、またファリスは首を傾げる。

左右にひよこひよこ首を傾げるファリスを可愛いと思いながら、今はそれどころで無いと気を取り直し、ティーナは決定的な言葉を放つべく勇気を搾り出した。

「私の部屋は昼間は侍女が居るからダメと思ったのよ。でも、よく考えたら夜には侍女も下がるし夜なら大丈夫と思うわ」

（言ってしまったわ）

そしてティーナの胸の鼓動はさらに早くなり、顔が見る見る赤くなるのが自覚できた。

この螺旋階段は、数箇所窓がある程度で薄暗く、真っ赤になったティーナの顔色を隠しているのがせめてもの救いだ。

だがそんなティーナの決意に比べ、それがどのような意味を持つか全然考えず、ファールリスは素直ににっこりと笑う。

「そうなんだ。じゃあ、2人きりになれるね」

「ええ。そうよ」

ティーナもファールリスの笑顔に、にっこりと笑って応えたが、自分の決意を全然理解していなさそうなファールリスにちょっとムカついた。

（ファールリスもちよっとくらいドキドキしてよね！）

だが、そのムカつきのやり場がないので、ファールリスに向かって「ん」と顔を突き出した。

だがファールリスはティーナの突然の行動に戸惑い「え？」と声を上げる。

「ん」と、さらにティーナが顔を突き出す。

ファールリスはやっとティーナの意図を察して、ティーナの頬を両手で包み込む様にしてキスをした。

だが、ティーナはまだ許さない。

「ん」とさらに顔を突き出す。

ファールリスは「いまキスしたよね？」と思い、また「え？」と声を上げた。

だがティーナは「ん！」と強く言う。

仕方がないので、ファールリスはまたティーナにキスをした。

そしてまた「ん」とティーナが顔を突き出す。

結局ティーナが「まあこれくらいで許してあげましょう」と気が済むまで、ファリスはティーナに10回以上キスをする事になったのだった。

だが、この様にはたからみると、かなり痛々しい事になっている2人の甘い時間を邪魔する者が現れた。

「ファリス殿ー！」

と呼ぶのは勿論ベムエルである。

「あ。僕行かないと」

ファリスが慌てて立ち上がると、ティーナも内心の残念さを隠し「仕方がないわね」とファリスを送り出した。

勿論、最後にもまた「ん」とティーナが顔を突き出したのは言うまでもない。

さっき10回以上キスされたが、これはまた別腹である。

そしてその夜。

ティーナは自分の部屋で落ち着きなく、ファリスが来るのを待った。

ティーナは、ベッドで寝て待った方が良いのか、ベッドの縁に座って待っていた方が良いのかと、寝たり起きたりを忙しく繰り返し返していた。

（でも、昼間のファールリスのあの様子じゃ、ファールリスはあんまり意識して居なさそう……）

そう思うと残念な気もするが、その反面ちよっとほっとした。

（今日は昼間言ってた様に、膝枕をしてあげるだけで終わるかも……でも、ファールリスだって男の子だし……でも、ヘタレだし……）と心も体も落ち着きなく、ファールリスの来るのをまった。

そしてティーナがベッドの縁に座っていると、突然ファールリスが現れた。といっても、瞬間移動で来るのだから、突然現れるのは当然である。

「ごめん。ティーナ」

ファールリスは現れてるとすぐにそう謝罪した。

ティーナは「遅くなって」という意味で言っているのだろうと「そんなに、待ってないわよ」と、待ちに待っていた事を隠し、にっこりと微笑んだ。

だがファールリスは言葉を続ける。

「明日の朝早くから出陣なんだって。だから今日は早く寝ないと。膝枕はまた今度ね！」

ファールリスは遠足前日の幼稚園児の様にそう言うと、またすぐに消えてしまったのだ。

その後には呆然とするティーナが残され、しばらくそのまま固まって居たがその後、ベッドに仰向けにバタンと倒れこんだ。そして叫んだ。

「ファールリスの馬鹿！」

「あ。ごめん」

ティーナがその声に驚いて顔を上げると、果たしてファリスがそこに立っていた。

どうして戻ってきたの？ と驚いているティーナにファリスが近づく。

そしてティーナの顔を両手で優しく包み込むと、ティーナにキスをした。

どうやらお休みのキスを忘れたと戻ってきたらしい。
ちなみにティーナの「馬鹿！」という発言は、おやすみのキスをしていかなかった事への不満とファリスは受け止めたのだった。

そしてファリスは顔を真っ赤にしながらも「おやすみ、ティーナ」と言ってまた姿を消した。

その場に残されたティーナは、しばらくすると「まあ、いいでしょう」と呟いた。

おやすみのキスをしに戻るなんて、ヘタレにしては上出来ではないか。

そしてニタニタと笑いながらベッドに潜り込み、そしてベッドに入ってから頭から毛布を被り笑い続けたのだった。

翌朝、アルベルトの作戦が実行された。

ファリスはアルベルトと共に主力部隊の先頭に立ち進撃する。

敵騎兵部隊がリリエル軍を引き付け様と現れたが、追いかけると

やはり逃げるので、その部隊を無視して第1陣、第2陣と次々と陣を落とし、さらにファリスが一応と、僅かばかりに蓄えられた物資を燃やしていく。

ムダル本陣で、このリリエル軍進撃の報告を受けたザークは、顔に嘲笑を浮かべて呟いた。

「0点」

>i22381—2976<

25…無力なヘタレ

ムダル本陣で、ザークは軍勢を集結するように命じた。

リリエル軍に無視された騎兵部隊、さらにリリエル軍に落された陣の兵士達もリリエル軍が第4陣と呼ぶ陣に集結させ、そしてザーク自身も実は本陣である第5陣から兵を率いて出陣する。

ちなみに、指揮を執るには邪魔にしか成らないであろうディエゴには「司令官は前線には立たず後方にて勝利を待つもの。戦闘は前線指揮官に任せ勝利の報をお待ちください」とそれっぽい適当な事を言って軍勢の中頃に留めている。

第4陣で集結したムダル軍はさらに進み第4陣の前でリリエル軍の到着を待った。

その数は以前リリエル軍によって損害を受けたことと、今回リリエル軍に追い散らされて集結しきれない分を引いても、リリエル軍の2倍以上の戦力である。

そしてリリエル軍も第3陣を落した後、さらに進撃しムダル軍と対峙したのだった。

「こちらの思惑通り敵も出陣してまいりましたね」
敵を目前に望みながらベムエルがアルベルトに話しかけた。

「ああ……」

「どうしました？」

「いや、なんでもない。ここで勝ってさらに敵陣をすべて落す。そうすれば敵も体制を立て直すのに時間が掛かろう。だが我々は連日攻勢をかけ、敵に体制を整える時間を与えず敵を領外まで押し戻すのだ」

そう強気な言葉を発したアルベルトだが内心の不安は拭いきれない。

この戦いは負けるわけには行かないのだ。

ファリスが来る以前は、ムダル軍に対して勝ったり負けたりを繰り返し、負けた場合は城に籠って体勢を立て直していたが、現在はそれが許される状況ではない。

体勢を立て直すなどと悠長な様な事をしている間に多くの村々が襲撃され、城内はさらに領民で溢れるだろう。この戦いは必ず勝たなければ成らないのである。

だが、敵はまたこちらの作戦を読んでいるのではないか？ 今までの作戦がすべて敵に読まれているアルベルトはついそう考えてしまふのだ。

とはいえ、ではそんな危なげな決戦などしなければ、といっても食料が尽きかけている今、それは僅かばかり命を永らえさせるだけに過ぎないのである。

アルベルトにはもはやこれしか手が無かったのだ。

アルベルトはそばに居るファリスに「では、おねがいします」と出撃させると、それに続いて全軍に突撃を命じた。

「ファリス殿が敵を追い散らし、敵の指揮系統を壊滅させる！ この戦い我らの勝利は間違いない！」

アルベルトは内心の不安を隠し切り、将兵の士気を高めるべく激を飛ばして突撃を開始する。

そしてムダル軍もそれに呼応する様に前進を開始した。

ファールリスは瞬間移動でムダル軍の前に出現すると、ムダル軍に向かってファイヤーボールを連射する。

ファールリスの攻撃に、何人もの騎士が馬から落馬し、爆風で飛ばされた兵士が槍を取り落とす。

だがその後、ファールリスは思いもよらない光景を目にしたのだった。

なんと、落馬した騎士は、地面に打ちつけた体でふらつきながらも再度馬に跨り、槍を取り落とした兵士は槍を持ち直して、再度前進を開始したのである。

ザークに言わせれば、不必要に魔物を多用し過ぎたのだ。

結局兵士の方から攻撃しなければ魔物は攻撃を当ててこない、いくらなんでも何度も経験すれば、慣れてくるというものだ。

勿論当たれば大怪我どころか下手をすれば命のない火の玉である。

恐怖をすべて払拭するのは難しい。

だがザークは次の言葉で自軍の将兵を思い通りに動かしたのだ。

「みな分かって入るだろうが、今回の戦いは、我らの故郷であるムダルの多いなる発展の為の重要な戦いである。みな親、兄弟、そして妻や子供もお前達の活躍を期待しているだろう。ましてや逃げ出す様な臆病者を身内に持つなど、屈辱のあまり生きては居られない」

あまりにも分かりやすい脅迫の言葉である。

こうしてなんと味方の将兵を脅迫するという方法で、ファールリスの魔法に対して、恐れずに立ち向かう事を強要したのである。

この状況にリリエル軍に動揺が広がった。

敵が2倍以上でも勝てるという勝算は、ファールリスが敵を追いつ散らせるという事が前提なのだ。

にも関わらず敵がファールリスの魔法に物ともせず前進してきては、劣勢は免れない。

今までファールリスの魔法頼みだったのが、ここに来て逆にリリエル軍の精神的な弱点となってしまうたのである。

ファールリスは必死でファイヤーボールを連射するが、それはムダル軍の前進する速度を僅かばかり減速させる効果しか発揮せず、遂にはムダル軍とリリエル軍が激突した。

ファールリスはならばと、リリエル軍兵士と切り結ぶムダル軍兵士を狙おうとするが、ムダル軍兵士はファールリスの姿を見つけると、巧みにリリエル軍兵士と体の位置を入れ替え

ファールリスの死角に入ろうとする。そしてそうなればファールリスも魔法を撃つ事が出来ない。

このファールリスの死角に入るという事も勿論ザークの指示である。

さすがにファールリスの動向にも注目しながらの戦いに、ムダル軍はその力のすべてを発揮出来ないが、それでも数はリリエル軍の2倍である。

やはりムダル軍が優勢だった。

この状況に危機を覚えたアルベルトは全力でファールリスの名を叫

んだ。

「ファリス殿ー!!」

そしてその声を聞いたファリスがアルベルトの前に瞬間移動で現れる。

「アルベルトさん、ごめんなさい。魔法が……」

自分の魔法が敵に効かない所為で、戦いが劣勢なのだと考えたファリスが即座に謝ったがアルベルトは首を振る。

「以前にも言ったとおり、ファリス殿の所為ではありません。すべては私の責任です。ですが今一度お力を貸してください」

「それは勿論良いですけど。僕は何をすればいいの？」

するとアルベルトがリリエル軍の背後にある木が生い茂る間に通った山道を指差した。

「我々はあの山道から退却します。ファリス殿は我が軍将兵がすべて山道に入ったら、その入り口に魔法で火を点けて、敵の追撃を防いでください」

「はい。分かりました」

まだ自分が出きる事があるなら全力でそれを行うべきだろう。

そしてリリエル軍は山道へと退却を開始し、ファリスがその背後を守るべく、ファイヤーボールで木々に火をつけてムダル軍の追撃を防ぐ。

こうして何とか最小限の被害で退却する事が出来たりリエル軍だったが、敗戦の衝撃はむしろ精神的なものが大きかった。

自分達の守り神とも思っていたファリスの魔法がほとんど役に立たず、決戦にも負けてしまったのである。

もはや、リリエル側には打つ手はなく、このまま食料が尽きて負けていくしかないのだろうか？

将兵、領民問わず、城内すべての者達の不安は深まるばかりだった。

司令部の執務室ではアルベルト、ファリス、ベムエルが顔を合わせて今後の対策を練っていた。

「ごめんなさい。僕がちゃんと出来てれば……」

戦いが負けたのは自分の所為だと気に病んでいるのだ。

だがアルベルトは首を振る。

「そんな事はありません。先ほども言いましたが、ファリス殿の所為ではありません。何度もファリス殿に出撃して頂いていれば、敵もその対応を考えるのは当然の事。それに気付かなかった私の責任なのです」

「でも……」

「いえ。本当にファリス殿の所為ではないのです。ファリス殿に頼りすぎた私の責任です。今一度ファリス殿のお力を借りずに戦う方法を考えてみようと思います」

「僕を抜きで？」

ファリスは目を見開いて驚いた。

その様子をみてアルベルトが苦笑する。

「いえ。勘違いなさらないで下さい。なにもファリス殿がもう必要がないという訳ではないのです。言うなればそうですね……ファリス殿がいなくても勝てる策ならば、たとえファリス殿の魔法が封じられても勝利できますし、ファリス殿の魔法が効くならばなおの事大勝利ではありませんか」

「それはそうかも知れませんが……」

アルベルトがまた苦笑する。

「仕方が無いですよ。私だって火の玉を飛ばす能力が防がれるなんて思っても居ませんでしたから」

その言葉にファリスは首を傾げた。

するとその様子を見たベムエルがファリスに話しかけ様としたが、その前にアルベルトが口を開く。

「では、作戦をもう一度考えなおしてみたいと思います。ファリス殿にはまたその時にお願いする事になると思いますので、よろしくお願いします」

そしてファリスはベムエルに扉を開けてもらい執務室を出ると、ベムエルと少し話した後その場を立ち去った。

その夜、意気消沈するリリエル側とは反対にムダル陣営では将兵が浮かっていた。

もう今日は敵襲がありえぬと、酒樽を引き出し将兵共々酔いに酔

っている。

将兵の機嫌を取る気など毛頭ないザークであるが、戦いには士気を高揚させる事も必要だと、ザークが命じたのである。

焚き火の周りに集まった兵士達の酒の肴の話題は、当然今日の魔物のヘタレっぷりについてである。

「火の玉を出すというからどれほど恐ろしいかと思っていれば、他愛も無いではないか！」

「まったくだ。魔物など、居ないと思って戦えば良いだけなのだからな」

すると周囲からドツと笑い声が上がる。

まるで元々ザークに脅迫されて魔物に立ち向かわされた事など、忘れてしまったかの様である。

ザークも焚き火の明かりに顔を照らされながら、この光景を満足げに眺めた。

これですます将兵はあの魔物を恐れずに戦うだろう。

ザークに言わせればリリエル軍の作戦はすべて後手後手過ぎて機を逃しているのである。

一番初めに魔物を投入した時に、こちらの全陣を襲わせ物資を焼き尽くさせていたら？

こちらの食料が無くなり、リリエル軍の圧勝である。

だが今や、物資を焼き尽くそうにも各陣にはほとんど物資を蓄積させていない。

戦いの初期の段階で今日の様に全陣を攻め落とすつもりで、魔物と共に軍勢で攻め寄せてきていれば？

魔物の火の玉でムダル軍将兵は追い立てられ、リリエル軍の圧勝

である。

だが今や、魔物を多用した為にその弱点を将兵にも看破され、将兵を追い立てる事など出来ない。

だが実は今でもリリエル軍がムダル軍に勝つ方法はあるのだ。

ザークにはそれが分かっている。

勿論、いきなり魔物がムダル軍将兵に攻撃できる様になるなどという事ではなくである。

敵が魔物による陣への攻撃を止めたという事は、敵も物資を山中に隠しているという事を察したのであろう。

そして山中に隠した物をそう簡単に見つけられる訳が無いと諦めたに違いない。

だがザークであれば、そんな事なんの問題にもしない。

もしザークがリリエル側に居れば、ムダル軍の食料を燃やす為に、リリエル領内の山々をすべて魔物に燃やし尽くさせているだろう。

自分の命が危なく、敵に領地を獲られそうだというなら、そうした方がマシというものだ。

だが今リリエルに居る奴らでそれを実行する者など居ないであろう。

ザークは、リリエル領奪取後の、荒れ果てたリリエル領の再建計画を立てるべく自身の天幕へと戻った。

26…決戦前夜のヘタレ

前回の出撃から数日が過ぎていた。

その間もファリスは村々を襲うムダル軍を追い払い続けたが、やはりすべてを追い払うのは難しく、城に避難する領民の数は増え続けていく。

すでに食料は1ヶ月と持たない状況となった。

だが明日もう一度ムダル軍に対して決戦を挑む事になっている。
アルベルト、ベムエル、そしてファリスが何日も頭を捻って考え抜いた作戦である。

これで勝てないのならもはや勝機は無いであろう。

そして司令部の執務室では、アルベルトとベムエルが明日の詳細を詰めていた。

「なんか、数打ちや当たるみたいな作戦ですね」
計画書を見ながら、そうベムエルが口を開いた。

「言うな。私だって自覚している。だが数打つ事も重要な作戦の内なのだ」

アルベルトの返答にベムエルは肩をすくめた。

その様子を見てアルベルトが「ふ」と笑った。

「明日の決戦は負ける訳には行かないからな。必勝を期して出きるすべての手は打つ」

ベムエルはその言葉にしばらく考え込んでいたが、不意に口を開いた。

「ファリス殿には、この戦いで負ければ後は無いといいましたが、実はまだ逆転の手段がありますよね？」

「なんの事だ？」

ベムエルはヴィデンの軍勢を呼寄せる事をアルベルトに提案するつもりだった。

しかしそれにはティーナがヴィデンの跡取りの元に嫁ぐ必要がある。

ファリスとティーナの事は、そつとして置いてあげたかったが、負けてしまったては元も子もない。

負ければ、ファリスはともかくティーナの命も危険なのだ。

「あるじゃないですが、呼寄せられる戦力が「ヴィデン軍なら呼ばんぞ？」

言いかけたベムエルの言葉をアルベルトが遮った。

「あ。お気付きでしたか？」

「当たり前だ。見くびるな」

その言葉にベムエルは意外そうな表情をした。気付いているならばとっくの昔に呼寄せても良さそうなものなのだ。

あることに気付いていなければ。

「ということは、ティーナお嬢様とファリス殿の事もお見通しで？」

「ああ、ティーナお嬢様の事ならばずっと見ていたからな」
そう言うところアルベルトはベムエルから視線を外した。

ベムエルが「まずい事を聞いたかな？」という風に口を開く。
「これは……立ち入った事をお聞きして申し訳ありませでした」

「ふ。気にするな。まあ、ヴィデンの跡取りなどに嫁がせるくらいなら……」

その言葉にベムエルが少しおどけた様に続ける。

「ファリス殿の方がマシですか？」

「いや。ティーナお嬢様は、自分で選んだ相手と結ばれるのが一番良いのだ」

アルベルトはそう言って少し寂しげに笑った。

その相手とは自分ではないのだ。

ベムエルは「これは失礼いたしました」と深々と頭を下げ、そして「では、ヴィデンの跡取りより何だったらマシなのでしょう？」と興味深げに問いかけた。

その問いに対しアルベルトは静かに口を開く。

「知れたことだ。相打ちになってでもムダル軍を倒した方がマシだ」

ベムエルはまた深々と頭を下げた。

その頃、ファールリスはティーナの部屋に居た。

前回の出撃の後、ファールリスは毎晩、ティーナの部屋に来るようになっていたのだ。

もっとも結局、ティーナの言葉通り、膝枕をしてあげるだけに終わっているのだが。

「明日、決戦ですって？」

ベッドの上でファールリスに膝枕をしてあげているティーナが問いかけると、ティーナに金髪を玩ばれながらファールリスが「うん」と答えた。

「勝てるわよね？」

「うん。勝つよ」

珍しく断言するファールリスにティーナは微笑んだ。

そしてしばらく、ファールリスの頭を撫でていたティーナだったが、不意に口を開いた。

「元の世界に戻るなら戻りたい？」

ティーナの言葉にファールリスは驚いて、ティーナの膝の上で頭の向きを変えてティーナの顔を覗き込んだ。

「元の世界に戻ったら会えなくなっちゃうね」

そう言いながら、ティーナはファールリスの頭を撫で続ける。

「ティーナは……それでも良いの？」

ティーナは相変わらずファリスの頭を撫で続ける。

「ちがうわ。ファリス。私の事じゃないの。あなたの事よ？」

そう言うと、ティーナはまるで、小さな子供を優しく叱り付けるかの様に微笑んだ。

「僕の？」

「あなたはどうしたいの？」

ファリスの心臓の鼓動が早くなる。

その決断は家族との決別を意味するのだ。でも、ファリスの気持ちはとっくの昔に決まっていた。

単に今までその言葉を言う勇気が無かっただけの事なのだ。

「僕は……ティーナと離れたくないからこの世界に残るよ」

ティーナはファリスの頭を「良く出来ました」とでも言う風に抱きしめた。

「でも、御両親と会えなくなるわよ？」

「いいんだ。もう決めたんだ」

実際よくは無いのだが、ティーナと離れる事などファリスには最早考えられない事だった。

「じゃあ、私責任重大ね」

そう言うと、ティーナはさらに強くファリスを抱きしめた。

そしてしばらくファリスを抱きしめていたが、ティーナは不意に「ごろーん」と言いながら、そのまま後ろに倒れた。

「え？」

ファリスが驚き四つん這いで、ベッドに仰向けに寝そべるティーナに近づく。

すると、ティーナはファリスに手を差し伸べた。

「私を選んでくれてありがとう」

そしてファリスを見つめて微笑む。

「ティーナ……」

ファリスはその手に導かれる様に、ティーナの上に覆いかぶさった。

こうしてファリスは翌日の決戦に、ティーナの部屋から出陣する事になったのだった。

>i22442—2976<

27…ヘタレ勇者

アルベルトが率いるリリエル軍とファリスは、夜も明けきらぬ内に城を出発し敵の第1、2、3、4陣を大きく迂回し第5陣へと向かっていった。

奇襲を行う為である。

さらに時を同じくして、ファリスには第4陣に飛んで貰い、第4陣を攻撃して貰う予定だ。

これにより、敵は第1から第4陣までの戦力が本陣への救援にこれなくなるはずである。

そして第5陣を攻略した後は、敵の本陣を突くのだ。

もっとも、アルベルトは未だ見破っていなかったが、はじめに攻める第5陣こそが敵の本当の本陣なのであるが。

敵の第5陣の前まで来るとアルベルトがファリスに声をかけた。
「では、ファリス殿お願いします」

「はい。分かりました」

ファリスはそう返事したかと思うと姿を消す。敵の第4陣へと向かったのだ。

「突撃！」

そしてアルベルトの号令の元、リリエル軍が第5陣へと突撃を開始した。

だが第5陣の柵の前まで進んだ彼らに、柵の内側から矢が雨の様に飛んでくる。

ベムエルは大きく舌打ちをすると、アルベルトに近寄る。

「やっぱり、見破られていました!」

アルベルトは内心（やっぱりと言うな!）と思ったが表情には出さず、ファリスへ合図の狼煙を上げるように指示した。

かねてから打ち合わせていた「失敗の合図」である。

狼煙の白い煙は夜でも第4陣を攻撃していたファリスにも良く見えた。

そしてその瞬間姿を消す。

そしてアルベルト達の前に姿を現すと早速口を開いた。

「早いね」

アルベルトは内心（早いと言うな!）と思った当然表情には出さない。

「敵本陣までは行けるかと思いましたが、この第5陣は嚴重に警戒されていた様です。もしかしたらそもそもこの第5陣こそが敵の本陣なのかも知れません」

「じゃあ、計画はこのまま続けるの?」

「はい。続けます」

ファリスの声にアルベルトは頷いた。

その頃ムダル軍の方では、ザークが追撃を命じていた。

「数名は先行して敵の伏兵の有無を確認せよ。残りは俺に続け!」

敵がどのような策で来ようと見破ってみせる。

むしろこの様な策に出たのは、敵が全山焼き尽くせば勝てるという事にやはり気付いていない証拠ではないか。

だが全山焼き尽くせば勝てる事を、敵がいつ気付くとも限らない。何せ奴らは気付かないと思わせておいて、後々になってから気付く無能者揃いなのだ。

ザークはここで勝負を決めるべくリリエル軍への追撃を開始した。

アルベルト達は後退を続け、左右を林に挟まれた細い道に差し掛かった。

リリエル軍はその細い道を我先にと進んでいく。

そしてリリエル軍を追うムダル軍からもその光景は見えた。

ザークは地形を調べさせている幕僚を呼寄せて問いかける。

「あの林は迂回できるか？」

その幕僚は必死に記憶を手繰りその情報を探り当てた。

「北側の道を進めば迂回できます」

「よし。では北側の道を通るぞ」

こうしてムダル軍はリリエル軍を真っ直ぐには追いかけず、北側の道へと向かったのだった。

この光景を見ていたファークリスがアルベルトに声をかけた。

「あ。僕、北側に居る人達を呼んでくるね」

こうしてアルベルトの、ムダル軍を林に挟まれた道に誘い込み、ファークリスのファイヤーボールで火計にし、北側の道に置いた伏兵

で攻撃するという作戦もあっさりと破られたのだった。

そしてファリスは、北側の伏兵に「こっち敵が来るから逃げた方が良いですよ」と言いに行ったのである。

「また見破られましたね」

アルベルトはそう言うベムエルに内心（またって言うな！）と思いながら、目を合わせず「次だ。次！」と叫び、馬を走らせ続ける。

ベムエルは（そうは言っても、次で最後でしょう）と思いながらその後続く。

こうして北の軍勢も合流したりリエル軍はある窪地に辿り着き、そしてその窪地も過ぎて小高い丘の上に上った。

そこで向きを変えてムダル軍を迎え撃つべく待ち構える。

そこへムダル軍も追いつき、ザークは丘に登ったりリエル軍を見上げ眉をひそめた。

（軍勢は高所を占めた方が有利と言うが、それだけで2倍以上の戦力差を覆せるつもりか？）

ザークは「ふ」と鼻で笑うと、全軍に突撃を命じた。

ムダル軍がこちらに向かって進撃を開始する。その為には、当然一旦窪地を通る事になる。

アルベルトが手を上げると、その場にあるロープが引かれた。そのロープはこの場所から数百メートル離れたところにある堤防に続いており、そしてロープが引かれると堤防側に付けられている

大きな鈴がなる仕組みである。

勿論風で鳴ったのと間違えない様に鳴らす数は決められている。

3回鳴らした後、1回鳴らし、最後にさらに4回。

その合図で、その堤防の堰が切って落され、堰き止めれていた水が勢い良く吹きだす。

濁流が木々をなぎ倒し、猛スピードで戦場へと迫る。この水の巨竜によりムダル軍は一溜まりも無いはずだ。

だがその巨竜が咆哮を上げたすぐその後に、その堤防の方角に狼煙が上がるのが見えた。

アルベルトの背に冷たいものが奔る。

自分にはその様な合図する指示をした覚えは無い。

そしてムダル軍は、その狼煙を合図に騎士は馬首を、歩兵は踵を返し元来た道に戻って行く。

アルベルト必勝の水の巨竜は、虚しく誰も居ない窪地を水浸しにしただけに終わったのである。

ザークにはこの程度の策、児戯に等しかった。

敵は、兵力では明らかに劣勢であり、しかも頼みの綱の手から火の玉を出す魔物も、今ではほとんど役に立たない。

だが敵が戦いを挑んでくるのなら、何かしらの勝算を持って挑んでくるのは当たり前の話である。

そして魔物が当てにならず、それでも少ない兵力で勝利を望むな

ら、奇襲するなり、伏兵を置くなり、火攻めなり、水攻めなりの策を相手が弄してくるであろう事など、考えるまでも無く当然の事なのだ。

そして奇襲に備え、伏兵の有無を入念に偵察させ、火攻めも警戒し、水攻めを行うならこの堤防を使うであろうと、見張りを置いていたのである。

アルベルトの渾身の策もザークにとって見ればそれだけの事だったのだ。

ザークは水が通り過ぎ、軍勢が渡れそうな程度に水が引くと改めて進撃を命じた。

「敵にはもはや策は無い！ 押し潰せ！」

ザークの激に敵兵達も「おおー！！」と叫んで応じ我先にと進撃を開始する。

そしてこの光景を目の当たりにしたアルベルトは、俯いて目を瞑り力なく口を開いた。

「これで決められるなら決めたかったのですが、やはり私の策では歯が立たなかった様です」

そして顔を上げると力なく笑い、ファリスに向かって肩をすくめた。

ファリスもそれに対して少し笑って肩をすくめ、次の瞬間その姿は消えた。

瞬間移動で姿を現したファリスの前に、水が通り過ぎた後に改めて進撃してくる敵軍の姿が見えた。

彼らは水しぶきを上げながら、雄たけびを上げて向かってくる。すでに勝利を確信しているのだ。

そしてその先頭にあの時の、一番初めにファリスがムダル本陣を攻めた時にファリスに向かってきた男の姿があった。そしてファリスはやっぱりこの男だったかと思った。

その男もファリスに気付いたらしく、ファリスに向かって大声を発した。

「は。ヘタレが！ お前はそこで何も出来ず味方がやられるのを見ておれ！」

その男の言葉にファリスは自嘲気味に呟いた。

「そうだね。僕はヘタレだね……」

（あなたはすごいね。アルベルトさんの作戦をすべて見破り、この世界では無敵と思っていた僕の魔法もあなたには役に立たなかった）

ファリスの右腕に魔力が集中する。

限界を超えての魔力の集中にファリスの足元がふらついた。

「でも、どんなにすごくても、知らない事はどうしようもないよね？」

魔力が弱く技術もないファリスは、敵と戦う時ずっと使い勝手

の良いファイヤーボールのみを使っていた。

だが、ファールリスが使える魔法は後2つある。

1つは、魔力が弱くて威力の弱いブリザード。

そしてもう1つは、ファイヤーボールよりも威力は強いが、技術が無いのでどこに飛ぶか分からないサンダーボルト。

ファールリスが水浸しの地面に拳を突き立てると、電撃が水を伝いまずムダル軍の歩兵が悲鳴を上げる間もなくバタバタと気を失い倒れる、そしてそれと同時に騎士が乗っていた馬が棹立ちになり、騎士達も地面に投げ落とされた。

そしてその騎士達も水浸しの地面に落ちた瞬間、ビクンと体を痙攣させたかと思うと、すぐに動かなくなる。

アルベルトの見破られるという前提の作戦と、ファールリスの今まで見せた事の無い魔法での唯一の勝機だった。

だが、地面に拳を突き立て、俯いていたファールリスの耳に聞こえるはずの無い声が聞こえた。

「この……魔物が……」

ファールリスが拳を突き立てたまま顔を上げると、そこには電撃を食らいながらも、危なげな足取りではあるが、一步一步こちらへと近づいてくるザークの姿があった。

ファールリスはさらに魔力を右腕に込める。

すでに魔力は限界を超えており、さらなる魔力の放出にファール

スの膝が崩れた。

それでもファールリスはザークから目を離さない。

そして、そのザークもファールリスを睨みながらさらに数歩進むのが限界で、遂には膝を付き前のめりに倒れたのだった。

ファールリスはそれを見届けると、そのまま仰向けに倒れた。

この様子を見守っていたアルベルトは全軍に指示を出す。

「敵を全員捕縛し、武装解除せよ！」

この命令の元一斉に進撃するリリエル軍の前に、後方にいて助かった僅かばかりのムダル軍将兵は蜘蛛の子を散らす様に逃げさる。

そしてアルベルトとベムエルはファールリスに向かって馬を走らせた。

「ファールリス殿、大丈夫ですか！」

ファールリスはその声に応じて、仰向けに寝転がったまま、右の拳を天に突き上げた。

その泥だらけの拳は、ヘタレにしては力強く感じられた。

ムダル軍の大半は捕らえられ、武装解除されて捕縛された。

そして雑兵及び比較的身分の低い者達は、ムダル領へ辿り着けるだけの食料を持たされ開放される事になった。

さすがに皆殺しなどは出来ず、ずっと捕まえて置く訳にも行かな

いのである。

だが、身分の高い者、軍首脳部は遠い異国へ奴隷として売られるという。

ファリスは「いくらなんでも奴隷って……」と眉をひそめたが、アルベルトの「彼らの所為で領内の多くの人間が亡くなったのです。殺されないだけマシと思って貰わないと」という言葉に、二の句が継げず黙り込むしかなかった。

だがその中でも司令官であり、ムダル領主の跡取りであるディエゴは返される事となった、司令官ならば一番の責任者でありどうして？　とも思われるが、領主の跡取りを奴隷に売ったり、処刑したりすれば、ムダル領主は逆恨みをし何度でもリリエルに侵攻を繰り返すかも知れないのだ。

しかもこのディエゴは、ファリスに怯える事はなはだしく、ムダル領をディエゴに継がせれば、二度とリリエルには手を出さないだろうと思われたのである。

さらにディエゴを開放する条件に、ムダル領主から多額の金銭を要求する予定だという。

「身代金と言えば聞こえは悪いですが、まあムダル軍によって損害を受けた領内の損害賠償金というところでしょうか」

アルベルトはファリスにそう説明した。

「そう言えば、あの人は？　確かザークっていうんだっけ？」

アルベルトはその名を聞いたとたん眉をひそめた。

「あの男も勿論奴隸として異国に売り払います。しかも出きるだけ遠くに」

「そう……」

「興味が御ありますか？」

フアーリスは首を振る。

「ううん。ちょっと気になったから」

「まあ、会わない方が良いでしょうな。今、あの男は口枷も付けられておりますし」

「口枷？」

アルベルトは、少し俯いて目を瞑り首を振りながら答えた。

「ええ。数日前に、看守を言葉巧みにたらし込み、脱獄をしようとしたのです」

「そうか……」

フアーリスは複雑な表情で呟いた。

そして全ての処理も終わり、こうしてムダル軍によるリリエル侵攻の戦いは終わりを告げたのだった。

28…ヘタレのエピローグ

ついに待ちに待った戦勝の宴の日である。

空も晴れ渡り雲ひとつ無く、天もこの日を歓迎しているかの様である。

もはや敵襲の心配のなくなったと判断したクリストフは数日を掛け念入りに準備をさせたのだ。

そしてその結果、例え王族を招いたとしても恥かしくないほどの装飾と、料理が用意され、その光景にクリストフは満足げに頷く。
しかも宴は昼間から行われ、舞や音楽、はては寸劇までが準備されて夜まで続く事になっている。

クリストフは宴の開始を今か今かと落ち着きが無い。

だが開始しようにも戦勝の功労者であるファリスと愛しい一人娘のティーナの姿が見えないのだ。

ファリスと愛しい娘の事を考えるとクリストフの胸中は複雑だった。

確かに今回の戦いにおいてのファリスの働きには感謝はしている。

そしてそのファリスと娘が、なにやら仲が良さそうな事も分かっている。

しかし、だからと言ってどこの馬の骨どころか、異世界の人間などに大事な一人娘をやるわけには行かないのである。

娘の親としては当然の考えだろう。

やはり、娘の婿には同じ貴族が良い。

現在、うやむやにはなっているが、今後の事も考えるとやはりテ

イーナの結婚相手には、ヴィデンの跡取りが一番だろう。

だいたい一度は婚姻の約束を交わしているのだ。

むしろ、それを反故すれば今度はヴィデンに攻められかねないのである。

だが今はそれよりも宴である。

待ちきれなくなったクリストフは、痺れを切らして口を開いた。

「やむえん。宴を開始しようではないか」

だがさすがに近習の者達が止めに入る。

「最大の功労者であるファリス殿と、ティーナお嬢様がまだいらつしゃいませんが……」

だがクリストフは「かまわん。かまわん」とグラスを高々と掲げた。

そうなる则ち他の出席者達も領主に逆らう訳にもいかず、同じ様にグラスを掲げる。

だが、まさにクリストフが「乾杯」と宣言しようとした瞬間、ボルジが駆け込んできた。

「御領主様！ 大変です。ティーナお嬢様とファリスがどこにも居ません！ 駆け落ちです！」

「なんじゃと！」

クリストフは絶叫してグラスを床に叩き付けた。

その光景を見ていたアルベルトとベムエルは互いに目を見合わせ、

ベムエルはおどけた様に肩をすくめる。

そしてアルベルトも小さく微笑み、2人はクリストフから見えない様に、こっそりとグラスをカチリと合わせた。

フアーリスとティーナは、リクルハルド城を背にリリエル領外へと抜ける道を懸命に駆けていた。

だが不意にフアーリスが立ち止まると、ティーナに話しかける。
「でも、本当に良かったの？」

フアーリスの声にティーナも立ち止まり振り返った。

「だって仕方ないじゃない。城にいたら私、ヴィデンの跡取りと結婚させられるわ」

「でも、ヴィデンの人達怒らない？」

ティーナは腰に手を当て、言い聞かす様に口を開く。

「大丈夫よ。他の男と駆け落ちしたなんて聞いたら、もう自分の所の跡取りと結婚させようなんてしないわよ。もしかしたらお父様に慰めの使者を送ってくるかも」「このたびは、ご愁傷様です」って」

「そうだと良いんだけど」

「それとも、城に戻って今度はヴィデンの軍勢と戦う？」

ティーナが「どうするの？」といった感じで首をかしげる。

フアーリスは少し肩をすくめて答えた。

「うーん。もう戦いはこりごりかな」

そのファールリスの言葉にティーナは笑い出し、ファールリスも釣られた様に笑い出した。

そして2人は手を取り合うと、笑い合いながら改めて領外へと走り出す。

2人の背にはリクルハルド城がそびえ、そして空は青く、どこまでも晴れ渡っていた。

FIN

28：ヘタレのエピローグ（後書き）

これで完結です。

感想。評価などを頂ければ次作への励みになりますので、うれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1235s/>

ヘタレな勇者

2011年11月13日14時56分発行